

# 日本人の誇りと責任



## 東儀秀樹 (雅楽師)

1959年東京生まれ。奈良時代から1300年にわたり雅楽を世襲してきた東儀家に生まれる。幼少期を海外で過ごし、クラシック、ロック、ジャズなど幅広い音楽ジャンルに接する。帰国して高校を卒業後、宮内庁式部職楽部に入り、宮中儀式や皇居での雅楽演奏会、海外での公演に参加。1996年宮内庁を退職、同年『東儀秀樹』でアルバムデビュー。古典の継承のかたわら、雅楽器と現代音楽を融合させた独自の音楽活動を展開する。2015年、筆策によるアルバム『日本の歌』をリリース。著書に『すべてを否定しない生き方』（ロングセラーズ）、『雅楽——僕の好奇心』（集英社新書）、『雅楽のこころ 音楽のちから』（大正大学出版会）など。

# T

OGI Hideki

日本の伝統芸能というと、だいたいの方は歌舞伎、狂言、能、郷土の神楽などを思い浮かべるだろう。いろいろなメディアで紹介されているし、接する機会もある。音楽芸能だけでなくとも着物の文化、茶道、華道など様々なものが連想される。日本人にとっても外国人にとってもニッポンの伝統文化というたいい江戸時代あたりの様式や物事を思い描く傾向にある。でもそれだけではないのが日本のすごいところなのだ。もっと言えばそれよりずっと古い文化に驚くべき重要なものがある。でもあまり取り上げられない。それが「雅楽」なのだ。

いまでこそいろいろなメディアにも登場したり一般の演奏家が存在するようになったが、数十年前までは考えられなかった。それはあまりに庶民的なところから遠かったからか。でも確実に日本の文化なのである。よく「ワビ、サビ」という言葉で文化が語られるが、実は「ミヤビ」を忘れてはいけない。「ミヤビ」があったからこそ、削ぎ落としたものとして「ワビ、サビ」が生まれたとも言える。だからどちらも重要なのだ。

しかも雅楽は今や日本の文化のルーツ的な存在であるけれど、もっと遡れば大陸文化の流れを汲んでいる。笙や箏などの楽器や表現される演目は2000年近くの歴史を変わることなく歩んで継承されている。そしてそれを紐解くと古代の人々の宇宙観、哲学、自然との関わり、精霊との関わり、美しいものへの探究心など、ありとあらゆるものが織り込められた芸能であることを知る。そして実はこの、当時のままの雅楽文化は大陸ではすでになくなってしまっている。地球上

千年以上も前のシルクロードの空気をそのまま再現できる芸能が残っているのは唯一日本だけなのだ。だから雅楽を継承することは日本人が日本の文化を大事にするということばかりではなく、地球の音楽文化のルーツを継承し、守るという、とても大きな責任と誇りを持つことになるのだ。

そんな大変なものが存在しているのに接する機会があまりに少ないせいか自国民は内側の文化のすごさに気づかないままであったりする。これはもったいない。オリンピックが開催されるからということで政治家たちが、「日本人はもっと英語を話せるようにならなければ」などとお粗末なことを掲げる。日本に興味を持って訪れる外国人は日本人の語学力を期待するより文化に接することを優先する。そんなときに文化のことを聞かれて「知らない、わからない」と英語で答えることほど恥ずかしいことはない。

今からでも遅くはない。きっかけはいくらでもある。僕が筆策でポップスやジャズを演奏することで堅苦しくなく楽器の特徴に触れることからだって、古典や歴史への誘いになる。文化は学校の音楽の授業などで堅苦しく説明するものではない。試験に出るからと無理やり暗記するものではない。自ら能動的に触れなくなってしまふ空気を作ることが大事である。その入り口はどんなものでも誰かしらの入り口になればいい。音楽は実に自由なのだから。

そこからいつのまにか「ミヤビ」ってなに？「ワビ、サビ」ってなに？ 本来の姿は？……と、いくらでも広がってゆく道ができる。

# 開かれる和の伝統

## —— 笹岡隆甫「未生流笹岡」家元・内田由紀子教授対談



笹岡隆甫（ささおか・りゅうほ） 華道「未生流笹岡」家元。京都ノートルダム女子大学客員教授。大正大学客員教授。1974年京都生まれ。京都大学工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。2011年11月、「未生流笹岡」三代家元継承。日本—スイス 国交樹立150周年記念式典、京都市—フィレンツェ市姉妹都市提携50周年記念式典など海外での公式行事でもいけばなパフォーマンスを披露。環境破壊防止を呼びかける「DO YOU KYOTO? ネットワーク」世話人。著書に『美的生活のヒント』（マガジンハウス）、『百花の教え——あなたの美しさを引き出す華道のエッセンス』（ぶんか社）、『いけばな——知性で愛でる日本の美』（新潮新書）がある。

というのは、どういうものなのでしょう。

笹岡 私はよく西洋のフラワーアレンジメントと日本のいけばなの違いについてお話します。フラワーアレンジメントはいまの瞬間が最高であるように花を飾るという発想が中心です。それに対していけばなは、時間経過とともに移ろいゆくものを最後まで見届ける。つぼみを残しておいて、その

つぼみが開いていく姿を見るとうれしいし、年を重ねていくのは素敵だなということを、花から教わります。

いけばなにおいては、花は師匠です。花が美をつくり出すための道具であるのは洋の東西を問わず同じなのですが、単に道具として見るのではなくて、花を師匠として見るのです。たとえば、チューリップのような春の花は、寝かせておいても勝手に花の顔が上を向いていくんです。太陽に向かって伸び上がる力強さがあるって、いけた花もそうです。そんな姿を見ていると、人間は辛いときや悲しいとき、いま新型コロナウイルスで沈んでいてうつむきがちになるけれど、そんなと

### 花を師匠として見る

内田 今回、『こころの未来』の特集で、こころをどう捉えるかということを考えています。

たとえば、いけてあるお花を見ると、たぶんお花自体が持っているこころ、森羅万象の自然にあるこころと、いけられた笹岡さんのおこころであるとか、その笹岡さんに、いろいろなこと、いろいろな方が影響されて、集合体としてのこころができ上がっていると捉えることもできると思うんです。華道に現れるこころ

きこそ上を向かなくてはいけないというふうに花から教わります。いけばなにおいてはその時間がとても大事ではないかと思います。

**内田** それは、花との対話みたいなものですか。

**笹岡** おっしゃるとおり、まさに対話ですね。

**内田** 花にこころが宿っていて、自分に何かを教えてくれるという感覚は、私はとても日本的な感じがします。それは、直感的に学んでいくものなのですか。それとも、書物にはっきりと書かれているのですか。

**笹岡** 「師匠だ」とは書いてありませんが、口伝的な感じでは、流派を問わず、華道家みんなが当たり前のように共有しているのではないのでしょうか。

**内田** なるほど、でもそれは全然当たり前ではなくて、すごいことだと思うんです。私はアメリカに留学していたのですが、アメリカの人と話していて一番違うなと思ったのは、自然観です。もちろん、アメリカのみなさんも自然が大好きですし、「美しい」「守らないといけない」というのですが、一方で人間と自然の違いのようなものをすごく意識されていると思います。

人間が持っている、ある種のコントロールする力に対して、良くも悪くも過信しているようです。つまり、人間はこれだけのことができるから、人間がしっかり自然を守らないといけないとか、人間がいろいろと考えないといけないという発想につながる。一方で、人間のほうが強いと考えているから、花から学ぶみたいな発想は出づらいですね。

たとえば、海外の方がお花を学ばれるとき、その本質的な部分はお伝えになるのですか。

**笹岡** もちろん、いけばなには日本人の自然観が色濃く反映されていると話しますし、人間と自然が対立する存在ではなくて、人間も自然の一部であるという価値観を日本人は昔から持っており、それがいまのいけばなに影響を与えているという説明をします。

**内田** そのとき、どんな反応がありますか。

**笹岡** 「ああ、そうか」と聞いてくれてはいますね。いま「SDGs<sup>1)</sup>」がメインストリームのようにになっていますが、日本人は昔から自然ともっとうまく付き合ってきました。だからSDGsなんていう言葉を使わなくても、人間も自然の一部であると捉えて自然と付き合い合えば、環境問題もうまく回っていくのではないかと思うんです。

**内田** おっしゃるとおりだと思います。SDGsにしても環境保護にしても、発想としては人間が主体なので、人間を行動の中心に据えて「自然を保護する」運動につながりやすい。逆に言うと、そこは日本が苦手とするところでもあります。自然と共生することが当たり前過ぎて、「じゃあ、条例をつくって守りましょう」みたいに動くのは得意ではない。でも一方で、日ごろか



内田由紀子（うちだ・ゆきこ） 京都大学こころの未来研究センター教授。専門は文化心理学・社会心理学。1975年、兵庫県生まれ。京都大学教育学部教育心理学科卒業、同大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）。ミシガン大学客員研究員、スタンフォード大学客員研究員、京都大学こころの未来研究センター助教、准教授等を経て2019年より現職。著書に『これからの幸福について—文化的幸福観のすすめ』（新曜社）、共著に『「ひきこもり」考』『こころ学への挑戦』（共に創元社）、『農をつなぐ仕事～普及指導員とコミュニティへの社会心理学的アプローチ』（創森社）などがある。

ら自然を尊重する気持ちが自ずと生じている分、自然に対する態度も調和的です。

そういうことがいけばなにも自ずと出ているという感じがします。たとえば、フラワーアレンジメントでは、「花が師匠だ」という形では教えられないのでしょうか。

**笹岡** 「花から教わる」的なところはないでしょうね。象徴的なのは、花をいけた後のお世話の違いです。フラワーアーティストは、いけたらそれで終わりなんです。いけた後、展示が何日間かあっても会場に来ません。お世話をしているのはスタッフの方です。

われわれは小さいころから、花をいけたら毎日世話をするということを刷り込まれています。たとえば私は、東京で花をいけていると、毎日京都から東京へ通ったり、泊まりがけでお世話をするんです。華道家って、いけた後がものすごく大事だと考えている。つぼみがほころんだり、実が落ちたり、葉っぱの色が変わったりしますよね。それを毎日見て、それに合わせて手を入れていきます。そういう部分も含めて、われわれの作品なんだという考え方は、華道家には共通してあるのではないのでしょうか。

**内田** なるほど、最後までかかわっていくことで、時

間の流れを花と共有する。

**笹岡** そうそう、やっぱり命に重きを置いているんだと思うんです。単なる美ではなくて、命であり、もちろんそこに人間が、自分の命を重ねて考えるという意味も含めてですけれども。命を最後までいけるということが、われわれの花との向き合い方だと思います。

そういう価値観であったり、花との向き合い方を、われわれは世界に発信したいし、それが最終的には環境破壊の防止にもつながっていくといいと思います。

## 開かれる和の東西

**内田** 西洋やほかの国の方がいけばなを学ぶときは、方法論だけではなくて、そういう精神性などもトータルで学ぶのですか。

**笹岡** そうあるべきだと思います。ただ、いまは難しいですよ。国内でもコロナ禍でいけばなの展覧会はできません。お稽古をしては駄目です、人と会うことは全部駄目です、みたいな状況になると、することがないんです。

**内田** イベントもなくなりましたしね。

**笹岡** そうなんです。われわれ家元のメインの仕事は、流派の先生たちを統率することですから、地方の先生方を集めて講習会をするのが本業なんです。地方へ行けないからそれができない。オンライン化しようと思うんですけど、高齢の先生方は、直接会わないと話ができないようなところがありますから、やっぱりオンラインではやりたくないんですよ。

だから、オンラインをやっているのは若い人向けで、大事な人たちとちゃんとつながることができていないのは問題です。本当は、ITは一番弱いその世代に行かなくてはいけないのが、行ってない。「GIGAスクール構想<sup>2)</sup>」で子どもたちからわれわれ世代まで、そしてうちの親世代くらいまでは何とかいけるけれども、そのさらに上の世代は無理ですね。しかも、お花の先生にはご家族と離れて暮らしている方が多いので、そこが一番弱いのは大きな問題です。

**内田** まさにデジタル・ディバイド（情報格差）ですね。テレビをパチッと点ける感覚でつながるようになればいいのですが。

**笹岡** まだそこまでは行ってない。オンラインだと海外との距離がなくなるから、発信はすごくやりやすいんですけど、そこは模索中です。でも、近い将来にやらないと、われわれのところで伝統が途絶えてしまうんじゃないかという危機感があります。オンライン、デジタルであれば、言葉の壁も越えるじゃないですか、機械が翻訳してくれるから。ですから、すごくやりやすい時代になっているのかなと思うんです。

海外の人たちはけっこう日本に興味がある人も多いですし、中国では、日本に来ていけばなを習うことがステータスになっています。

**内田** オンラインが入り口になり、そのあと日本に来てお花を習うことで裾野が広がればいいですね。

**笹岡** そうですね。それから、特にコロナのあいだ、材料を手に入れにくいという状況があります。普通のお稽古の花も手に入りにくいのです。京都はまだ入りますが、地方に行くと本当に入らなくて。伐る人がいないのでしょうね。それで、京都から送ったりしていたんです。でも、距離があると物が限定されるんです。たとえばツバキは弱いから送れないんです。キクは送れるけれども、バラを送るのは難しいとか。

**内田** しかも、海外となるとよけいに難しいですね。

**笹岡** そうです。中国はまだ近いのでやりやすいですが、ヨーロッパなどの海外では枝物が入らないので、われわれは現地でお花をいけるときは、必ず枝を伐らせてもらうところをまず探すのです。予めやり取りして、たとえば、「だれだれさんの邸宅の庭の木は伐っていいよ」という許可をもらって見せてもらって、「これを伐りたい」と伝えておきます。そして、現地に行って実際に伐るということをししないと、お花屋さんが枝なんて入れてくれませんから。サクラぐらいはありますけれども、味わいのある枝は手に入りません。

**内田** 季節や植生なども関係しますしね。

**笹岡** ええ。型を教えるだけなら、何かの棒でもお稽古はできるんですけども、花からいろいろなものを教えてもらうには、やっぱり花がある程度変わりゆくことが大事じゃないですか。つぼみで入手しないと聞いていくのは見られませんし、また枝がないと、枝振り、枝の曲線とか流れなどは表現できないので、乗り越えるべき課題は多いですね。

**内田** 南国に行くとうどんなんですか。

**笹岡** 南国は本当に大変です。沖縄でさえ大変ですから。われわれは、沖縄に行くときは花を担いで行くことが多いです。沖縄の花だと、お稽古はできますが、せっかくの講習会ですから、四季の花をやりたいじゃないですか。1年中ランばかりいけているわけにもいれない。温暖化が進むと、稽古もできなくなります。

**内田** いままでだったら摂理としての四季の変化だったのが、地球全体の变化も受け入れるといった話にならざるを得ないわけですね。いけばなの持続可能性を考えると、課題は多いですね。

**笹岡** そういうことですね。

## 家元と流派——組織の役割

**笹岡** われわれ家元は免許制度があるのですが、それ

を海外に持っていったときにどうするかは大きい問題になってきます。たとえば、芸事を維持するための費用は、いままでは広く浅くお稽古をしている人みなさんに負担していただくというシステムでやっていたのですが、そこをどう変えていくか。マイナー・チェンジでいけるのか、大きく変えなくてはいけないのかはまだわかりません。

**内田** ご著書を読ませていただいて、家元制度があることによって、組織として学ぶ、社会学習をシステムとしてやっていくということの重要性を認識しました。それを知らなかったのも、先生から生徒に教えて、何級みたいなのを取っていくというような、ある種の徒弟システムの1つぐらいに思っていたんです。そういう側面もあるのでしょうか、集団として、様式とか文化などをみんなで学習し、守っていくことが本質にあるような気がします。もちろん人は個人で自由にいろいろなことを学ぶこともできるのですが、集団で学ぶからこそうまくいくこともけっこうある。

**笹岡** そうですね。

**内田** 私が現在取り組んでいる研究では、まさに集団と個人の問題を扱っています。もともと心理学は個人主義的で、個人の総和が集団なので、個人ががんばることが重要だという考えだったのです。しかし、実際にいろいろなデータを見てみると、個人としては同じAさんなのに、あっちにいるAさんとこっちにいるAさんでも、考え方や幸福、健康も含めて、いろいろ違ってきます。それは、集団の持っている力が個人に影響を及ぼすことを示しています。そうすると、集団をいかにつくるかとか、集団をいかに守るかということも大事なポイントなのだと思います。

**笹岡** それは日本人には特に顕著ですかね。

**内田** おそらくそうだと思います。

**笹岡** 流派もそうで、その流派に所属している先生方は、みなさん流派に奉仕してください。私は小さいころから、おじいちゃん先生、おばあちゃん先生に囲まれて育って来ましたけれども、自分のことよりも流派を盛り立てることを大事にしてくださいという人たちが圧倒的に多い。流派ってそういう人たちに支えられて成り立っているところがあります。

**内田** そうなんですね。ではそれを海外の人たちにどう求めればいいのか。一方では裾野を広げないといけない。閉じた中だけでやっていて、だんだん先細りになることってどの組織でもあるので、たとえば免許制度みたいなことで、まず査定することで組織を守るといった考え方もあるでしょうね。海外にいる方でも、これをしっかり教えらるなら免許を差上げますということになればいいのでしょうか。

**笹岡** それは可能性としては大いにあり得ます。

**内田** でも、これは難しいところもありますね。たとえば、私のいる社会心理学とか実験心理学では、統計とか、アンケートの取り方、実験の手法などが確立されているんです。もちろん、統計は新しい技法が出てくるので、やり方自体はどんどん変わっていくのですが、発想は一貫しています。これぐらい確からしいという数値が出ないと、言い過ぎてはいけないという世界です。そのため、何人ぐらいにデータ・サンプルを取って、どういう統計処理をかけて、といったことのコンセンサスがあるわけです。しかも、心理学の方法論は西洋で確立されたものが多いですし、ロジックの立て方とか、概念の表し方、それこそそこをどういうふうに扱うかということも、全部、英語ベースなんです。この形式を超えるのは日本の研究者にとっては難しい。私たちは、ある意味、いけばなの世界でいうと、いけばなを学びたい海外の人みたいな状態なわけです。

**笹岡** そういうことですね。

**内田** 日本人が西洋流の心理学を学んで、その方法論を身につける。そうやって広がって、かつ、いままでだったらアメリカでしかデータが取れなかったのが、日本人の研究者が、日本でデータを取って、新たなことが見つかって、世界に還元していくことを学問としては求めているところもあるわけです。そうなんだけれども、私たちのモチベーションとしては、せっかくこっちで新しく見つけたものをうまく伝えたいわけですが、あっちのお皿に載せないと伝えられない。

このせめぎ合いが、すごく複雑で難しいなと思うことがあります。でも、そういう形に守られているからこそできることもたくさんあるなと気づくこともあります。つまり、何でもありになってしまうと、みな勝手に自分のやりたいようにやってしまうでしょう。そうすると、心理学の世界で普及している共通認識から外れてしまう。だから多くの人に研究の知見を届けるためには、何らかの枠が必要だとも感じるんです。閉じながら開くというか、お花も自由にいけてもいいという部分もありつつ、だけど基本はこれで、という部分もありますよね。

**笹岡** そうですね。その枠組みとして、1つは、いけばなの精神論的な、花との向き合い方があります。単なる道具として見るのではないという花との向き合い方です。もう1つは、流派が持っている方法論的な要素ですけれども、伝書に書かれている、昔の名人が編み出した基準みたいなものが枠組みになっています。

**内田** そこが一番崩せないものではないでしょうか。

## 朽ちた花にも“華”がある

内田 私はいま「畏怖・畏敬の念」の研究を行っています。畏怖や畏敬は、世界的に関心を持たれているんです。英語で「awe」というのですが、アメリカでaweの気持ちを説明されるのは、ヨセミテとか、グランドキャニオンなどの場所です。

笹岡 大自然ですね。

内田 大自然の景色を見たとき、「うわーっ」と思う。そのことによって、自分の存在はなんてちっぽけなんだろうと感じて、自分のいままでの認知が揺り動かされる。そのことによって、人に優しくなったり、他者について考えたりというふうに、価値観が変化することで注目されています。

でも、アメリカ流のaweを引き出すものというのは、まさに定義がヴァスト (vast)、とにかく巨大なもの、壮大なものになっていて、それはキリスト教的な感じもするんです。たとえば教会のカテドラルを見ると感嘆しますが、私は日本のaweは、単にポジティブというよりは、「畏れ」とか「敬う」という要素があって、あるいは自分が小さく感じるというもの、相手が大き過ぎてというよりは、自然の力に自分は敵わないという哲学的な思いもあるような気がします。

笹岡さんはお花と接してこられて、お花に対して畏怖・畏敬を感じるようなことがおありでしょうか。

笹岡 日本はどちらかというと、「八百万の神」的で、神を恐れるんだけど、けっこう身近な存在みたいな向き合い方があると思うんです。自然、特に花なんてまさにそういうところがあって、近い存在として見えています。京都の今宮神社で花鎮めのお祭りがありますが、お花には霊力がある。私はコロナのあいだ、キキョウとか、シャクヤクをよくいけたんです。キキョウは漢方薬の桔梗湯ききょうとうの材料だし、シャクヤクは葛根湯かっこんとうの材料の1つです。そんなふうに、植物にはお薬になるものがいろいろあって喜ばれたんです。畏怖という意味では、そういうお花の霊力を借りるみたいな思いは日本人にとって大きいのかなと思います。

内田 壮大で、「うわーっ」ではなくて。

笹岡 そうそう、「うわーっ」ではなくて、「ちょっと助けてください」(笑) ぐらいの向き合い方をしているのかなと思います。

もう1つ、畏怖・畏敬とはちょっと違いますが、われわれは朽ちた花をいけることがあるんです。普段はどちらかというときれいなものをいけがちです。そのほうが落ち着くし、不特定多数の人にはウケがいい。

でも、朽ちた花も大事で、特にハスかたたくをいけるときには、開いた花と、つぼみと、あと、花托かたたくというのです



清川あさみ「千年後の百人一首」原画展、特別内覧会の装花。苔むした老木から湧き出る「怨念」。(提供:未生流笹岡 家元事務局)

が、花びらが落ちた後のハチの巣みたいなものをよく合わせていけます。葉っぱも、いまから開く葉と、満開の葉と、朽ちた葉を合わせましょうとか、現在・過去・未来という感じで、朽ちた部分を大事にするんです。

朽ちたものに美を感じる、朽ちた花にも“華”があるという考え方はけっこう大切です。ある意味で、朽ちたものは「怖い」じゃないですか。人間でいえば、死に通じるようなところがあるから。でも、われわれはそういったものに美を感じる。こういうおどろおどろしさは、普段はいけないのですが、以前、清川あさみ<sup>3)</sup>さんというアーティストの方の絵に合わせて花をいけたことがあって、テーマが「怨念」だったのです。

内田 怨念ですか、まさに畏怖を感じそうです。

笹岡 「怨念をテーマに花をいけてください」、「もっとおどろおどろしいものを」と言われて、朽ちた花をいけたんです。ほかにも若い女性をイメージしたものなどいくつかいけたのですが、ろくじょうのみやすどころ<sup>4)</sup>をモチーフにした「怨念」という作品が一番注目されました。

内田 朽ちていく花から感じるエネルギーは、必ずしも怨念的なものではないかもしれませんが、いまから開く花とは全然違うエネルギーみたいなものがあるんでしょうね。

笹岡 そうですね。それがエネルギーなのかどうかはわかりませんが、ちょっと覗いてみたいという気持ちを起こさせるものがあるのかもしれない。

内田 ああ、わかります。

笹岡 きれいな花は、単に「きれいだ」で終わりがちですが、朽ちた花はそれを見ることで自分自身が何か気づきを得るようなところがあると思います。

内田 人生と重ねて見るのかもしれないですね。

## 美を体得する

**内田** 花をいける所作や、美しく花をいけることを体得されることを価値として身につけたり理解することとは、どういうことだとお考えでしょうか。

**笹岡** いけばなには型があるので、まずはそれを自分のものにするところからスタートします。「盗んで覚える」的な発想で、昔の名人がいけたものを寸分違わず再現するというのが最初であって、その土台の上に新しいものを積み上げていきます。

まずは古典となっている数百年分の名人の知恵がある。師匠から弟子へと研究研鑽を重ねて、華道家たちがつくり上げた成果ですね。唯一の解ではないけれども、最大公約数的な答えを各時代につくり出しているのです。まずはそれを自分のものにしましょう、と。型はその数百年分の知恵を、それこそ数時間で自分のものにできるのだから、すごく便利じゃないかと思いません。室町時代の美の基準、江戸時代の美の基準を自分のものにしていく作業が一番初めです。

先人の美を自分のバックボーンとして持っておきましょうというのがいけばな教室です。もちろん、最終的にはそれを破る<sup>しゅぼり</sup>守破離<sup>5)</sup>的なところは大事なんですけども、集団の基準をまず身につけて、そこから新しいものをつくっていく、その土台部分をつくり上げるのが流派ではないかと思うんです。

**内田** 長く積み重ねられてきたものだからこそ、たくさんの方の知恵とか変革とかがある。

**笹岡** そうですね。名人がそれぞれの時代につくった型が積み上げられてきたんですね。昔のものを捨て去らないってすごく大事だと思うんです。それが長い時代を経て残っているということは、それだけ確からしさがあるということですよ。

昔の名人と同じものが再現できれば、少なくとも、大多数の人が美しいと認めてくれるものができ上がる。だから、そこまでは最低限引き上げましょうというのが流派の考え方で、昔の名人のものが再現できるように教えられるのが師範代です。流派の技を伝え、思いを伝える役割を担う。新しいものをつくり上げるのは、そこから上です。それはもう各自がステップ・アップしていくしかない。

**内田** 自分で切り開いていけないといけない。それは孤独な作業ですね。それまでは先人のいろいろなものが応援してくれていたわけですよ。

**笹岡** そう、応援してくれていたんです。でも、新たな美をつくり上げるのは、生半可ではできません。

**内田** それはどんなときに「できる」のでしょうかね。

**笹岡** 人とバトルしながらつくり上げるのが一番かな

と思います。清川あさみさんとコラボしたお話をしましたが、そういう場合、半ば強制的に自分を変えなくてはいけない。お題を与えられるほうが、新たな美を生み出しやすいのかもしれない。

## おじいちゃん先生、おばあちゃん先生の教え

**笹岡** 私は祖父から流派を継いだのですが、小っちゃいころ、祖父の世代の先生たちと一緒に稽古をしていました。おじいちゃん先生、おばあちゃん先生がすごく多くて、たとえば、あるおじいちゃん先生は、自分が花を始めたきっかけについてお話をしてくれました。シベリアに抑留されたとき、一切れのパンをめぐって殴り合いのケンカをするような荒んだ生活の中で、1人の男性が、強制労働の帰りに持ち帰った草花——まあ雑草ですよ、それを空き缶に黙々と挿して、その人の背筋がしゃんと伸びているのを見て、いけばなになって生きざまだと感じた。それで、もし自分が再び日本の地を踏むことができたならば、いけばなの道を志そうと考えられた。実際、無事に帰国されて、うちの家元の門を叩いてくださったんです。

**内田** そして、いけばなの先生になられた。素晴らしいですね。

**笹岡** われわれはふだん、いけばなは生きざまだと感じない。趣味の1つみたいな捉え方をしていたんですけども、それを聞いて、ああ、そういうすごいものなんだということを教えてもらいました。

また、華道家は毎日のように花をいけますが、1週間、2週間経つといけた花が傷んできます。あるおばあちゃん先生は、その傷んだ花を処分するときに、毎回半紙に包んで、日本酒で清めて手を合わせるんです。

**内田** 供養みたいですね。

**笹岡** はい、これはなかなかできない。花に対する感謝の気持ちが、美しくいけること以上に大事なのだということ、その先生は教えてくださった。それは、花に対する畏敬に近いものかもしれません。

**内田** 花の魂というか、そういう自然の形があって、しかも変化していく。そこに人間との類似性や共感性を認めるからこそ、無下にはできないということでしょうか。

**笹岡** そうということですよ。

**内田** 西洋のaweは、宗教性とか、美しさとか、魂とかを感じさせるために、あえて触れないディスタンスを図って、それによってすごさを示そうとしているような気がします。しかし、日本の場合は、それに触れたり、自分も一緒に昇華していくことによって、そこから畏敬の念とかaweを得るといのがすごく面白いなと思いました。

## 「幸せ」の表現と花の表現はリンクしている

内田 そこにも通じるんですけども、私は「幸せ」について研究しています。幸せって、すごくきらきらしたイメージで語られることが多いんです。私自身は、それにわりと違和感を持っていて、幸せってそんなにいいものばかりではない、幸せになるためには努力も必要だし、1人の幸せが同時に周りも幸せにするかという、そんなこともないような気がします。また、幸せは移ろうものでもある。でも、「幸福感の研究」は、幸せって「いいものです」という前提からスタートするんです。なので、みんな一緒に幸せになりましょうという話になって、それ自体は良いメッセージであると思うものの、幸せの負の側面も抱き合わせて考えないといけないと思っています。そういう意味でいうと、この発想は日本的かもしれません。でも、朽ちていく自然とか、何となくおどろおどろしい部分とか、そういうものを含めて「美しい」と思う感覚が、私たちの「幸せ観」と連動しているような気がするんです。

笹岡 なるほど、「幸せ」の表現の仕方と、花の表現の仕方は、リンクしているのかもしれないね。

内田 そうだと思います。対称性と非対称性が関係があるかなと思いました。完璧な対称性、シンメトリーとアシンメトリーの違いでしょうか。アシンメトリーというのは陰と陽に近いという気がします。

笹岡 おっしゃるとおりです。われわれは不完全を尊ぶので、あえて左右のバランスを崩した表現をしますけれども、そういうところは日本人の物の考え方の反映だと思います。いまお聞きして腑に落ちました。

内田 顔の研究で、左右が完全に対称であれば美しい顔と思われるという研究があるんです。平均顔が美しいという話です。人によって、目が大きい人、小さい人、いろいろありますが、それを平均化していくと、ツルンとした顔になります。それは、ある意味で美しいんですが、私たち日本人はちょっとそこに歪みがほしいみたいになりますよね。

笹岡 左右がまったく同じだったらかえって気持ち悪い気がします。日本人と海外の人はそんな違いがあるのかもしれない。

内田 たとえば、整形手術は、同じ東洋でも韓国の人には積極的にやる人がいるそうですが、日本人にはあまり好まれないようです。それは完璧過ぎるものに対するある種のネガティブな感覚があるのかなと思います。

笹岡 たしかに、日本人には完璧だとかえって不自然に見えるちゃうんでしょうね。自然というのは歪いびつなので。

内田 そうなんです。自然というのは、そもそもそん

なに完璧なシンメトリーではありませんね。

笹岡 たとえば、富士山は全体に均等に見えますが、それでもちょっと違います。私たちは自然をお手本にして物をつくっていくので、必ずと不完全なものになるのかもしれない。

内田 自然が前提にあり、自然から学んでいますよね。

先ほどの陰と陽に関する思想のようなものが、お花の中にもいろいろと現れているのですか。

笹岡 陰陽の思想は、いけばなの中にとっても深く根づいていると言ってもいいのではないかと思います。

未生流笹岡隆甫は江戸時代にルーツがありますが、江戸時代はいけばなが広がった時期で、一番栄えた時期でもある。当時、古代中国で生まれた陰陽思想が注目されていて、そういったものを踏まえてデザインするのが当たり前だったのではないかと思います。

わかりやすいところで言うと、床の間ですね。光が入ってくるほうに明かり窓があって、そこから床の間に光が射す。反対側は光が入ってこないで暗い。空間に陰陽があるから、当然そこにいける花も陰陽を踏まえたものになる。陰翳礼讃いんえいらいさん的な日本の空間がつくり出したものとも言えるのではないかと思います。

内田 明かりの取り方などは、まさにそうですね。

笹岡 それで、光が入ってくるほうは大きく枝を伸ばして、反対側はちょっと抑えます。

## 文理融合より寄り道が大事

内田 笹岡さんは大学・大学院で建築を学ばれましたが、いけばなと建築のつながりはどんな点があると思われませんか。

笹岡 いけばなは建築空間を装飾するという役割を持って生まれてきたので、そういう意味では、切っても切れない関係にあります。しかしもう日本でも床の間のある家って少ないですし、いまの空間の中で花を飾る場所をどうつくるかはけっこう大きな課題です。

内田 確かにそうですね。

笹岡 お家の中に飾る棚がありませんし、自宅にあまりお客さんを呼ばないようになると、家に花を飾っても見る人がいない。ワンルームの子たちだと、テーブルの上がお花で占められていて、ご飯を食べるときはお花をどけたりしてね(笑)。壁に唐紙を貼って釘を打てばそれが床の間になるので、そういうことを発信していくことも大事かもしれません。

内田 いま「文理融合」とか「学際融合」が叫ばれて、何か一緒に物をつくらないといけないという話が多いんです。大学だと、たとえば、建築と心理学の人が一緒にこれをつくりましたという、成果物を求められることがあります。でも、私はよその分野から入って



るちょっとした情報などのほうが実は重要なのではないかと思います。もちろん成果物はあればいいのですが、成果物だけを目指す、「同じ山に、あっちとこっちから登って頂上で会いましょう」みたいな話になる。私は「こういう登り方もあるよ」というのを知ることのほうが、根本的には大事なのではないかと思います。

**笹岡** それはそうでしょうね。自分が花をいける上でヒントになるものをどこから得ますかという質問を受けることがあります。私は現代アートが好きなので、現代アートを見に行ったり、コラボしたりもしますが、そういうものから直接的に何かを得て物をつくっても、奇をてらったものはできるかもしれませんが、結局、それは残らない。それをやるのは悪いことではないかもしれませんが、たぶん本質じゃないんです。むしろ寄り道するところから得るものの方が多い。それこそ、小説を読んでいるほうが、アートを見に行くよりも大きな影響があるのではないかと思います。

**内田** よくわかります。無意識に溜まった知識とか、普段は意識していないちょっとした情報があって、ふとしたときにそれが出てくるような気がします。

**笹岡** 発達心理学と一緒にですね。真っすぐ効率を求めるのではなくて、ちょっと寄り道して、手探りで進んでいくほうがいい。

**内田** そうなんです。それがすごく大事なかなと思います。私は最初、古典文学をやりたいくて、それなら京大の文学部がいいだろうと憧れて入って、最初に古典文学の授業を受けたとき、「しまった。違った」と思いました。私は古典の物語を読むのがすごく好きで、それこそ六条御息所とか、大昔の人の話なのに、なぜこんなに共感したり、「やっぱり全然違うな」と思ったりするのか、そのポイントは何だろうということに関心があつたので、古典を学問としてやりたかったわけではなかったことに気が付いたのです。じゃあ、私は何をすればよかったんだろうと思って、行き詰まりました。それで、手当たり次第に本を読んだ中に、河合隼雄先生の『昔話と日本人の心』という本に出会いました。昔話の中にある日本人のここらと現代人のここらの共通性や違いなどが書かれていました。

すごく感銘を受けて、本当はこういうことがやりたいことかもしれない、河合先生のように、臨床心理学を勉強したいと思って、3回生で臨床を学べる教育学部に転学部したんです。でも私は臨床そのものをやりたいわけではなかった。どうしようと思っているときに、私の師匠になる北山忍先生が総合人間学部で、文化とコミュニケーションを研究していらした。歴史的なたて軸で人のここらの違いを勉強したかったのですが、これを横軸に変えて、空間が違うところにいる人



とのここらの違いを考えれば、昔の人のここらも理解できるようになるかもしれないと思って、文化心理学の道に進むことになったんです。ルートとしてはぐるぐる遠回りでしたけど、私の根底にある、古典が大好きだったころの気持ちとか、ちょっと臨床を勉強したときのことも、たぶん今の研究にも生きていると思います。

**笹岡** 結果的に、意味のある寄り道だったんですね。意図しないところ、寄り道や遊びの部分を持っていることが大事で、いろいろなものが一緒になって新しいものを生み出すきっかけになるのだと思います。

**内田** そうなんです。笹岡さんの来歴を拝見して、「笹岡さんも寄り道が大切とお考えなのかな」と思ったのです。今日はとても面白い、楽しいお話をありがとうございました。

**笹岡** こちらこそ、ありがとうございました。

(2020年11月9日、未生流 笹岡家元邸にて。撮影：坂井保夫)

#### 注

- 1) Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)の略。2015年の国連サミットで採択、国連加盟国が2030年までに達成するために掲げた目標。
- 2) GIGAはGlobal and Innovation Gateway for Allの略。学校における高速大容量のネットワーク環境(校内LAN)の整備を推進し、児童生徒各人が端末を持ち活用できる環境の実現を目指す文部科学省の事業。
- 3) 社会で活躍する女性の本質をとらえた『美女採集』シリーズなどで知られるアーティスト。
- 4) 『源氏物語』の登場人物。光源氏の恋人の一人だが、強い嫉妬から生霊となり人を殺す。
- 5) 日本の伝統的な芸事において、修業者に必要な心構え。

# 北米文化との比較でわかる日本文化の「ものの見方」

増田貴彦 (アルバータ大学心理学部教授)

MASUDA Takahiko



1970年、東京都生まれ。北海道大学文学部卒、京都大学人間・環境学研究科修了。2003年、ミシガン大学心理学部博士課程修了、博士号取得。北海道大学COEプログラムポストドクター研究員、アルバータ大学心理学部助教授、准教授を経て、2018年より現職。2015年より北海道大学社会科学実験研究センター連携研究員およびサマー・インスティテュート講師、2017年より一橋大学ビジネススクールにて夏期講座講師を担当。日本心理学会国際賞（奨励賞）、日本社会心理学会出版賞を受賞。専門は文化心理学。著書に『ボスだけを見る欧米人、みんなの顔まで見る日本人』（講談社）、『文化心理学——心がつくる文化、文化がつくる心〈上下〉』（共著、培風館）など。主要論文は、Masuda, T. & Nisbett, R. E. (2001). Attending holistically vs. analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 922-934. Masuda, T., Ellsworth, P. C., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & van de Veerdonk, E. (2008). Placing the face in context: Cultural differences in the perception of facial emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94, 365-381. など。

筆者は、学生時代にアメリカに留学し、その後カナダの大学に職を得て、かれこれ20年北米文化圏を拠点に活動している。専門分野は、文化とこころの相互構築性を探る「文化心理学」という分野であり、洋の東西、より絞って言うならば北米文化圏と東アジア文化圏を対比させながら、それぞれの文化圏に通底して流れる基調音ともいえる人間観・世界観の相違に着目し、そうした人間観・世界観が人々の「こころ」に及ぼす影響について実証的研究を続けている。コロナウィルスの蔓延で自由に移動ができなくなり、学術的な交流が減っている中で、この紙面において研究成果を紹介できることは、まことにありがたく感じている。

## 文化圏特有の人間観・世界観

多文化主義を憲法に掲げたカナダという国に身を置き、大学の研究室を運営していると、実に様々な民族的背景を持った人々に出会う。そうした人々と、時に衝突し、時に喜びを分かち合って暮らしていれば、私たちは同じ人間であるとしみじみ実感する。いうまでもなく私たちは肌の色、社会的・文化的出自、そして性別を問わず基本的なこころの基盤を共有している。一般的な心理学は、まさにこの点を理論的根幹に置き、「人間という種の本性は普遍的であるから、人間のこころをとりまく様々な外的要因をとりはらったところで研究をすれば、ありのままのこころを捉えることができるはずだ」と考えて成果をあげてきた。

しかし近年、そうした人間の共通

性のなかにも、それぞれの文化圏ごとに無視できない重要な違いがあることが文化心理学者によって報告されるようになった。たとえばアメリカ・ミシガン大学を中心にした研究グループは、北米文化圏に特徴的にみられる世界観を「分析的」<sup>アナリティック</sup>、日本など東アジア文化圏に特徴的にみられる世界観を「包括的」<sup>ホリスティック</sup>と呼び、それぞれの世界観の違いから、人のこころの働きに文化差が生じていることを実証的に示してきた<sup>1)</sup>。「分析的な世界観」を一言でまとめれば、世の中の事象はすべて要素に分割することができ、それぞれの要素のもつ特徴、要素間の因果関係を論理的に理解すれば、物事の本質にたどり着けるという考え方である。この考え方に基づけば、些末的なことにとらわれずに、核心となる事象を見出し、一刀両断のもとに明晰な判断をすることが肝要である。これに対し「包括的世界観」では、世の中の事象は複雑な因果の綾であり、なかなか一刀両断のもとに理解することは難しく、それでも多くのことに目を配ることで物事の本質にたどり着くであろうという考え方である。たとえば「木を見て森を見ず」といったことわざの背後には、一部を見るのではなく適度な距離感をもって全体を見渡して考えることが、物事の本質を理解するのに有効であるという考えがある。

2つの文化圏にこうした世界観の違いが出てきた背景には、古来から人間が社会生活を営み、自己と他者の関係を築くなかで生まれてきた人間観がかかわっているという議論も最近盛んである。たとえば、自らが

生活するうえで、独立独歩で物事をなすことが許されるような社会・生態環境であるならば、社会の構成員各々が自らのもつ性格・特技・能力を主体性のよりどころとして生きるという相互独立的な人間観が育まれる可能性があり、こうした傾向は先に述べた分析的な世界観と親和性が高い。一方、自らの生活が周囲の人々と緊密な人間関係を結ぶことによって成り立つような社会・生態環境であるならば、自らの主体性の源泉を他者や環境との接点に求め、自分にとって重要な他者の要請や期待に応え相互協調的な関係をもつような人間観が育まれる可能性があり、こうした傾向は先に述べた包括的世界観との親和性が高い<sup>2)</sup>。

こうした世界観・人間観は、その文化で生活を営む誰もがあたりまえと感じられる言わば「常識」のようなものである。それは成文化されて哲学書や経典のような形になることや、ことわざや格言として日々のコミュニケーションのなかに常套句として残ることもあれば、もはや言語化すらされずに慣習として行為の中に埋め込まれていることもある。もちろん常識の拘束力はそれほど強いものではない。人には個性があるので、常識に反発することもできれば、常識をよりどころにして生きることもできる。しかしいずれの場合にも、ある文化圏に生まれ落ちた以上、すでにある世界観・人間観を参照し、それをアンカーにおいて意思表示している点において、その基調音の影響から逃れられていないのは同じである。

## 「ものの見方」に現れる文化差

もしも世界観・人間観に洋の東西で体系的な違いがあるのだとすれば、「ものの見方」、いわゆる視知覚もまたそうした文化的経験の産物なのだろうか。「ものを見る」という行為は、基本的なこころの働きであ

り、そうした部分にまでは経験による影響はないだろうと思える節もある。しかし必ずしもそうした予測は正しくないことを示す研究が数多く報告されている。たとえばエドワード・アデルソンの有名な「チェッカーシャドウ錯視」の図では、濃いグレーと薄いグレーの市松模様が、ボードの右端にある円柱から伸びた影のせいで、Aのグレーと、Bのグレーを、それぞれ濃いグレー、薄いグレーと認識してしまうが、実際二つの色を並べてみると、全く同じであること（図1）。

この驚きは、私たちが太陽の下で生きる中、「影の部分は日の当たる部分に比べ色が暗いが、対象物の色は同じである」ということに経験的に慣らされ、それを画像として提示された場合でも、同様の「構え」によって修正を行っているためである。こうした例は、私たちが経験にもとづく「構え」によって見るものに解釈を加え、選択的に選び取っていることを示している。先に述べた文化的に育まれた世界観・自己観というものも、まさにこの「構え」に他ならない。ならば文化的な「構え」の違いで、全く同じ情報であっても、異なる部分に注意が向けられ、異なる解釈で「見られる」という可能性は大いにありうる。

## 日本文化特有の「ものの見方」

筆者は、この可能性を検証するため、魚と水中の風景のアニメーション画像を多数用意し、アメリカ人大学生と日本人大学生を対象に画像の内

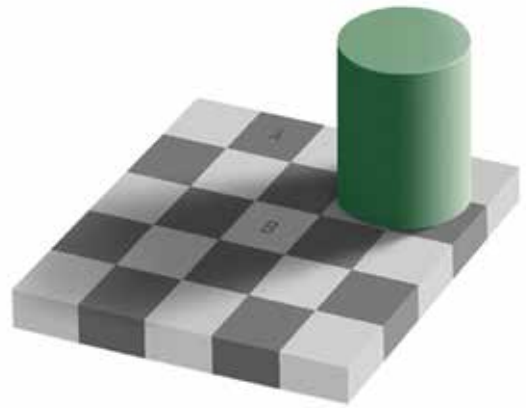


図1 Adelson (1995)のチェッカーシャドウ錯視

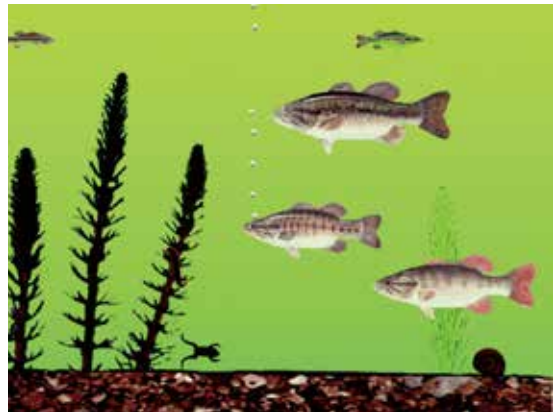


図2 Masuda & Nisbett (2001)の魚のアニメーション画像

容を自由に述べてもらい、一見なんの変哲もない単純なアニメーションの「見方」にも予想を上回る大きな文化差があることを示した（図2）。たとえば、アメリカ人学生は、図2のような画像に対して「3匹の魚が右から左に泳いでいきました。1匹は他とは違う模様でした」などというように、画面上で中心となる物体（この場合は大きな魚）に着目し、それを中心に言及する。一方、多くの日本人学生は、「水の色からして、池か湖のようなところで、魚は水草のほうへ泳いでいます」というように、まずフレームとしての周辺情報を同定して、その後、中心となる物体である大きな魚について言及し、その際にはとりわけ他の周辺にある物体と魚との結びつきに言及する。最近のアイトラッカーを用いた研究では、課題を行っている間の眼球運動にも、それぞれの文化のものの見方が反映されており、日本人学生のほうが欧米人学生よりも周辺情報を



(A)



(B)

図3 Masuda et al. (2014)の一致画像(A)と不一致画像(B)

注視する時間が長いということが分かっている<sup>3)</sup>。

こうした文化特有の傾向は、より社会的な認知課題でも見られる。例えば、画像に現れた人物の感情を評定する際に、周囲の人物がどれくらい影響を及ぼすかを測定した結果、先の課題と同じような文化差が見いだされた。この課題では、カナダ人学生と日本人学生を対象に5人の人物が並んだ画像を見てもらい、中心人物の表情を判断してもらった(図3)。この際、中心にいる人物が同じ表情でも、背景人物の表情は、中心人物の表情と一致しているもの(たとえば、どちらも笑っている)と、一致していないもの(たとえば、中心人物は笑っているが、背景の人たちは悲しそうな顔をしている)という2種類の画像を用意した。課題そのものは中心人物の表情に着目すればいいので背景を気にする必要はない。しかし日本人学生は、背景人物が悲しんでいるときよりも笑っているときのほうが、同じ中心人物の笑顔を見ても、喜びの度合いが大きいと判断する傾向にあった。一方、カナダのデータでは、中心人物の表情が同じであれば、背景に関係なく、同じ心理状態であると判断する傾向にあった。そして日本人をはじめ東アジア文化圏の影響を受けた人々が背景の変化に敏感な傾向は、最近発表された脳波

研究においても見出されている<sup>4)</sup>。こうした結果は、日本特有の周囲への配慮という認知傾向が、決して表面的ではなく私たちのところに根付いていることを示している。

筆者は、この日本文化特

有のコンテキストを取り込む傾向、背景を配慮する傾向は、幼少期からのコミュニケーションに立ち現れる包括的世界観や相互協調的自己観が経験を通して内面化された結果であると考えている。実際、日本文化には物事に調和がみられることをよくと考え、周囲に気を配り、関係性を重んじるような慣習にあふれている。「和のこころ」「絆の大切さ」「場の空気をよむ」というような言葉はそうしたことを示す一例である。たとえば過去の乳幼児発達研究では、日本人の親は、乳児とおもちゃをつかって自由に遊ぶ際に、おもちゃを交換するなど、自分・乳児・おもちゃの関係性を重視したコミュニケーションをとる傾向が強かったのに対し、アメリカ人の親は1つのおもちゃをとりあげ、乳児に注意を促し、その特徴を教えるような遊び方をする傾向があったことが報告されている<sup>5)</sup>。この結果は、幼少期の段階で私たちは文化によって異なる「構え」に触れ、経験を積み重ねていることを示唆した例である。

### 背景を重んじる日本の視覚芸術

こうした文化とこころの関係は決して一方的ではなく、むしろ相互構築的であるといえよう。それぞれの文化に通底する世界観・人間観の影

響を受けた私たちは、今度はそれを足掛かりにアウトプットすることで、その文化を再構築することに寄与している。そうであるならば、個人の創造物、たとえば絵画・写真といった視覚芸術表現もまた、その文化に通底する世界観・人間観が反映していると考えすることは想像に難くない。日本の視覚芸術は背景情報が充実するような技法に溢れている。視点を定めることによって三次元的世界を二次元上に表現するという西洋的な線遠近法ではなく、水平線を高い位置に据えた俯瞰図的な画法や、前景と背景を描き分けながらも相互に関連しあえるような距離感を保った平面的かつフラットな画法はそうした例である。実際、北米文化圏と東アジア文化圏の美術館に所蔵されているマスターピースを比較すると、背景情報量の文化差は顕著であった。そしてこの傾向は、特に美術を専門としていない人々にもみられ、アメリカ人学生と東アジア文化圏の留学生に風景画を描いてもらう課題とモデルのポートレートをカメラで撮ってもらう課題に取り組んでもらうと、東アジア文化圏の留学生はアメリカ人学生にくらべ、どちらの表現においても背景情報をかなり入れ込むことが明らかになった。さらに日本とカナダの児童・青少年の発達データでは、日本人が絵画表現で背景情報への配慮を始める傾向は段階的に生まれ、その兆候は小学校2年生くらいからみられることが明らかになった<sup>6)</sup>。

日本絵画にみられる前景と背景の距離感は、広い範囲を見たい欲求と、前景と背景を結びつけながら見たいという欲求が重なりあう想像力の産物であり、ユニークで面白い。そして、こうした日本の視覚表象の独自性は、昨今メディアで論じられることが多い。画家による現代的な日本画作品がセンセーショナルに発表されることや(図4)、現代美術家たちが世界に向けて日本から発信を行っ

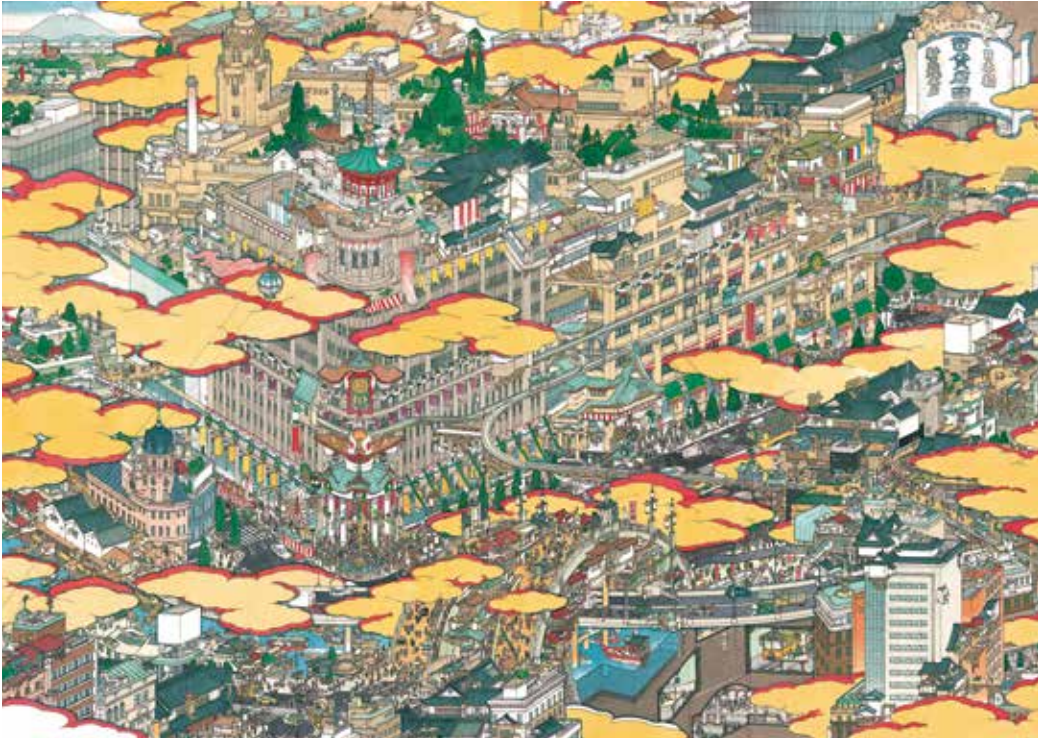


図4 山口晃《百貨店圖 日本橋 新三越本店》2004 紙にペン、水彩 59.4×84.1cm 所蔵：株式会社三越伊勢丹 ©YAMAGUCHI Akira, Courtesy of Mizuma Art Gallery

た「スーパーフラット」という言説は、そうした機運の例である。筆者は、対象とする文化において生み出された文化的生産物カルチュラル・プロダクトを研究することは、文化とところの関係の理解を深めてくれると考えている。

## 心理学における国際的な比較研究の機運

文化圏特有の世界観・人間観は偏在している。ときには研究者すらもその影響から逃れることができない場合がある。たとえば近年、北米の心理学学術誌に掲載される90パーセント以上の研究結果が、世界人口からいけば数パーセントにも満たないグループの人々——北米の大学に通う若者——を研究対象者として行われており、この代表性の乏しいサンプルだけで、人間のところを普遍的に語るのには問題があるのではないかと、当の北米研究者の間で論じられるようになっていく。北米生まれの研究者ならば、同じ文化的特徴を備える学生からデータを取り、今までそのデータに依拠して人のところについて論じていたのは当

然ではある。しかしこうした研究者が、自らを「西洋人で、教育を受けた、先進国の、豊かで、民主的な、風変わりな人 (WEIRD)」と戯画化して心理学の刷新を試みているのである<sup>7)</sup>。そうした機運の中、日本文化をよく知る人々・日本文化で活躍する研究者から発信される情報は、心理学の国際性を考える上でも貴重であり大きな需要がある。

もちろん、日本文化特有のこの働きを早急に一般化することは、北米研究者と同じ轍を踏むことにもなりかねず、これはいわゆる「日本人論」が多方面の研究者から厳しい批判にさらされてきた学問の歴史に鑑みても明らかである。しかし筆者は、海外生活を続ける中で見えてくる新鮮な発見を日々経験しており、そうした経験に基づいて集めたデータをオーディエンスに開かれた形式で発表することで、先人たちの試行錯誤を超克して日本文化を議論していくための新たな「たたき台」を提供できるのではないかと考えている。自分の常識を打ち破って文化のせめぎあいと格闘しているカナダ人学生

たち、日系カナダ人として主体性を確立せんと葛藤している子どもたちを見ていることもまた、筆者にとって日本文化の発信に寄与したいという気持ちの源泉である。

文化心理学という分野が生まれた意義は、学術的にも社会的にも大きい。昨今、文化心理学の分野では洋の東西という対比を超えて中東・アジア文化圏などのデータも集まり始めており、国際

的比較研究の機運が高まっている。現在、筆者はモンゴルをはじめとした中央アジア文化圏にまで足を延ばし、研究および教育の協力関係を模索している。こうした知見が集まることで、近い将来、それぞれの文化圏に通暁した人々がこのころの文化的基盤について開かれた議論ができる場が形成されることを願っている。

## 参考文献

- 1) Nisbett (2003). *The geography of thought: How Asians and Westerners think differently... and why*. New York: Free Press.
- 2) Varnum, et al. (2010). *Current Direction in Psychological Science*, 19(1), 9-13.
- 3) Masuda & Nisbett (2001). *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 922-934.
- 4) 増田貴彦 (2017). 「文化とところ」『心理学ワールド』76, 5-8.
- 5) Fernald & Morikawa (1993). *Child Development*, 64(3), 537-756.
- 6) Masuda et al. (2008). *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 1260-1275.
- 7) Henrich, J. (2020). *The WEIRDest people in the world: How the West Became Psychologically Peculiar and Particularly Prosperous*. New York: Farrar, Straus and Giroux.

# 日本の企業組織の国際化はどこまで可能か

関口倫紀 (京都大学経営管理大学院教授)  
SEKIGUCHI Tomoki



京都大学経営管理大学院教授・大学院経済学研究科教授(併任)。1992年東京大学文学部卒業、1998年青山学院大学大学院国際政治経済学研究科修了(MBA)、2003年 University of Washington Foster School of Business 博士課程修了(Ph.D)。大阪経済大学経営学部専任講師、大阪大学大学院経済学研究科助教授、准教授、教授等を経て現職。専門は、人的資源管理論、組織行動論。近年はとりわけ国際的な視点を取り入れた研究を推進。Applied Psychology: An International Review 共同編集長、Euro-Asia Management Studies Association 会長、Association of Japanese Business Studies 会長、その他役職多数。主な共編著に、「国際人的資源管理」(中央経済社)。最近の論文に、Sekiguchi, T., Takeuchi, N., Takeuchi, T., Nakamura, S., & Ebisuya, A. (2019). How inpatriates internalize corporate values at headquarters: The role of developmental job assignments and psychosocial mentoring. *Management International Review*, 59(5), 825-853.

## はじめに

かつて、日本企業の多くは輸出主導型のビジネスを行い、国内で製造したメイド・イン・ジャパン製品を世界の市場に送り込むことで戦後日本の高度経済成長に貢献した。その結果、日本は中国に抜かれるまで世界第2位の経済大国としての地位を確立・維持することができた。その後、冷戦の終結に端を発する経済のグローバル化の急速な進展とともに、多くの日本企業が海外に拠点を形成し、多国籍企業化するようになった。また、経済のグローバル化は欧米企業や日本企業のみならず、中国、韓国、台湾、インドなど様々な国から生まれた多国籍企業の存在感も高めることとなり、日本企業は、世界市場においてこれらの多様な多国籍企業との競争を強いられるようになってきている。

日本の大企業で働く人々の構成を見ると、表1で示されるように、企業

全体で見れば海外の従業員数が国内の従業員数を上回っている企業が多くある。このように、企業の海外進出による国際化は、そこで働く人々の国際化、すなわち組織の国際化も進展させている。では、組織とそこで働く人という面から見た場合に、日本の企業組織は、海外の多国籍企業と対等に伍していくための国際化に成功しているといえるだろうか。これに関して、日本企業は生産や物流などの業務オペレーションの国際化には成功しているが、組織や人事などのマネジメントの国際化は十分に実現できていないという見方がある。そもそも組織が国際化していくということは、異質な人々を組織に取り込んでいくことでもあるが、この点において、日本の企業組織は不利な立場にあると思われる。

## 日本の企業組織の国際化を阻む要因

第2次世界大戦後に発展し高度経済成長を支えた日本の企業組織は、

表1 主要日経企業の海外売上高比率と海外従業員数(2020年)

	国内売上高比率	海外売上高比率	国内従業員数(人)	海外従業員数(人)
パナソニック	48%	52%	98,566(38%)	160,819(62%)
ソニー	30%	70%	53,616(48%)	58,084(52%)
キャンン	26%	74%	72,979(39%)	114,062(61%)
シャープ	35%	65%	15,873(35%)	34,303(65%)
東芝	59%	41%	75,991(60%)	49,675(40%)
味の素	43%	57%	13,196(32%)	28,337(68%)
資生堂	40%	60%	24,884(53%)	21,879(47%)
マダム	57%	43%	1,088(16%)	5,622(84%)
花王	64%	36%	22,101(66%)	11,502(34%)
日産	32%	68%	58,134(16%)	78,000(57%)

注)関口倫紀・竹内規彦・井口知栄(編著)『国際人的資源管理』の図表2-2を2020年の情報に基づき更新

日本という同質的な社会において培われたものである。戦後、仕事を求めて都会に流入した人々に必要であった共同体の代わりを企業が担うという側面もあった。そのため、共同体としての企業で働く従業員は家族のようなものであり、従業員の生活を彼らの家庭も含めて守るべきであるから、業績が悪化しても安易に雇用を解消すべきでないという考え方を多くの企業経営者は持ってきた。新卒の若者を採用して長年にわたって育成・活用する長期雇用が基本であり、先輩、後輩、同期入社組が長期間にわたって「同じ釜の飯を食う」関係にあるので、入社して何年もたてばお互いに気心も知れる関係となる。そのような中で、従業員は社長や上司の意向を察して動けるようになり、「以心伝心」「空気を読む」「村度」が伴う組織運営が定着するようになったのである。

もともと、日本を含むアジアの国々は、文脈を読み察することを頻繁に行う文化的特徴としての高コンテキスト文化を共有している。よって、明文化された細かいルールを定めなくても従業員が察して動くことにより組織の円滑な運営が可能になるので、ある意味においては効率的でもある。つまり、世界からもその競争力を称賛された日本の企業組織の仕組みは、組織の性質や運営方法、そして人材の雇用や人事管理などほとんどすべてが、日本にいる同質的な人々の集団が効率的に動くことで力を発揮しやすいように最適化された形で発展したといえる。

そのため、日本の企業が海外に拠点を築き、現地の従業員を雇用し、組織を国際化しようとする際には、日本でうまく機能している組織運営のやり方を現地に移植したくなるだろう。生産設備の海外移転というように業務の仕組みの移植がメインであって、海外で必要とする労働力の多くがその仕組みを支える単純労働のみであるならばそれほど問題は多

くない。しかし、現地のニーズにあった製品を開発したり、現地でライバル企業との競争に勝つための高度な広告宣伝活動を推進したり、異なる国や地域の拠点が連携して業務を推進するなど、国内で働く従業員と同等あるいはそれ以上の能力や役割を期待するような人材を海外で雇用して活用し、多国籍企業全体としての総合力を發揮すべく一体化した組織運営をしようとする場合、うまくいくといえるだろうか。海外の人々は、同質性を前提とする日本の組織運営のやり方をよく理解できないだろう。日本の人々のように空気を読むことも察することも難しいため、明文化されていない不文律的な行動様式がわからない。言葉の問題も深刻である。中核的な組織運営に必要なのは日本語なので、海外の人材は日本語が理解できなければ重要な意思決定の蚊帳の外に置かれかねない。

## 欧米の企業組織との比較

欧米の企業組織の特徴と比べると、日本の企業組織が国際化することの困難さが明確になる。ヨーロッパ大陸は異質な人々のせめぎあいの歴史があり、北米は移民に支えられてきた地域である。多様な人々の間でのコミュニケーションが多く、文脈を読むことを重視しない低コンテキスト文化で、言語によって明確に相手に意思を伝えないとコミュニケーションがうまくいかない。日本のように、共同体的、家族的な企業組織のイメージは薄く、企業はあくまで業務を行うことでアウトプットを生み出すシステムだというイメージが強い。外部労働市場が発達していることから働く人々が転職する頻度も相対的に高く、組織内で短期間で従業員が入れ替わったりもする。つまり、欧米の企業組織は、多様な人々から成り立ち、構成員も頻繁に入れ替わることを前提として組み立てられているため、「言わなくても分

かる」「空気を読んでもらう」「村度する」ことは前提とせず、何をすべきかを明確にルールとして示し、言葉で明確に指示することで人を動かし、組織を運営してきたのである。

さらに欧米では、自然科学などに代表されるような普遍的な法則性や原理を大切にし、それを追究してきた。これが、歴史的に見ても文明・経済発展やグローバル化が欧米主導で進展したという理由でもある。欧米では、どんな社会でも成り立つような原理や法則を探ろうとする精神に則り、国籍や出身地にかかわらず、あらゆる人々が理解できるように明確なルールづくりや仕組みづくりを基本とした組織運営を行ってきた。一方、日本では、歴史的あるいは文化的に見ても、普遍的な法則性や原理を重視してきたとは言い難い。目の前にある問題を解決したり、物事をうまくこなすために創意工夫をしたりすることは得意ではあるが、それらを普遍化することはせず、いつも顔を合わせている人々の間でさえ分かればよいという発想が強かったといえよう。組織もそのような観点から運営されてきたのである。

組織の国際化は異質な人々を取り込んでいくことだと述べたが、欧米の多くの企業組織のように、異質性を前提とし、民族や国籍にかかわらず誰もが同じように仕事ができるように普遍的なルールに従って業務を行うように組み立てられた組織であるならば、その組織が国際化していくことは、国内での組織の組み立て方の延長線上でしかない。欧米型の組織管理の方法は、悪い言い方をすれば性悪説で、規則や計数による管理を重視することで従業員が勝手な動きをすることを防いでいる。海外に進出して拠点を形成する際にもこの方針を踏襲する。また、グローバル化＝欧米化という側面も持っているため、このような欧米型の組織管理の方法は、他の地域においても比較的受容してもらいやすいという有

利性もあるだろう。

一方、日本企業の場合、国内の組織管理の方法は、何もかも明文化して管理するわけではないという点については良い意味でいえば性善説である。しかし、それは同質的な人同士でお互いに分かりあえるから信用しているのであって、この方法をそのまま海外の異質な人々に適用することはできない。よって、日本と海外とでは円滑な連携を困難にする組織の境界ができてしまう。それでも日本的な組織運営のやり方を分かってもらうために、あるいは現地の人々に運営を任せてしまうことが怖いので、日本から駐在員を派遣して直接海外拠点を管理しようとする。欧米企業と比較しても海外拠点での本国駐在員の割合が高く、現地化が進んでいないのもそれが理由の1つである。

### 東アジアの企業組織との比較

東アジアの日本、中国、韓国における企業組織を比較してみると、日本だけでなく、中国や韓国でも組織の国際化に関しては少なからず類似した問題点を抱えていることがわかる。例えば、日本、中国、韓国はともに儒教文化の影響を受けた社会であり、高コンテクスト文化でもあるので、組織の特徴もその文化を反映している。企業が海外に進出して組織を国際化していく際は、組織の主要な業務を担うのは海外の人材ではなく本国の人材であり、本国人材を海外に派遣することで、国内の組織文化や組織運営の方法を海外に移植しようとする傾向がある。また、組織が国際化しても、本国の言語（日本語、中国語、韓国語）が多国籍企業全体のオペレーション上でもっとも重要である。もともと漢字圏であったという言語的な特徴も反映してか、世界共通言語としての英語の運用能力が欧米の人々と比べると劣っていることも原因の1つである。よって、

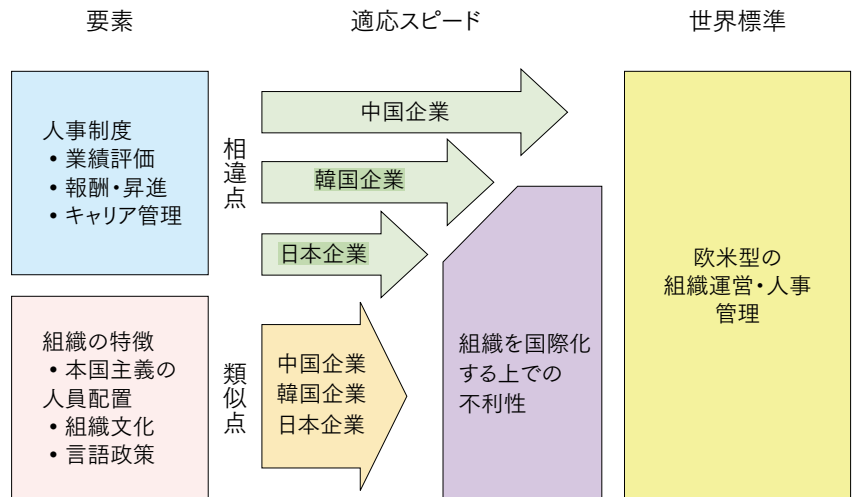


図1 日中韓多国籍企業の類似点と相違点

注)世界標準とされる欧米型の組織運営・人事管理への適応スピードを示す。  
Froese et al. (2020)の内容に基づき作成

欧米発の多くの多国籍企業に比べると、英語を中心とした組織運営にはほど遠いといえる。

しかし、図1に示すとおり、人事制度などの仕組みに関して言うと、日中韓の企業では相違点のほうが顕著である。おおむね、中国企業は、成果に応じて賃金や昇進が決まる仕組みなど、世界的によく用いられている欧米型の人事の仕組みを取り入れていこうとするスピードが速い。韓国企業も、中国企業ほどスピーディではないが、同様の傾向を示している。一方、日本企業は、特に国内においては従来型の日本的な人事制度を維持しようとする傾向が強く、欧米型の人事制度に対してやや懐疑的でもあるため導入スピードは遅い。日本では、同質的な社会で培われた組織運営による成功体験へのこだわりという面が強いのにに対し、中国は、改革開放路線から外資の導入を積極的に推進してきたため、そもそも欧米型の市場原理や人事の仕組みなどが入り込みやすい環境にあったといえる。韓国においても1990年代後半の経済危機の経験以降、欧米の制度を採り入れるスピードが高まったといえる。つまり、中国や韓国では、日本ほど自国独自の制度による成功体験に縛られることがないため、世界的に標準化されつつある欧

米型の仕組みを導入することによって組織の競争力を高めたいという意図もあるだろう。

### 日本の企業組織の真の国際化に向けて

日本企業が、自国で培った組織の強みを活かしつつ、弱点を克服することで真の国際化を実現することは可能だろうか。あるいは、これまでのやり方を自己否定し、新たにグローバルで機能する組織を模索する日本企業は登場してくるのだろうか。

日本の企業組織の国際化の課題には大きく2つのポイントがある。1つは、国内組織の国際化で、国内の組織の人員構成や特徴を日本的なものから脱却化させつつ国際化していくことの必要性である。具体的には、日本人以外の外国人従業員の割合を増やし、多様性を重視し、以心伝心や忖度に頼らない組織運営を行うこと。また、業務遂行における英語の利用頻度を高めるなど日本語のみに頼らない組織運営を推進することである。現在は、国内の組織の国際化が進展していないために海外拠点との間に組織的な境界ができてしまい、多国籍企業として海外拠点と一体化した組織運営を阻害している。国内組織の国際化が進展すれば、欧米の組織について議論したように、企業



の海外進出に伴う組織の国際化についても、国内での組織運営の延長線上として取り組むことができる。

もう1つは海外拠点の国際化で、これは海外拠点の運営を、日本から派遣された駐在員に頼る本国主義から脱却させ、現地人材に任せたり、あるいは国籍にとらわれない適材適所の人材配置を行ったりするといった方向性である。現在は、多国籍企業内において日本の人材と海外人材との間で期待される役割が分離しており、中核的な意思決定や業務は日本の人材が、周辺的な業務は海外人材が行うというかたちで、海外人材の活躍の場が制限されている。海外拠点の国際化が進展すれば、国籍にかかわらず、多国籍企業内で働くあらゆる人材に活躍のチャンスが与えられ、全体としての総合力を発揮した組織運営が可能となる。

図2は、日本的な組織の優位性と、企業の歴史の長さの2軸で表される日本企業の特徴によって、2つの国際化の推進スピードが異なることを示している。日本的組織であることの優位性を特に感じず、かつ歴史が浅い企業、例えばIT業界における新興企業などは、日本的な組織にこだわる必要がないので、海外進出をする際には、国内の組織も、海外拠点も、多様性を高めて国際化をしやすい立場にある(図2の左上)。一方、日本的な組織の優位性が強いと認識しており、かつ歴史が長いために組織体質や人事制度などが変化しにくい企業は、国内組織も海外拠点も国際化を推進するスピードは遅くなりがちである(図2の右下)。つまり、古い業界で歴史のある大企業などは現状を変えて国際化を推進することに抵抗するような力が働きがちであるが、新しい業界の新興企業などは初めからグローバルな視野のもとで組織を国際化できる資質を持っているといえる。日本的組織の優位性は感じていないが歴史のみ長い企業は、海外に日本組織の特徴を移植する必

		企業の歴史の長さ	
		低	高
日本的組織の優位性	低	国内の国際化、海外拠点の国際化とも積極的 国際化スピードは速い	海外拠点の国際化を国内の国際化よりも優先 国際化スピードは中程度
	高	国内の国際化を海外拠点の国際化よりも優先 国際化スピードは中程度	国内の国際化も海外拠点の国際化とも消極的 国際化スピードは遅い

図2 日本の企業組織の国際化度合いの類型化

注) Sekiguchi, Froese, & Iguchi (2016) の Table 2 を加工

要がないので海外拠点の国際化は進めやすいだろうが、国内の国際化には困難を伴うだろう(図2の右上)。歴史は浅いが日本的組織の優位性を感じている企業は、国内の国際化を進めることはできても、日本的な組織の特徴を海外に移植しようとするので海外拠点の運営については本国主義を維持しがちかもしれない(図2の左下)。

日本の産業界において、古い企業が退場する一方で新しいタイプの企業が次々と生まれてくるといった新陳代謝が繰り返されれば、おのずと現在進行しているグローバル化の世界に適合した国際的な組織が日本からも出現してくることが考えられる。ただ、古いタイプの企業であっても、試行錯誤を繰り返し、失敗からも学ぶことで、真の組織の国際化を実現することも可能であろう。その際に重要なのは、多様な人材を束ね、組織としての一体感を出していけるようリーダーシップの醸成である。これは、同質的な環境でしかリーダーとしての経験をしてこなかった日本の人材がいちばん苦手な分野かもしれない。日本企業としては、多国籍かつ多様な人々を束ねるためのリーダーシップを練習する場をいかにして自社の人材に与えることができるかが重要であろう。

#### 参考文献

- Froese, F.J., Shen, J., Sekiguchi, T., & Davies, S. (2020). Liability of Asianness? Global talent management challenges of Chinese, Japanese, and Korean multinationals. *Human Resource Management Review*, 30(4), 100776.
- Sekiguchi, T., Froese, F. J., & Iguchi, C. (2016). International human resource management of Japanese multinational corporations: Challenges and future directions. *Asian Business & Management*, 15(2), 83-109.
- 関口倫紀・竹内規彦・井口知栄編著 (2016)『国際人的資源管理』中央経済社

## おもてなしの未来

鈴木智子 (一橋ビジネススクール准教授)  
SUZUKI Satoko



日本ロレアル(株)、ボストン・コンサルティング・グループに勤務した後、一橋大学大学院国際企業戦略研究科修士(MBA)、同博士後期課程(DBA)を修了し、博士(経営学)を取得。京都大学大学院経営管理研究部特定講師、特定准教授を経て、現在、一橋大学ビジネススクール国際企業戦略専攻准教授。専門は消費者行動論、マーケティング。経済産業省「グローバルサービス創出研究会」委員、経済産業省「おもてなし経営企業選」選考委員、中小企業庁「尾州TASAI委員会」委員、株式会社三菱総合研究所「東京ホスピタリティプロジェクトビジョン策定委員会」委員、サービス学会理事、等を歴任。現在、東京女性経営者アワード審査委員およびアドバイザー、株式会社ローソン社外取締役、日本ペイントホールディングス株式会社アドバイザー、日本マーケティング学会理事。国内外の学術雑誌で、多数の研究論文を発表。主な著作に、『イノベーションの普及における正当化とフレーミングの役割——「自分へのご褒美」消費の事例から』白桃書房(2013)がある。

2021年7月～9月に、東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。その招致を目指したプレゼンテーションは、2013年にアルゼンチンのブエノスアイレスで行われました。東京オリンピック招致委員会のメンバーのひとりであった滝川クリステルさんは、日本のユニークネスとして「おもてなし」について語りました。彼女は、おもてなしを次のように説明しています。「私たちは、皆様にユニークな歓迎を提供します。日本語では、おもてなしという言葉で表現できます。それは、無私のホスピタリティ精神を意味します。私たちの先祖にまでさかのぼるものです。しかしそれは、日本の超近代的な文化にも根付いています」

おもてなしは、日本の伝統や文化を反映した独自の精神です。そしてそれは、現代の私たちにも深く浸透しています。ここでは、おもてなしを「相手を歓待し、喜ばせたいと思う精神」と定義します。おもてなし精神は日本のものづくりや経営戦略など、さまざまな分野でその影響がみられますが、本稿では対人サービスに焦点を絞って話を進めていきます。まず、おもてなしを欧米のサービスと比較しつつ、その文化的な側面について議論します。そして、グローバル化ならびにデジタル化時代のおもてなしについて考察することで、今回の特集テーマでもある「開かれる和のこころ」について考えたいと思います。それでは、さっそく始めましょう。

### おもてなしにみられる提供者と客の関係性

おもてなしは、英語に訳するのが難しいとよくいわれます。ニューヨーク・タイムズの記事(1997年4月20日付)には、「単純な英訳は存在しないサービスの概念」と説明されています。おもてなしというと、旅館の女将による歓待など、サービスのインタラクションを思い浮かべることも多いかと思います。そのためか、おもてなしは「サービス」と訳されることもあります。しかし、おもてなしとサービスとは、意味合いが若干異なるのです。

サービスから考えていきましょう。サービスの概念の起源を遡ると、それが主従関係を暗示していることが見てとれます。サービス(service)の語源は、「奴隷」を意味するラテン語の「servus」だといわれています。それは「主人」と「使用人」といった、不平等な存在の区別を示唆します。お金を払う方(すなわち、客)がいつも正しいという見方は、こうした考えが背景にあるともいえます。

しかし、おもてなしはそうしたサービスの理解とは対照的です。おもてなしは、平等な関係の間での奉仕です。おもてなしの源流には茶道の作法と精神があるといわれますが、「主客一体」の考えに通じます。招く側と招かれる側と一緒に素晴らしい空間をつくりあげるといいます。おもてなしでは、サービス提供者と客はお互いを尊重することで、絆を生み出します。「私」(サービス提供者)と「あなた」(客)はもはや分離していません。それは、体験を

一緒に創造するために協力する「私たち」になります(図1)。

欧米のサービスと日本のおもてなしにおける関係性の違いは、2つの文化にみられる自己観の違いにも通じます。Markus and Kitayama (1991)は、歴史的に共有されている自己観が文化によって異なると指摘しました。西洋では、個の分離に対する強い信念があります。そこでの自己観は、「自己とは他から切り離されたもの」という見方によって特徴づけられます。「私」と「あなた」は別々の存在なのです。これに対して、東洋では人間同士のつながりを強調します。そしてそこでの自己観は、「自己とは他と根源的に結びついているもの」という信念により特徴づけられるのです(図2)。日本人は多くの場合、「私たち」を主語として考えて行動しています。

### おもてなしのパラドックス 客に対する高い要求と客への無私の奉仕

こうした背景もあるためか、ある意味、おもてなしは客にも厳しいものです。素晴らしい体験の創造においては、客にも果たすべき役割があるのです。客は、その場の儀式やルールに従うことが要求されます。それは茶道などの道の世界で、招かれる側にも教養とマナーが求められることと同じです。

例を1つ、挙げてみましょう。日本有数のリゾート運営会社である星野リゾートは、和のおもてなしを世界に発信する日本旅館「星のや東京」を展開しています。ここでは、外国人であっても、日本文化の規範に従うことが求められます。客は玄関で靴を脱ぎます。チェックインではお茶で一服し、スタッフとの会話を楽しんで親密な関係を築きます。温泉では水着を着用しないなどのマナーを守らなければなりません。

しかし、おもてなしは提供者側にも要求が高いものです。客を圧倒的

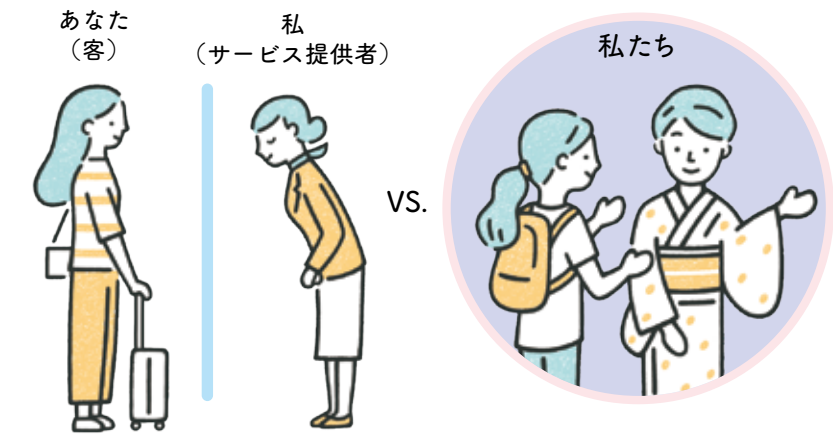


図1 「私」(サービス提供者)と「あなた」(客)の分離vs. 一体化(「私たち」)

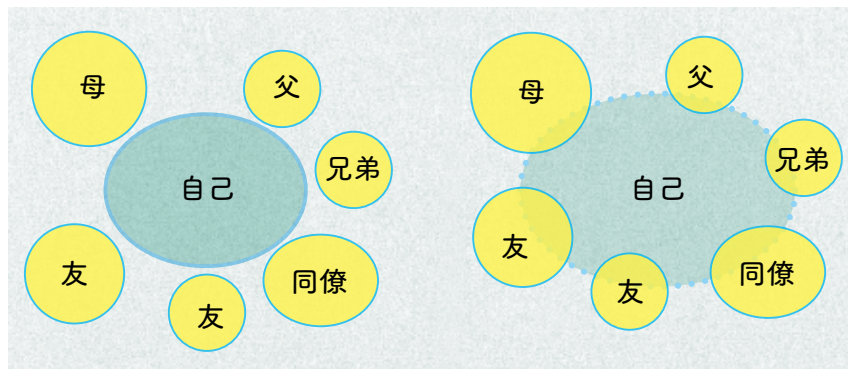


図2 自己観における文化差(相互独立的自己観(左)と相互協調的自己観(右))

に喜ばせるために、目配り・気配り・心配りをもって客に接することが求められます。おもてなしの語源にはいくつか由来があるといわれていますが、その1つが「を以て、を成す」です。相手のために成し遂げるという意味ですが、何をもって成し遂げるかは未定になっています。すなわち、客の好みや心情を理解することで、初めて「何」の部分を埋めることができるのです。そうすることで、単にサービスを提供するのではなく、客が感動する体験と一緒に作りあげることができます。そのため、提供者には客を深く理解し、細かいところまで行き届く配慮をすることが求められます。それは時に、仕事の義務を超えたものになります。

このように、おもてなしは、客に高い要求を求めつつ、無私の精神で奉仕するという、ある種の矛盾をはらんでいます。2つは一見矛盾していますが、いずれも、高品質な体験

をつくりあげ、客に心から喜んでもらうことを目的としています。こうした矛盾を海外の人々に理解してもらうには時間がかかります。

### おもてなしの未来① おもてなしのグローバル化

日本企業の海外進出とともに、おもてなしのグローバル化も進んでいます。しかし、海外でのおもてなしの展開には、多くの困難が伴います。客にも提供者にも要求が高いおもてなしは、すべての国や市場で受け入れられるとは限りません。また、配慮の行き届いたサービスが、すべての商品カテゴリで求められているわけでもありません。日本では、どの店や施設でも丁寧な接客を受けることができますし、交通機関は時間に正確です。24時間営業の便利なコンビニエンスストアが、日本中どこにでもあります。質の高い親切なサービスが、日本では標準となっています。しかし、それらは海外では決して

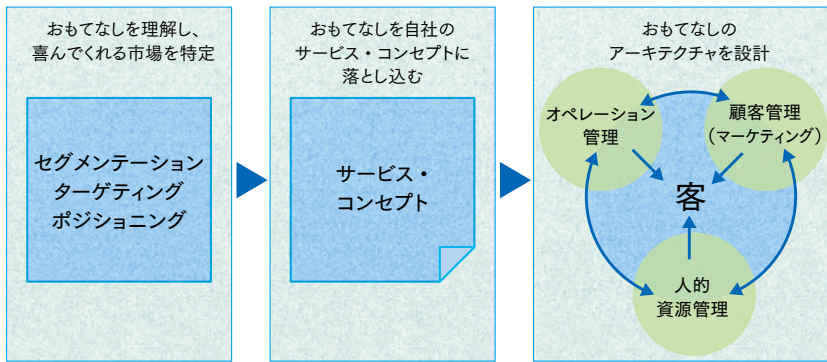


図3 おもてなしのグローバル化プロセス

当たり前ではありません。また、そういったサービスが必ずしも求められているわけでもないのです。日本人にとっておもてなしは良いことなので、すべての人に喜んでもらえると思いがちです。しかし、おもてなし精神に基づいたサービスを海外で成功させるためには、おもてなしを客観視することが大切になります。おもてなしを理解し、喜んでくれるのは誰なのか。適切なセグメンテーション、ターゲティング、そしてポジショニングが必要になるでしょう（図3）。

次に、おもてなしのコンセプトを明示化する必要があります。日本人同士であれば、おもてなしをわざわざ説明することはないでしょう。おもてなしという言葉を使えば、なんとなく分かり合えるものです。しかし、外国人におもてなしを理解してもらい、さらに実行してもらうためには、言葉にして伝える必要があります。ところが、これがなかなか難しいのです。おもてなしをいざ詳しく説明しようとする、わけがわからなくなってしまうことは珍しくありません。

おもてなしを海外で展開する企業の説明を並べてみると、それぞれに違いがあることがわかります。資生堂は「1人1人の肌や好みにあわせた美容法を紹介し、お客さまとの絆を紡ぐ」（鈴木・原田、2013）、ファミリーマートは「お客さまを自分たちの家族のようにお迎える」（鈴木、2015）と説明しています。自社にとっ

ておもてなしとは何なのか、おもてなしを通じて何を実現したいのか、こういったことを明確にし、言葉にすることが大切です。

おもてなしのコンセプトを明確にした次は、それを実行するためのおもてなしのアーキテクチャを設計する必要があります。サービス経営では、顧客管理（マーケティング）、人的資源管理、そしてオペレーション管理の3つが統合されていることが重要です。スタッフと客の接点の場や客との関係性構築などをどうデザインするのか（マーケティング）。スタッフをどう育成するのか（人的資源管理）。とくに海外でおもてなしを展開するためには、現地の人々におもてなしを実行してもらわなければなりません。外国人におもてなしを理解して行動してもらうためには、どのようなトレーニングが必要なのかということを考える必要があります。注意しなければならないのは、日本人にトレーニングをするのとはまったく異なるということです。おもてなしにまつわる多くの事柄は、日本人にとっては当たり前でも、外国人にはなじみのないものばかりです。細かいところまで丁寧に説明し、納得してもらうことが大切になります。

そして、全体オペレーションのデザインも忘れてはいけません（オペレーション管理）。おもてなしの実現には、客との接点だけでなく、それを支えるバックステージも大きく影響します。例えば、コンビニエンスス

ストアに求められる基本かつ最も重要なサービスは、欲しい商品が欲しい時に入手できること。こうしたニーズに徹底的に応えるため、コンビニチェーン各社はサプライチェーンマネジメントや発注システムに力を入れています。おもてなしというと、スタッフと客との接点に焦点があたりがちですが、それ以外のシステム構築もおもてなしの実現には欠かせません。

## おもてなしの未来② ロボットによるおもてなしの可能性

近年、サービス研究ではデジタル化の影響に関する議論が盛んです。過去に産業革命が製造業におけるブルーカラー労働者の仕事を自動化したのと同様に、デジタル革命はサービス産業におけるサービス部門の仕事を変革させる可能性を秘めています。テクノロジーの進歩によって、人がサービスを提供しなくてもよくなるかもしれないのです。

多くの企業が、サービスロボットの実験に取り組み始めています。例えば、世界初のロボットが働くホテルとしてギネス認定された「変なホテル」では、ヒューマノイドロボットや恐竜ロボットがゲストを歓迎し、チェックインを行います。ロボットが働くカフェ「変なカフェ」では、ロボットのトムが客から注文を受けて、美味しいコーヒーを淹れます。こうしたロボットは、サービス革命の始まりにすぎません。人のコスト上昇と供給低下に伴い、ロボットによる人的労働の置き換えは進むことでしょう。技術的には、10年から20年のうちに、労働人口の半分が人工知能やロボット等によって代替できるようになるといわれています（Frey and Osborne, 2013）。

おもてなしの未来を考える上でも、ロボットの台頭について検討しなければなりません。日本の伝統文化におけるおもてなしを「おもてなし1.0」とするならば、現代の社会に



図4 おもてなしの進化

みられる、おもてなし精神に支えられた日本の卓越したサービス・エクセレンスは「おもてなし2.0」、そしてロボットや人工知能によるおもてなしを「おもてなし3.0」と呼ぶことができます(図4)。ここで問いただなければならないのは、おもてなしはロボットや人工知能で実現できるのかということです。

現段階においては、ロボットが自ら感情を持ったり、あるいは相手の感情を読み取ったりといったことはほとんどできません。そのため、共感や思いやりなどの感情が必要なサービスをロボットで実現するのは難しいと考えられています。おもてなしでは相手のことを慮るなど、コミュニケーション(それは明示的コミュニケーションと暗示的コミュニケーションの両方を含みます)を取りながら、一緒に価値を創造します。こうしたことをロボットが実装できるかについては未知数です。

さらに、「不気味の谷」現象にも注意を払わなければなりません。ロボットが見た目や動きにおいて人らしくなるにつれ、人は強い嫌悪感を覚えます。言い換えると、技術的にロボットがおもてなしを実現できるかということ、そうしたロボットを人が受け入れることができるかということは、別の問題なのです。物理学者のスティーブン・ホーキング博士やマイクロソフトの共同創業者

であるビル・ゲイツ氏でさえも、人工知能などの「マシン」(機械)の台頭を恐れ、私たちに警告を發しました。

しかし、私たちのロボットに関する経験はまだ限られています。今の私たちが持っているロボットに対するイメージは、その多くが映画や小説などによって形づくられたものです。そして、それらのイメージは西洋と東洋ではやや異なります。ハリウッド映画では、多くの場合、ロボットは人を脅かす存在として描かれています。ロボットは人のようになりたいか、または人類を抹殺することを目的としています。人とロボットが平和に共存することはまれです。しかし、日本のアニメでは違います。「鉄腕アトム」や「ドラえもん」などに見られるように、人とロボットとのコラボレーションが見られます。人とロボットが一緒になって、新しい世界をつくっています。

今後、人とロボットとの関係はどうなるのでしょうか。おもてなしは、ロボットによってどのように実現されるのでしょうか。サービス現場におけるロボットの活用は、まだ実験段階です。人間関係を築くのと同じように、人はロボットとの関係をこれから育てていく必要があります。またロボット工学者は、必要以上に恐れる必要がないことも指摘しています。ロボットが進化すること

で人の考える時間が増え、その結果、新たなテクノロジーや新たなサービスが生まれるだろうと述べています。ロボットの進化が人の進化を促すということです。

おもてなしは、今後も間違いなく変化し続けます。グローバル化とデジタル化のトレンドは、おもてなしを前

進させ、その形を進化させます。しかし、おもてなしの「相手を圧倒的に喜ばせたい」という精神は、世代から世代へと受け継がれ、この先もきっと残ることでしょう。

古いものと新しいもの。伝統と現代性。おもてなしは、きっとこれからも日本のアイデンティティであり続けます。そしてその唯一無二の精神は、サービス・エクセレンスや卓越したものづくりなど、さまざまな形で世界に貢献し続けることでしょう。

#### 参考文献

- Frey, C. B., & Osborne, M. (2013). *The future of employment: How susceptible are jobs to computerization?* Working paper, University of Oxford.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). "Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation." *Psychological Review*, 98(2), pp. 224-253.
- 鈴木智子・原田緑(2013)。「資生堂：グローバル展開——中国における『おもてなし』サービスの活用」『一橋ビジネスレビュー』61(3), pp. 142-151.
- 鈴木智子(2015)。「『おもてなし』で競争優位性を築く海外展開——株式会社ファミリーマート」『マーケティングジャーナル』34(3), pp. 129-144.

# 環境と協同し、住まいを開く

前田昌弘 (京都大学大学院人間・環境学研究科准教授)

MAEDA Masahiro



1980年奈良県生まれ。2004年京都大学工学部卒業、京都大学大学院工学研究科修士課程、同博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員 (DC2)、京都大学グローバルリーダー養成ユニット研究員、日本学術振興会特別研究員 (PD)、京都大学大学院工学研究科助教、同講師、京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授を経て現職。2012年京都大学博士 (工学)。研究テーマは住宅計画、地域まちづくり、コミュニティ・デザイン。著書に『世界住居誌』(共著、昭和堂)、『自然災害と復興支援——コミュニティのレジリエンスを支える』(単著、京都大学学術出版会)、『建築フィールドワークの系譜——先駆的研究室の方法論を探る』(共著、昭和堂)、*Rural and Urban Sustainability Governance* (共著、United Nations University Press)、『住まいから問うシェアの未来——所有しえないもののシェアが、社会を変える』(共著、学芸出版社) ほか。

## 人間以外(モノ)の世界とやり取りする

地域のまちづくりに関わりながら研究や活動をしていると、環境を構成するモノや空間との「やり取り」ができることが、良い住まい、良いまちの条件なのではないかと感じることもある。このようなことを考えたときに想起されるのが、「環境もまた人間と同様に主体である」と主張する「アクター・ネットワーク理論 (actor network theory; ANT)」である。ANTはフランスの人類学者B.ラトゥールらが発展させた、人間以外(モノ)の世界の独自性に着目した議論である(ラトゥール, 2019)。また、アメリカの心理学者J.J. ギブソンは、「アフォーダンス (Affordance)」の概念(ギブソン, 1986)を提唱したことで有名だが、彼の議論は、意味や価値を環境に実在するものとして捉え直したところが革新的であったと言われる(河野, 2007)。「実在する」とは、人の主観性や観念から独立して存在することを指す。ANTにおける、環境もまた「一人前のアクター」と捉えるアイデア、すなわち「人間以外(モノ)の行為者性 (agency)」は、この「環境における意味や価値の実在性」とかなりの部分で重なり合っている。

ギブソンが言う環境には、建築物や道具等を伴う構築環境、制度・慣習等の社会環境といった、人間によってつくられた環境、すなわち「人工環境」も含まれている。しかし、このように環境概念を拡げたとき、人工環境における意味や価値は、自然環境とは異なり、私たち人間がそれ

らを与えたから存在しているのではないか、という疑問も湧いてくる。これに対してギブソンは、人工環境にも意味や価値は実在すると反論している。一方で、人工環境の意味や価値は確かに、その背景にある社会システムや人びとの行動習慣なしでは実在化しないことも認めており、私たちはそれらを学習することではじめて環境の意味や価値を知るという趣旨のことを述べている。

さて、人工物の集積としての都市は、そこを行き交う人びとの営みから派生した様々な意味や価値を宿してきた。とりわけ、京都のような長い歴史をもつ都市では、私たちの生活を取り巻く人工環境の大部分は、私たち以外の誰かが過去につくったものである。したがって、人工環境が宿す意味や価値は幾重ものレイヤーとなり、積層している。しかし、現代の社会では、近代化に伴う利便性・快適性の向上と引き換えに人と環境の距離がますます離れていると感じる。だとすると、私たちはいかにして、環境の意味や価値に再び接近し、人間以外(モノ)を含む環境と「やり取り」(=協同)できる関係を取り戻せるであろうか。

## 町家街区における住まいを開く力と閉じる力

先人たちは、「行為者性」を帯びたモノや空間と協同しながら、都市に暮らしてきた。京都の町家はまさに、都市に多様な人びとが集まって住むことを助けてきた空間形式である。「うなぎの寝床」と呼ばれるように、家々が表通りに対して長細い敷地を構えることで高密度化し、ま



図1 町家街区の連続平面図・京都市中京区夷町 1968年頃  
(出典：島村他1971に筆者が一部加筆) 敷地内の空地が連担  
することで通風・採光、避難路を確保

た、敷地内の庭や空地が隣家と連担することで、通風・採光や災害時の避難路等を確保してきた。さらに、通りから街区の内部に引き込まれた路地には、都市の経済活動を下支える人びと（職人とその家族等）が暮らしていた（図1）。

京都市の中心部では、特に1970年代以降、開発による建物の更新が進み、町家が軒を連ねる街並みは急速に失われ、上述したような空間構造も崩れていった。しかし、格子状の街区を物理的な境界とし、通りの両側の家々が1つの「町内」（両側町）を構成するというコミュニティの構成原理は残り、現代に受け継がれている。

建築学者・上田篤はかつて、京都の町家街区における人間関係の特徴を「義理の共同体」と表現した（上田，1976）。町家街区では、十日汁、千度参り、地蔵盆といった年中行事によって、私的な付き合いでさえも様式化・形式化され、一種の公的な

交流となっているという。町家街区を構成する家々の多くは商家であったため、隣人だからと言って情が移ると、いざという時に共倒れしてしまう。そこで、各家が分担する責任を「義理」と「礼節」が要求する範囲に制限してきたのだという。こういった、どこか冷徹にもみえる人間関係は、社会学者E.ゴッフマンがかつて「儀礼的無関心」（ゴッフマン，1980）と呼んだように、都市が拡大し、互に見知らぬ人びとが集住するようになった際に生じる普遍的な現象でもある。

このように、京都の町家街区では、多様な

人びとが空間的に近接しつつも適度な社会的距離を保って暮らすための作法が発達してきた。町家街区にみられる、近代以前の社会における民俗・風習や行動習慣は、人やモノの結びつきを一定の範囲に留めることで、社会を守ってきた。同様の役割は、京詞、「うなぎの寝床」、格子窓といった人工的緩衝物にも通底している。人間以外（モノ）とも協同しながら、住まいやまちを「閉じる」ことが可能であるからこそ、不確実な外部の世界に対しても「開く」ことができたのであろう。

翻って現代の京都の街をみると、特に2000年代以降、老朽化した町家がリノベーションされ、カフェやレストラン、ゲストハウス等の用途に生まれ変わっている。また、路地沿いの長屋も同様に、店舗やアトリエ付きの住居、子育て世帯向けの住居等になっている。こういった近年の「町家ブーム」は、建物が積極的に活用され、町家の魅力に多くの人が触



写真1 地蔵盆における数珠回しの様子 町内の子どもたちが読経にあわせて大きな数珠を回し、その様子を周りの大人たちが見守っている

れられるという意味では歓迎すべきことかもしれないが、一方で、懸念もある。と言うのも、本来は私的な領域であり、ウラ／オクであった空間（町家の住居部分や路地等）が、「町家ブーム」の流れで、「みんな」（不特定多数の他者）の空間に開かれ、侵食される。そうなることで、都市に多様な人びとが住まうことを可能にしていた、公私領域の相互排他的関係やオモテ-ウラ／オクの秩序といった空間編成の原理が失われていくと感ずるからである。

## 地蔵盆の柔軟な対応力にみるモノと心の働き

冒頭で触れたラトゥールやギブソンの議論では、人間の主観性や観念のようなものの働きはあまり重視されていない。しかし、京都の地蔵盆をみていると、私たちの心のあり方を基盤としたアクター・ネットワークも存在するを感じずにはいられない。地蔵盆とは、毎年8月24日を中心として地域の地蔵を祀り、地域の安全や子どもの健やかな成長を祈る行事である。近畿地方で広くみられ、京都では町内ごとに住民の手で運営されている。仏僧による読経や数珠回しといった仏教的な儀礼（写真1）に加え、福引やゲーム・余興、おやつ・食事会等が催され、地蔵盆の当日には町内の老若男女がともに時間を過ごす。このことから近年、地蔵盆は地域コミュニティ形成の核として再評価されている。地蔵盆について調べていると確かに、そのよ



写真2 地蔵盆における開放的な空間利用  
町家のミセノマで数珠回し等が行われ、かつ道路と一体的に利用されている

うな事例に出会うことがある。例えば、ある町内では、マンション等に引っ越してきた若い世代をまずは地蔵盆に招待しているという。新参の住民にとっては近所付き合いのきっかけになるし、町内会にとっては新たな担い手を発掘できるかもしれないので、双方にとって良い機会である。

地蔵盆の運営には、道具の準備、会場の設営、景品の買い出し、ゲーム・余興の企画等、些細なものも含め様々な役割が発生する。また、地蔵盆の会場には町家のミセノマ、共同住宅の玄関ホール、路上、空き地・ガレージ等、町内の開放的な空間が選ばれることが多い(写真2)。このような、「役割の分散」、「空間の開放性」といった特徴があることで地蔵盆は、多様な人びとを地域に段階的に受け入れる場となっている。実際、地蔵盆の当日には市中のあちこちで町内の空間が開放的に利用される。ただし、こういった風景は近年、車の増加や住宅形態の変化等により日常的にはほとんどみられなくなってしまった。地蔵盆の日だけは、非日常が演出されることで空間が開放され、多様な人びとが一緒にいることを可能にする、町家街区のモノや空間の「行為者性」が顕在化するのである。

なお、2020年夏、新型コロナウイルス(Covid-19)禍における地蔵盆の実態について調査を行った。その結果、アンケート調査への回答が得られた京都市内の約300箇所の町内のうち約51%で、行事の縮小や簡略化、

参加者の限定等を行うことで、地蔵盆が開催されたことがわかった。縮小したり、外部に対して閉じることで危機的状况にも柔軟に対応していたことから、人びとが環境とやり取りをする上で地蔵盆が1つの媒介となっていることが窺える。

地蔵盆の柔軟な対応力は、その物質的であり、非物質的でもある在り方にも現れている。すなわち、地蔵を安置する祠やそれを日常的に管理する人の手、地蔵盆の会場を設える道具や空間を必要とするという意味で地蔵盆は物質的である。他方で、形やモノにあまり囚われず、時代の変化や町内の事情によって行事の内容や空間・場所を変えていくという意味で地蔵盆は非物質的でもある。さらに言うと、モノとしての地蔵を必要としない場合さえあるようだ。例えば、京都の壬生寺にある「地蔵の出開帳」(通称「レンタル地蔵」)では、町内で一時的に預かる地蔵は毎年決まっているわけではなく、境内に安置された石仏の中からその年の地蔵が選ばれるのだという。このような例の他にも、京都における人びとと地蔵の関係をみると、信仰の対象としての地蔵は大切にしている、モノとしての地蔵に対してはあまり執着がないようにみえることがある。

地蔵盆のこのような柔軟性はおそらく、地蔵信仰のあり方と関わっている。すなわち、地蔵信仰の対象である地蔵菩薩は、仏教における6つの世界(六道)のどこにでも現れ、あらゆる人びとを救済するとされる。その立ちふるまいは、大乘仏教の「唯識」にも通じると言われる。「唯識」とは、この世界に客観的存在はなく、あらゆる存在は「識」という心の働きによる主観的存在であると考えられる思想である(西洋哲学における「唯心論」や「観念論」との類似性も指摘されている)。

地蔵盆は確かに、モノや空間、場所との協同により実体化するが、そ

の根幹にある地蔵信仰は本来、モノや空間、特定の場所に囚われない心のあり方である。このような心性により地蔵盆において物質的な世界と非物質的な世界は往来可能であり、だからこそ、地蔵盆は様々な変化や危機に対処し、形を変えながらも今日まで続けられてきたのではないだろうか。

## 環境に働きかけ、その意味や価値を享受する

京都市の中心地区(通称「田の字地区」)に位置する有隣学区という地域のまちづくりに関わり始めてもう10年近くになる。有隣学区では2016年頃から約3年間、地域の防災まちづくり計画の策定に取り組み、その一環として地域の防災マップを作成した。あるとき、マップに掲載する情報について、地域の住民で構成される「有隣学区まちづくり委員会」で議論していると、学区に多い町家や路地、地蔵の祠等の扱いについて意見がわかれた。委員会の活動をサポートする学区外の主体(大学の研究室や専門家)からは、それらは地域の歴史や文化をよく表している資源なので、残してほしいという趣旨の意見が多かった。一方、住民からは、町家や路地は地震や火災等の災害に対して脆弱であり、生活者の立場からすると、生命の安全は他の何ものにも代えられないという、残すことに対して消極的な意見が少なからず聞かれた。こういった議論は、歴史的市街地のまちづくりでみられる、「歴史・文化性」と「防災・安全性」という価値観の相違ないし対立として捉えられる。

このような状況を受け、有隣学区ではまず、学区内の危険と思われる箇所を点検してまわる「防災まち歩き」を企画・実施した。学区内をくまなく歩き、町家を含む木造住宅や路地、防災設備(消火栓・消火器、AED等)の分布・現状等を確認してまわった。さらに、町内ごとの空き





図2 有隣学区防災まちづくりマップ（一部拡大図） 町内の災害時集合場所、防災設備に加え、町家、路地、地藏の祠等の分布が示されている

家の実態、防災の取り組み、路地の避難経路等といった、外観からだけではみえづらい事柄についても町内の住民に現場で尋ねながら丁寧に把握していった。

住民にとって慣れ親しんだ学区の環境も、現場で確かめてみると思いの外に発見することが多い。「この路地に入るのは子どものとき以来やなあ」とは、まち歩きに参加した70代の男性が呟いた言葉である。路地は通過交通が少ないため、子どもにとって格好の遊び場であるが、大人になるとむやみに立ち入らない私的な領域となる。久々に足を踏み入れた路地は、そこだけ時間の流れが止まったかのような静かな場所であったが、建物の老朽化や空き家化、あるいはゲストハウス等への改修といった変化も起きていることに気がつく。

このような地道な取り組みを重ね、最終的に出来上がった防災マップには、町家（木造住宅）や路地、地藏の祠（町内の避難集合場所を兼ねていることがある）等、一般的な防災マップではあまり掲載されない情報が盛り込まれた（図2）。町家や路地が密集するエリアはたしかに、災害に対してハード面では弱いが、同時に、地域の特徴をよく表す場所でもある。そして、それらの場所は住民によるソフト面での工夫や努力によって守ら

れてきた。防災マップにはあえて、「危険である」とか「残すべき」といった価値判断は表現せず、地域の現状をなるべくありのまま記載した。人間側の価値観を中心として地域を視ると、その相違や対立（AかBか）が前面に出てしまい、議論は膠着しやすい。そこで、視点を移動し、環境やモノの側から地域を捉え直し、その両義性（AでありBでもある）に対する共通理解を図った。そうすることで再び、前向きな議論が行われるようになった。

都市には、そこに住む人びとがお互いの距離感をはかり、また、環境との関わりを調整する上で、様々な意味や価値をもったモノと空間があふれ、人とモノ、空間の異種混淆によるネットワークの集合体がつくられ続けている。私たちが環境との「やり取り」を回復するうえで、住まいや地域など、身近な環境について学習することが第一歩である。「学習する」と言っても、それは単に知識を得ることではない。むしろ、環境に働きかけることで、環境の意味や価値を「享受」できるようになる方法を知ること、とでも言えるだろうか。言い換えると、ここで重視されるのは、「～を知っている」ということで

はなく、「いかにして～であるかを知る」という、観念や概念に従属することなく、世界において、世界に即して環境という実在を捉えるための方法である（デランダ、2015）。

このような方法の例として本稿では、地藏盆のように、人びとの心のあり方とも関わる民俗・風習、あるいは、防災まち歩きのように、他者の価値観や自らの身体を介した取り組みについて紹介した。ささやかではあるが、このような、人と環境の関わりの媒介となる出来事を企てること

が、現代におけるまちづくりやコミュニティ・デザインの重要なミッションである。そうして人と環境の「やり取り」（＝協同）が可能となり、外からの侵食を受けてではなく、内から住まいやまちを「開く」あるいは「閉じる」ことができるようになったとき、そこは危機や変化にも柔軟に対応できる、良い住まい、良いまちとなっているに違いない。

#### 参考文献

- B.ラトゥール著、伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局、2019年
- J.J.ギブソン著、古崎敬他訳『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社、1986年
- 河野哲也『善悪は実在するか——アフォードンスの倫理学』講談社、2007年
- 島村昇他『京の町家』鹿島出版会、1971年
- 上田篤『京町家——コミュニティ研究』鹿島出版会、1976年
- E.ゴッフマン著、丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房、1980年
- M.デランダ著、篠原雅武訳『社会の新たな哲学——集合体、潜在性、創発』人文書院、2015年

# サピエンスの「こころ」——文明の錦を機織る経糸と緯糸

入來篤史 (京都大学こころの未来研究センター特任教授)

IRIKI Atsushi



1957年東京生まれ。1982年東京医科歯科大学歯学部卒業、1986年同大学大学院歯学研究科博士課程修了。同大学歯学部生理学教室助手、ロックフェラー大学リサーチアソシエイト、東邦大学医学部第一生理学教室助手、講師、助教授、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授、国立研究開発法人理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー等を経て、現在、同研

究所生命機能科学研究センター象徴概念発達研究チームチームリーダー、京都大学こころの未来研究センター特任教授。歯学博士、博士(医学)。専門は神経生理学。Neuroscience Research優秀論文賞(日本神経科学学会)、The Golden Brain Award(アメリカThe Minerva Foundation財団)、創造性研究褒賞(NPO法人ニューロクリアティブ研究会)、The Otto-Creutzfeldt-Lecture(ドイツ

神経科学会)などを受賞。日本学術振興会先端科学シンポジウム事業委員長など多数の委員会で専門委員を務めている。主な著書に『Homo faber 道具を使うサル』(医学書院)、『研究者人生 双六講義』(岩波書店)、『言語と思考を生む脳』(共編著、東京大学出版会)、『コミュニケーションと思考』(共著、岩波書店)ほか多数。

世の中にたえて桜のなかりせば  
春のこころはのどけからまし

在原業平(古今和歌集)<sup>1)</sup>

我々は花を散らす風において歓び  
あるいは傷むところの我々自身を  
見いだす……すなわち我々は「風土」  
において我々自身を、間柄としての  
我々自身を見出す……我々は祖先  
以来の永い間の了解の堆積を我々  
のものとし……単に風土に規定さ  
れるのみでない、逆に人間が風土に  
働きかけてそれを変化する……。

和辻哲郎(『風土——人間学的考察』  
第1章1より)

## こころ騒ぐとき

マンハッタンの住宅街サットン・  
プレイスから窓越しに臨む、イース  
トリバーに浮かぶルーズベルト島の  
西岸に桜並木がある。花の散りそめ  
る候になると、足早にその傍を  
行き交うニューヨーカーを横目に、  
あたりに住まう日本人の「こころ」  
は、のどかではいられない。花を  
愛でつつその枝を手折って髪にさ  
そうとする者があれば、わが身も  
痛む。敷島

の四季かおるなかで心が生まれ、  
その心によって形づくられた和の  
文化の謂はれのなかに我ら自身が  
居ることを、異国の桜がくつきり  
と描き出す。一方、彼の国のひと  
びとの心にも、外からは量り知れ  
ぬ由緒があるはずだが、また、氏  
や背景によらずに同じ人間として  
響き合う心もあり、それらは大き  
くそして尊い。

このような、多様性と類似性をあ  
わせもったわれわれ現代人(ホモ・  
サピエンス)の文明をかたちづくる  
のは、それを担う人々の歴史と風土  
を背負った、その心であるはずだ。  
本稿では、このような人間の心の由  
来をとおして文明の起源を究明しよ  
うとする、新学術領域研究<sup>3)</sup>「出  
ユーラシアの総合的人類史学——  
文明創出メカニズムの解明」(代表:  
松本直子)の目指すものを紹介しつ  
つ、進化的な歴史・時間(経糸)と  
地球的な風土・空間(緯糸)が織り  
なす、ダイナミックな錦絵巻とし  
ての、心の研究の広がりについて考  
えてみたい。

## サピエンス進化の3つの謎

ヒトの祖先の脳と心の進化には、3

つの大きな謎がある。その第一は、  
サピエンスを含むホモ属の出現と  
ともに相転位的に加速した脳容量の  
急拡大である(図1矢印A)<sup>4)</sup>。それ  
以前のアウトストラロピテクス属の  
脳容量は、ごく緩やかな増加傾向  
にはあるものの、200万年以上に  
わたって、現生類人猿とさほど変  
わらない範囲に留まっていた。し  
かし、ホモ属が現れてホモ・ハビ  
リスが石器を作り始めると、石器  
製作技術がより高度になるにつ  
れて、約40万年前に出現するネ  
アンデルタール人に至るまで脳容  
量が急速に拡大を始めたのである。  
道具使用と製作を契機に、ホモ  
属の脳に何が引き起こされたの  
だろうか？

第二の謎は、もっと最近になって  
からだ。ネアンデルタール人以降  
は脳の拡大は起こっておらず、私  
たちホモ・サピエンスは20~30  
万年前に登場したにもかかわらず、  
絵画や彫像などの象徴的な人工物  
や、目的に応じた多様な道具を作  
ったり、寒冷な地域や島嶼部に進  
出したりするのはおよそ5万年前  
以降でしかない(矢印B)。この間  
、サピエンスの脳は(ばらつきが  
大きく断定はできないもの

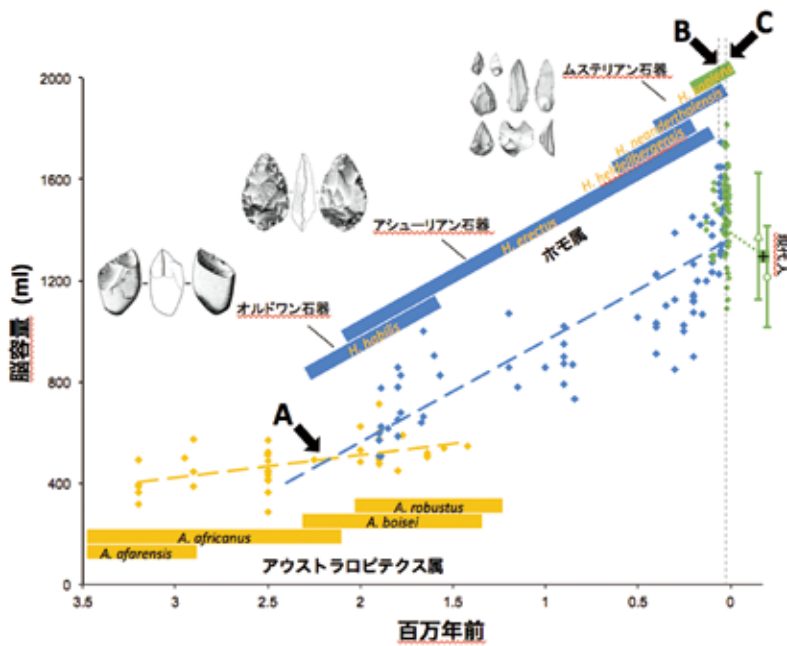


図1 ヒト祖先の脳容量の増大<sup>4)</sup>(資料<sup>13)</sup>をもとに改変

の)むしろ縮小しているのではないかともしられている<sup>4)</sup>。つまり、脳の大きさと行動の高度化は、ある時点からは対応がみられなくなる。生物種としてのホモ・サピエンス登場から、その認知能力が発揮されるまで、なぜこれほどの時間がかかったのかは大きな謎だ<sup>5)</sup>。

第三の謎は、さらにあと最終氷期が終わって気候が温暖化した1万2千年前以降(矢印C)に起こった狩猟採集社会から農耕社会への転換を契機として、世界中の各地で文明が一齐に勃興したことである。それらの諸文明は多様でありながら、酷似した要素も多く、ヒト固有の認知的特異性が基盤にあるように思われる。生物進化の時間スケールからみるとこのような短期間にかつ同時多発的に、知能に関する遺伝的変化が相互に独立に引き起こされたとは考えられず、当然脳容量の拡大もない。

### こころを機織る「三元ニッチ構築」

まず第一の謎から考えてみたい。石器を作り使いはじめたことによってホモ属の脳に何が起こったのだろうか？

人間存在の空間的・時間的構造は風土性・歴史性として己れを現してくる……風土における自己の了解は同時に道具を己れに対立するものとして見いださしめる……「何のため」を常に指示しつつ「するのためのもの」であるところに、すなわち「ための連関」であるところに、道具の本質的な構造がある。そうして「ための連関」は人間の存在から出てくる……。

和辻哲郎(『風土<sup>2)</sup>』第1章2より)

道具を使えば、実質的な身体の機能的形態を、生物進化を待たずに瞬時に変化させられる。また、道具を環境に埋め込むことで、急速に新たな棲息環境の様式すなわち「環境ニッチ」(あるいは「風土」)を創りだせ

る。生物の脳は、棲息する環境条件に適応すべく進化してきたが、身体も環境も急激に変化する状況では、それに対応するために脳の情報処理容量を膨大させることが必要となる。実際、サルに道具使用を訓練すると、進化の過程で膨大した部位に対応する脳領域が拡大する<sup>6)</sup>。新しい脳神経組織が創り出されるので、これを「脳神経ニッチ構築」と名付けた。使える脳のリソースが増えれば、従来の機能を援用して新しい認知機能(言語、抽象、計算、想像など)を担えるようになる。すなわち、「認知ニッチ構築」である。この3つのニッチが、循環しつつその中に道具を介して「~のため」という意図を埋め込みながら次第に拡大発展する現象が「三元ニッチ構築」(図2)である<sup>7) 8)</sup>。しかし、単に脳が膨らむだけでは、「三元ニッチ構築」の相乗効果は生じない。脳が大きくなるにつれて、神経細胞の数が増加して新しい脳領域が創られることが不可欠だ。サル類にも大小様々な種があるが、大きな種の脳では、神経細胞の数も、異なる機能を担う脳領域の数も格段に多いことが知られている。これは、最近縁の哺乳類のネズミ類では、大きな種と小さな種の脳のあいだで脳領域の数も神経細胞の数もさほどは変わらないのと対称的である。この差異がそれまでの進化で準備されていたので、霊長類としてのホモ属は道具使用の開始を契機として、「環境ニッチの拡張」と「脳領域の拡張」と「認知機能の拡張」の相乗効



図2 三元ニッチ構築の概念図<sup>8)10)</sup>

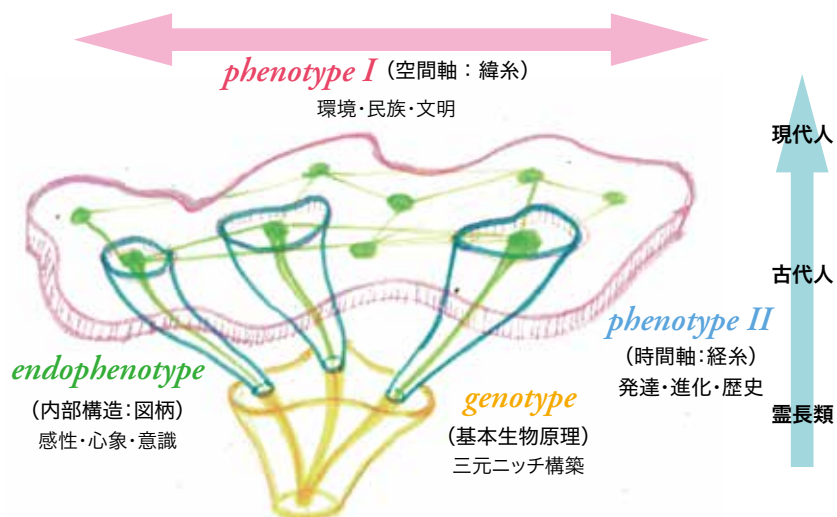


図3 新学術研究「認知科学班」の枠組み

果という、ヒトに至る急速な進化の道を歩み始めることになったのだろう<sup>8)</sup>。

これが、進化のメカニズムとなるには、個体変化の情報が次の世代へと継承されて、歴史的蓄積を実現する仕掛けが必要だ。従来の進化メカニズムの常識は、まず遺伝子が突然変異し、それによる形態変化のうち環境に適応したものが生き残り、という遺伝子を原因とした考え方だったが、世代間継承する情報はゲノムだけではないことが、最近次々と明らかになってきた。ゲノム外メカニズムとしては①エピジェネティクス、②遺伝子以外の細胞内分子状態、③環境に埋め込まれた要因、④初期生後発達に関わる社会的要因などが考えられる。そして、これらに対応する遺伝子変化が、結果として適応的に選択されて固定されたという、いわば因果関係が逆転する可能性(ボールドウィン効果<sup>9)</sup>)の具体的メカニズムが改めて指摘されはじめている。「三元ニッチ構築」は、道具が埋め込まれた環境-脳-認知という風土と、広義の遺伝情報を歴史的に蓄積・継承する装置が爆発的に拡張したメカニズムのモデルとなり得る。すなわち、ヒトの心を織りなす緯系(風土)と経系(歴史)である。このように、サル類祖先から現生人類にまでいたる人類進化の特徴は、遺伝子の突然変異と自然淘汰を通し

て、単に受動的に適応するだけではなく、むしろ人類が能動的に変化させる自然環境と社会環境の進化が、重要な要因となるのであろう。

本新学術領域の「認知科学班<sup>10)</sup>」(代表: 入来篤史)では、このメカニズムを図3のように構造化して分担・協力しつつ追究している。すなわち、ヒトの心の進化は、基本的には霊長類としてのヒトの脳の生物学的特性に依拠して(黄色部:「基本生物原理(genotype)」)、身体と道具を介して周囲の環境・風土と相互作用しつつ(赤色部:「空間構造(phenotype II)」・緯系)、進化・歴史の時間軸に沿って発展しながら(青色部:「時間構造(phenotype I)」: 経系)、最終的には現生人類・現代文明の空間的な錦織図柄のような地図状構造(緑色部:「内部構造(endophenotype)」)の発現に至るものと想定して、総合的な研究を展開している。つまり、認知科学班では、「三元ニッチ構築」の一翼を担う「認知的ニッチ構築」の基本生物原理を明らかにするとともに、それが時間軸に沿ってどのように進化を遂げ、第二・第三の謎である人類の現代文明の空間特性に至るのかを実証的に解明することを目指している。

### 錦の幕が上がる時

では、その第二、第三の謎解きに

挑もう。ネアンデルタール人の脳は現生サピエンスよりも大きいくらいだったので(図1)、それまでの「三元ニッチ構築」のメカニズムの単純な延長では、最近数万年に突然始まって進行したサピエンスの爆発的文明化は、説明できそうにない。なぜならば、普通は「進化」「発展」というと、次々と新しいものが付け加わってゆくというイメージで、これだと、世界中至る所で多様性はあるにせよ相当の類似性をもって、同時多発的に急速に文明が発展したことを説明するのは無理だからである。しかし、それまでの生物としての進化の過程で素地は準備されていたが発現していなかったものが、何らかの理由で、錦織の緞帳が跳ね上がり突然に舞台装置が現れるように、ある方向に向かって一気に花開いたというようなメカニズムを想定すると、この謎が氷解するのではないか。つまり、それまでの各個別認知領域での「三元ニッチ構築」による脳膨大によって、潜在可能性としての下準備は出来ていた(前適応)けれども、その環境では不要だったり不都合なことが多いので発現せずに隠されていたものが、条件が揃ったとき露わになって領域間の統合・再配線が一気に進んで機能拡大したということではないか。要素としての下準備が出来ていてあとはそれらを再統合して構造化するだけで発現するとすれば、新しい認知ニッチを創出するためのコストが格段に低減されるので、「三元ニッチ構築」の基本原理は保存されたまま、人新世に至る人間文明の発展発達(環境ニッチ・風土)が一気にある方向に爆発的に進んだことがよく説明できる。また、再結合の素材として準備されていた個別脳機能は同一だから、統合の結果には幅広い共通性があることも納得がゆく。

つまり、サピエンスに至って遭遇したある状況が引き金となって、それまでに獲得していた、環境と人間と

の相互作用のメカニズムが一斉に拡大加速して発現する契機となった要因を検討すれば、文化発展と生物進化の相互関係のメカニズムとして、これまでとは全く違った景色が見えてくるだろう。しかし、実験ができない人類史研究において諸要因を精緻に分析することは容易ではない。異なる環境で独立して起こった文明形成を比較分析することが有効であろうが、ユーラシア大陸やアフリカで発生した諸文明は、複雑で密な相互の影響関係があり、独立したプロセスとして比較することが難しい。ならば、限定された集団がボトルネックを経て「出ユーラシア」し、その後は相互の交流が希薄な地域を対象として、これらの視点に立った分析的手法で解き明かそうとすることが有効だろう。新学術領域研究「出ユーラシアの総合的人類史学——文明創出メカニズムの解明」では、アメリカ大陸やオセアニアに加えて、そのような地域の1つとして「日本」に注目し、研究を展開している。

## 謎を解く「やまごころ」

サピエンス進化の3つの謎を解く手掛かりは得られた。ホモ・サピエンスの登場以前にどのような1) 認知機能、2) 環境相互作用、3) 発現抑制などのメカニズムが準備され、サピエンスに至って4) 何を契機として、5) どの方向に、6) どのような多様性と類似性をもって、爆発的速度で、同時多発的に、文明化が進んだかが、三元ニッチ構築のメカニズムの切り口で解き明かされることを期待する。文明史の研究の中核をなす考古学や歴史学は遺跡、遺物、古文書などヒトの心の働きが残した物的証拠を手掛かりに認知特性にアプローチする。他方、遺伝学、解剖学などの生物科学は、ヒトの身体、遺伝子などの生体資料を手掛かりに人類進化の生物学的基盤を通してヒトの認知特性の様々な制約条件を明

らかにする。そして、ヒトの心の働きを直接研究するという意味で、心理学・認知科学には本領域で大きな期待が寄せられている。他方、心理学、認知科学は、現在を生きる人間の心や行動の理解に焦点が当てられ、歴史の問題に対する研究の蓄積は必ずしも多くない。こうした現状からの飛躍を期して、統合的人類史学を確立するために、本新学術領域では、心理学、認知科学が考古学、人類学と協働して文明創出の理解に貢献する道を模索しており、その展望を『Psychologia』誌の特集号<sup>11)</sup>として来年初に刊行予定である。

この新学術領域研究では、文明形成期に見られる大規模な物質的環境構築の比較分析をするためのモデルとして、身体を介した物質と心の「相互浸潤モデル」(図4)を研究戦略の基盤に据えている。これは、ヒトの認知が脳内に限定されるものではなく、身体を介して物質的世界と不可分な関係にあるとする「拡張された心」・「分散認知」などの概念を踏まえ、考古学においても遺跡・遺物を認知的プロセスを構成する要素と位置付けようとするものである。このモデルは、遺伝子決定論と文化相対主義の双方からの脱却を目指し、生物としてのヒト(遺伝子・身体・脳)が文化を生み出すとともに、それにより形成される人工的環境や社会的規範がヒト特有の環境ニッチ・風土となり、さらにそれに順応することによりヒト自身が歴史とともに変容するというダイナミックなプロセスを、分野統合的なアプローチによって達成することを目指す。このような人間観・世界観・歴史観は、己を歴史・風土に育まれた自然の一部として自覚する、和風文化の心のありようと極めて相性が良い。日本発の



図4 相互浸潤モデルの概念図<sup>3)</sup>

「こころ」の研究に大いに期待を寄せる所以である。

しき嶋のやまごころを人とはば  
朝日ににほふ山ざくら花  
本居宣長(肖像自賛<sup>12)</sup>)

## 文献

- 1 在原業平(905)古今和歌集(伊勢物語82段より)。
- 2 和辻哲郎(1935)『風土——人間の考察』岩波書店。
- 3 <http://out-of-eurasia.jp/index.html>
- 4 Iriki et al. (2021) *Psychologia*, in press.
- 5 Renfrew (1996) in: *Modelling the early human mind*, Mellars, Gibson eds. McDonald Inst., pp. 11-15.
- 6 Quallo et al. (2009) *Proc Natl Acad Sci USA*, 106, 18379-18384.
- 7 Iriki & Taoka (2012) *Phil Trans Royal Soc B*, 367, 10-23.
- 8 Bretas et al. (2020) *Neurosci Res*, 161, 1-7.
- 9 Baldwin (1896) *Science*, 3, 438-441.
- 10 <http://out-of-eurasia.jp/members/program/b02/index.html>
- 11 [http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/psychologia/psychologia\\_blog/cfp601/](http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/psychologia/psychologia_blog/cfp601/)
- 12 本居宣長(1790)61歳自画像自賛像。
- 13 Matzke (2006) <https://pandasthumb.org/archives/2006/09/fun-with-homini-1.html>

# プロジェクト一覧(2020年度)

\*肩書きは当時

区分	プロジェクト名	代表者
教育 プロジェクト	こころの思想塾	広井良典
	連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	阿部修士
	こころの科学集中レクチャー	内田由紀子
	アジア文化塾	熊谷誠慈
	ブータン文化講座	熊谷誠慈
	現代アート、その〈こころ〉は？	吉岡 洋
研究 プロジェクト	持続可能な医療・社会保障に関する研究	広井良典
	組織文化とこころのあり方:日本における企業調査	内田由紀子
	セルフの進化生物学	小村 豊
	現代社会における〈毒〉の重要性	吉岡 洋
	Savoringの科学	柳澤邦昭
	こころワールドマップの作成	上田祥行
	こころが豊かになる環境の選択と構築と共感の心理	上田祥行
	こころの豊かさとその逆説性——心理療法にみられるこころの変化とその波及	河合俊雄
	気晴らしと攻撃性のメカニズム	河合俊雄
	高齢者の幸福感と健康に関する心理・神経科学アプローチ	中井隆介
	シンギュラリティ後の生活者のこころのあり方について	広井良典
	つながり・共生のメカニズムとこころの豊かさ	内田由紀子
	感動の社会・神経基盤の研究、および行動変容に及ぼす効果の検証	中山真孝
	アジアと日本の精神性、幸福観、倫理観	熊谷誠慈
	超高齢社会における現代日本の医療・保健・福祉にかかる倫理	清家 理
	ポスト成長時代におけるこころの問題と変容	畑中千紘
	ポスト成長時代の経済・倫理・幸福	広井良典
	拡張された芸術学(Extended Theory of Art)	吉岡 洋
	意思決定の認知科学	阿部修士
	こころを込めることの認知的・身体的効果	熊谷誠慈
空間的思考の認知メカニズム	武藤拓之	
実践活動	子どもの発達障害へのプレイセラピー	河合俊雄
	鎮守の森とコミュニティ経済	広井良典
	SNSカウンセリングとコミュニティ支援	河合俊雄
社会発信	京都こころ会議	河合俊雄
	こころの研究に関する国際発信プロジェクト	内田由紀子
一般公募 プロジェクト	眼球運動測定を用いた読字障がい児の音読における視線特徴の検討——読字障がい児の支援を目指して	菊野雄一郎(鳥根県立大学講師)
	発達障害の認知機能障害と心理社会的要因・身体環境的要因との関連の検討	後藤幸織(京都大学霊長類研究所准教授)
	ケアの認知心理学	布井雅人(聖泉大学人間学部講師)
	腸内フローラ移植による身体症状の改善と心理的变化について	城谷仁美(ルークス芦屋クリニック 臨床心理士)
	こころに関する可視化情報の有用性探索と予防教育への応用	加藤奈奈子(奈良女子大学大学院生活環境科学系助教)
	The role of culture in perception and interpretation of smiles	SZAROTA Piotr Rafał (Institute of Psychology, Polish Academy of Sciences, Warsaw Associate Professor)
	The Mythical Priest Ya-ngal and the Ritual 'Sel'	Lama, Nima Hojer (Institute of Asian Studies, Faculty of Arts, Charles University Assistant professor)
	Motivation, Display Rules, and Expressive Dialects Affect the Display and Decoding of Facial Expressions of Emotion	Young Steven Graham (Baruch College and The Graduate Center, City University of New York Associate Professor)
"Orientalism" and "Occidentalism" in Depth Psychology: the Contribution of Hayao Kawai to the Jungian Perspective on the Psyche	Montanari Marco (Sapienza University of Rome Adjunct Professor)	

## 研究プロジェクト

## 持続可能な医療・社会保障に関する研究

広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）

### ■新型コロナ禍と医療システム

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響が拡大した年だったが、それと医療システムとの関連についての分析や考察が求められている。

新型コロナウイルスに起因する日本での人口当たりの死亡者数は欧州やアメリカに比べて相対的に少ないが、これは政策的対応の成功というより、遺伝子レベルの要因を含めた他の要因が関与している可能性が大きい。

医療システムについて見るならば、日本の場合、もともと人口当たりのICU（集中治療室）の数がアメリカやドイツに比べて大幅に少ないことや、新型コロナウイルスに感染した患者を実際に受け入れている医療機関の割合が低く、欧米に比べて患者数が少ない割に“病床ひっ迫”ないし“医療危機”が直ちに生じてしまうなど、様々な問題が指摘されている。

これには大きく2つの背景があると考えられる。1つは日本の場合、医療における「財政」面（医療保険制度）は「公」中心である一方、「供給」面においては公的病院の割合が主要諸国の中でもっとも低く（表参照）、しかも“プロフェッショナル・フリーダム”という標語の下で自由放任的な政策対応がなされてきたため、医療機関に対する公的コントロールがきわめて弱いという点である。端的に言えば「医療の公共性」という点が日本においては脆弱なのだ。

もう1つは、日本の場合、概して診療所（開業医）や中小病院に医療費ないし診療報酬が優先的に配分されており、公的病院を含め、高次機能を担う病院への医療費配分が手薄であることである。

	イギリス	ドイツ	フランス	日本	アメリカ
医療供給システム (公的病床の割合)	公	公	公	私	私
	ほぼ全て	約90%	約70%	約20%	約25%
医療財政システム	公	公	公	公	私
	税	社会保険	社会保険	社会保険 (税の投入大)	民間保険 中心

表 医療システムの国際比較

注：供給の下欄は病床の総数に占める公的(国立・公立)病院病床の割合。ただしドイツは公益病院(宗教法人立・財団法人立)を含む。またイギリスは1990年代のNHS改革により国立病院は独立採算制のNHSトラストに改変。

出典：広井良典『持続可能な医療——超高齢化時代の科学・公共性・死生観』筑摩書房、2018年。

### ■医療費の配分問題——日本の医療の構造的な課題

基本的な点を確認すると、現在の日本の診療報酬（保険点数）は1958年におおむね原型ができたものだが、当時は医療機関の大多数は診療所（開業医）だったこともあり、基本的に診療所をモデルにした点数体系が作られた。その後、現在に至るまで改定を重ねてきているものの、日本の診療報酬は以下のような「構造的」ともいえる問題点を有している。

すなわち、①「病院、とりわけ入院部門」の評価が薄い、②「高次医療」への評価が薄い、③「チーム医療」の評価という視点が弱い、④「医療の質」の評価という視点が弱い、という諸点である。実際、医療施設の収益率を見ると、診療所には比較的潤沢な医療費が配分される一方、病院については高次機能の病院ないし公的病院ほど収益率が低くなっている（広井『持続可能な医療——超高齢化時代の科学・公共性・死生観』筑摩書房、2018年参照）。

このように、医療費の配分問題は、日本の医療の構造的な課題として皆保険体制の成立（1961年）以来存在していたものだが、そうした矛盾がコロナ

禍を契機に露呈しているという面がある。

「診療所から病院、特に公的病院を含む高次機能病院への医療費の配分シフト」という点を含め、医療費の配分のあり方を正面から議論すべき時期に来ている。診療報酬のあり方を審議する中医協（中央社会保険医療協議会）の議論などは、細部のテクニカルな調整が中心で、大きな枠組みとして、医療費の配分をどのようにするかという根本的な論議が不足している。

高齢化と並行して人口減少時代となる中で、「限られた資源の配分」ということが社会全体の課題となっている。「医療の公共性」という点を含め、医療をめぐる公私の役割分担や医療費配分のあり方を、透明性の高い形で論じる場や方法を考える必要がある。新型コロナ禍を契機として議論し改革を進めていく点の1つは、こうした日本の医療システムの基本問題なのである。

# 組織文化とこころのあり方 ― 日本における企業調査

内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター教授) + 中山真孝 (同センター特定助教)

## ■プロジェクトの目的と背景

グローバル化が進む中で、企業はそのあり方を模索してきた。特に従業員のモチベーションをどのように保つのか、働き方改革なども頻繁に取り上げられるようになってきた中で、成果主義の導入や労働市場の流動性向上により、個人がその能力に見合った成果を得たり、あるいは特性に見合った組織を選んだりする制度が導入されてきた。一方で日本の伝統的な職場の風土においては、互いの協調性や、「チーム」「ライン」「島」での共同作業が長らく取り入れられてきたこともあり、個人の主張よりは、社内の調和や家族的雰囲気重視、「〇〇社の社員である」という社会的アイデンティティの形成に向けた社員教育がなされてきた。このような協調性は、成果についての貢献を評価する際に、個人ではなくチーム・職場の貢献を評価するように働き、また年功序列や終身雇用という個人の能力や成果によらず給与・雇用を決定する制度に支えられてきたと考えられる。こうした協調性を背景にした組織に新たに導入されてきた成果主義の制度は、日本社会で働く個人の心理プロセスにどのように働いているのだろうか。本研究では、2つの研究でシナリオ実験を用いて日本と米国でどのように成果主義が運用され、また周囲がそれに対してどのような反応を示しうるか検討した。

## ■方法

**参加者** クラウドソーシングサイト(ランサーズ・Prolific) 登録者。研究1では日本197名米国201名、研究2では日本199名米国186名分を分析した(各サンプルの平均年齢34.59 -40.78歳)。  
**シナリオ** 参加者は、職場で成果を上げたシナリオ(図1)を読み、中心人物(Xとする)やチーム、会社、運な

どの要素の貢献を評価した。また、Xなどがどの程度の報酬(金銭及び出世)を得るかどうかの予測も行った。さらに研究2では、予想された報酬よりも多い報酬を得られたときにXやチームメンバーがどのような感情を抱くかどうかの評定も行った。シナリオは16種類用意し、各参加者はそのうち擬似ランダムに選んだ4種類を読んだ。

## ■結果と考察

主な結果として、同じシナリオに対して、日本の参加者は米国の参加者と比べて中心人物Xの貢献を低く評価した(研究1)。しかしこの傾向には日本では世代差が見られ、若い人ほど中心人物Xの貢献を高く評価する傾向があった(図2、研究2)。つまり、米国的な成果主義に沿った貢献の評価への変化が、日本でも世代によっては起こっていることが示唆される。このような世代差は、貢献を実際に報酬に反映させる場合には見られず、Xの出世の可能性はいずれの研究でも一貫して米国のほうが高く評定された。さらに、Xが予想より多くの報酬を得た場合に日本の参加者は「恥ずかしさ」を、米国の参加者は「誇り」を感じるだろうと予測しており(図3)、日本では多くの報酬をもらうことに対する他者の評価、特にそれで職場の調和が乱れることへの懸念があることが推測される。

Xの所属するチームはA社の持つ複数の工場を管理している。ある日工場から連絡があった。工場の機械が止まっているがまったく原因が不明である。Xとチームはすぐさま現場に向かった。チームで協力して様々なテストや検針を行ったが、依然として原因はわからなかった。このままではどうしようもないという雰囲気が漂い始めていた。しかし、Xはある案をひらめき、チームに提案した。最初チームメンバーはその案の理解に苦しんでいるようだったが、案の可能性を理解し始めると、空気が一変し、大きな希望が見えた。チーム一丸で検査・修理に取り組み、見事工場は再開することができた。また、再発防止マニュアルも作成できた。できるだけ早く問題を解決できたこと、マニュアルによってざっと見積もって1億円の損失が防がれた。

橙: X(中心人物)の貢献  
 紫: チームの貢献  
 緑: 結果(1億円相当の利益or損失回避)

図1 シナリオの例

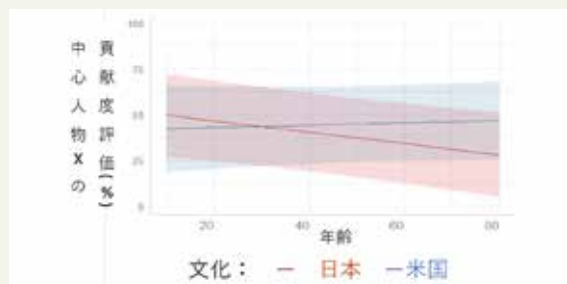


図2 貢献度評価の文化差・世代



図3 Xが予想以上の報酬を得た場合の感情の推測

## ■結論

成果主義の導入で日本企業の評価制度は変化している。一方でそれを運用する評価者としての人々やその心理傾向は必ずしも変化しているわけではないことがわかった。貢献を評価する際には若い世代においては中心人物の貢献を大きく評価する米国的傾向が見られたが、それを実際に報酬に反映させることや報酬に対する感情反応の予想には世代差はなく、日本のこれまでの心理傾向が続いていることが示唆された。

\*本研究は京都大学大学院人間・環境学研究科内田あや氏の修士論文として提出された。



## 研究プロジェクト

## セルフの進化生物学

小村 豊 (京都大学こころの未来研究センター教授)

## ■本研究の目的

学習には階層性がある。学習の仕方を学習するというメタ学習は、生存・適応にとって、極めて重要な能力であると言われているが、生物がメタ学習をどのように実装しているのか、詳細はわかっていない。本研究では、メタ学習のなかでも、探索 (exploration) — 活用 (exploitation) という相反する行動方策を、どのようにバランスをとって制御しているのかという問題に焦点をあて、霊長類の行動データと強化学習モデルをふまえて、生物に備わっているメタ学習の制御様式の一部を明らかにすることを目的とした。

exploitationとは、既知の機会を最大限利用しようとする方策をさし、explorationとは、他のよりよい機会を探る方策をさすが、一方に偏っていると都合が悪い。このようなジレンマを抜け出すためには、両者を状況に合わせて適切に制御する必要がある。強化学習理論において両者のバランスは、逆温度というメタパラメータによって制御されている。一方、動物・ヒトにおいては、採餌行動や配偶者探しから情報検索や社会行動に至るまで、両者のバランスは、環境の確からしさ・不確からしさに大きく左右されることがわかっている。

## ■研究方法

我々は、環境刺激の曖昧さを操作したときのマカクサル意思決定の変化に着目して、その過程に内在する逆温度メタパラメータを、部分観測マルコフ決定モデルと照合させることで可視化した。その上で、逆温度メタパラメータの日内変動を定量し、意思決定と行動指標との関係を検証した。

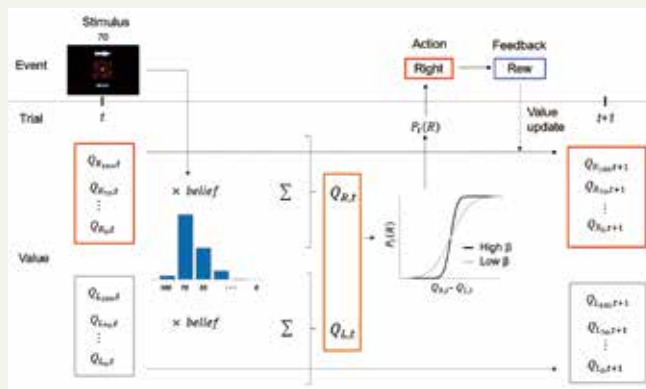
まず、意思決定 (decision) と確信度 (confidence) を同時に測定できるPDW (post-decision wagering) 課題

から得られたマカクサルの行動データに、強化学習の一種であるQ-learningモデルを適用し、decision action、wagering actionそれぞれの逆温度メ

タパラメータを推定することで、confidenceとexploration-exploitationの行動戦略の関係性を調べた。PDW課題における行動は、意思決定についての行動 (右を選ぶか左を選ぶか) と、confidenceに関する行動 (wagerするかescapeするか) に分けることができ、それぞれ二択の行動選択の状況におけるQ-learningモデルについて検討した。図は、1つのセッションでの、Q-learningにおける行動価値decision Q-valueとconfidence Q-valueの更新と行動の選択確率についての算出方法を示す。

PDW課題においてQ-valueの算出に関するイベントを記述すると、①motion刺激が出た後に、②右か左かの選択 (Action) を行い、③報酬が与えられる。行動価値について、被験体は6種類のmotion刺激それぞれに対し、右選択行動 (R)、左選択行動 (L) の計12種類のQ-valueを持っていると考える。

詳しい説明は別の機会に譲るが、逆温度メタパラメータは、強化学習において、行動を選択するとき探索という方策をとるか、活用という方策をとるかを決めるパラメータとなっており、逆温度メタパラメータが高いと、行動はvalueに従って選択されやすい活用戦略をとり、逆温度メタパラメータが低いと、行動はvalueによらずランダ

図 メタ学習パラメータ、逆温度( $\beta$ )の推定法

ムネスが増加する探索戦略をとる。

本研究では、decision行動についてのdecision  $\beta$ 、confidence行動についてのconfidence  $\beta$ の2種類の逆温度メタパラメータを想定した。その後、選択確率に従って行われたdecisionにより報酬が与えられ、同時にQ-valueの更新が行われる。つまり、受け取った報酬とQ-valueとの差に $\alpha$ とbeliefによって重みづけをし、それによってQ-valueの更新が行われる。ここで、 $\alpha$ は学習率であり学習の速さを決めるパラメータである。

## ■研究結果

1つのセッション内で、50トライアルを1つのピンとして区切り、そのピン内での逆温度メタパラメータを、トライアル進行方向で追跡していくと、decision  $\beta$ 、confidence  $\beta$ ともに周期性があることがわかった。decision  $\beta$ 、confidence  $\beta$ ともに、1000トライアルあたり5cycle前後、つまり、約200トライアル周期で揺らいでいた。これは時間で換算すると20分ほどの周期であり、かなりゆっくりとしたオシレーションであるが、逆温度メタパラメータの周期性が、トライアルと時間のどちらをベースとしているのかは、今後の検討事項である。

# 現代社会における〈毒〉の重要性

吉岡 洋 (京都大学こころの未来研究センター特定教授)

## ■2020年度の活動

コロナ感染症のため、公開講義・セミナーなどは開催できなかったが、2020年12月には展覧会「ファルマコン 連鎖／反応 (Pharmakon Chain Reaction)」を京都のアトリエみつしまにおいて開催し、その中で各研究メンバーによる発表を、現地とオンラインとの併用によって行った。アトリエみつしまの2階大広間において入念に感染予防対策を施した上で、現地には発表者・聴講者を含め約10名が集まり、オンラインで配信しながら、研究メンバー4名（内3名は現地、1名はオンライン）による、今年度の研究発表を行った。

その成果は、2021年3月に刊行された『ポワゾン・ルージュ3 現代社会における〈毒〉の重要性 2020』に収録した。内容は、吉岡洋「コロナ下のファルマコン」、大久保美紀「菜食主義の現代食に関するファルマコン的考察」、加藤有希子「〈毒〉を避けて来た真っ白な道に——暗黒啓蒙、コロナ禍、ヘイトを超えるには」、小澤京子「廃墟化する身体、廃墟としての身体——日本の一九八〇年代から」という4篇の論考の他、展覧会「ファルマコン 連鎖／反応」についての記録、そして出典作家によるエッセイとして、ジェレミー・セガール、フロリアン・ガデン「生命文化の構築へむけて *Vers une culture du vivant*」(翻訳：大久保美紀)が、日本語訳およびフランス語原文で掲載された。また『ポワゾン・ルージュ 2020』の表紙は、出典作家のフロリアン・ガデンによる作品「キアスム (*chiasme*)」のイメージを用いてデザインした。

## ■展覧会「ファルマコン 連鎖／反応」

展覧会「ファルマコン 連鎖／反応」には、日本およびフランスより国際的に活躍するアーティスト11名が作品を発表した。この展覧会のための新作も



展覧会「ファルマコン 連鎖／反応」のチラシ

多く、コロナ禍の生活をつうじて生まれた作品とともに、現在の世界状況を予見していたかのような2019年以前制作の作品が、アトリエみつしまの1階展示室、2階の和室において展示された。コロナの状況もあり観客は例年に比べて多いとは言えなかったが、遠方からこのために京都まで来ていただいた美術関係者も何人かおり、また企画者の1人である大久保美紀による文章が、2021年3月26日の『京都新聞』に掲載された。

展示作品としてフランスからは、現状をシニカルなユーモアで表現するホルン奏者・ヌードモデルのエロイーズ・イルベールによるドローイング、フロリアン・ガデンによる蛍光性の絵の具を用いて描かれ暗室で鑑賞する作品《*chiasme*》や巨大ドローイング《*œ*》、衛生概念をエコロジーの哲学で読み解くジェレミー・セガールの作品が展示された。また、フランスを拠点に国際的に活躍しながら日本を見つめ直す古市牧子、命のメカニズムへの関心を独特な世界観で表現する福島陽子、そし



大久保美紀氏執筆記事（京都新聞朝刊、2021年3月26日）

てキュレータの大久保美紀が作品を展示した。一方日本からは、消しゴムの消しカスから驚くべき細密彫刻を作り上げる入江早耶による新作《青面金剛 困籠奈ダスト》、磁性流体彫刻で知られるメディアアーティストの児玉幸子による近作ライトアート作品《雲の路》、本プロジェクトの共同研究者である美術史家の加藤有希子による小説も展示された（小説は『クラウドジャーニー』というタイトルで水声社より刊行予定）。また気鋭の若手画家・谷原菜摘子がコロナ禍の生活を通じて描いたベルベット絵画《星を頂戴》およびドローイング新作を発表し、また素材を探求し斬新な空間彫刻を試みてきた堀園実も新作の漆喰彫刻を発表した。

## 研究プロジェクト

## Savoringの科学

柳澤邦昭 (京都大学こころの未来研究センター特定講師) + 阿部修士 (同センター准教授)

## ■研究の背景と目的

観光は、余暇の時間の中で、日常生活圏を離れて行うさまざまな行動であり、ふれあい、学び、遊ぶことを目的とした旅行として定義される(佐々木, 2000)。コロナ禍の影響で、こうした観光旅行が大きく制限されるなか、マイクロツーリズム(株式会社星野リゾート, 2020)という新たな概念がいま着目されている。これは遠方への旅行が自粛される中で、自宅から近距離圏で安全な観光を楽しむという旅行のあり方である。こうした新たなスタイルは、地元の観光地の魅力を人々が再認識するきっかけを提供している。

では、われわれは観光地のどのような特徴に魅力を感じるのだろうか。旅行満足度に着目した研究では、観光地の自然的特徴、文化的特徴、社会的相互作用など多次元要素により旅行満足度が高まることが報告されている(Alegre & Garau, 2009)。こうした旅行満足度を対象とした研究を考慮すると、人は観光地が有する極めて多様な観光資源に対して価値や魅力を感じ、観光旅行への動機づけ・欲求が高まると考えられる。

本研究では近距離圏における観光旅行に着目し、以下3つの点を検討した。(1) オンライン調査により大阪府の観光地の写真を多様な価値基準で測定し、観光地の価値基準に関する主成分を特定した。また、(2) 行動実験により(1)で得られた主成分と観光旅行への動機づけ・欲求の関連を検討した。さらに、(3) fMRI実験により観光地の写真を見ている際に(1)で得られた主成分の情報が表象されている脳領域を検討した。

## ■研究の方法

オンライン調査の参加者：大阪府在住の方250名(女性125名、平均年齢

44.8歳)。参加者は大阪府の観光地の写真((公財)大阪観光局)48枚を見て、景観的価値に関する井上ら(2020)の尺度を改変した15項目(5件法)からランダムに選ばれた3項目に回答した。なお、景観的価値には娯楽的価値、学習的価値、療養的価値、文化的価値などが含まれる。

行動実験及びfMRI実験の参加者：大阪府在住の方21名(女性11名、平均年齢30.8歳)。参加者は行動実験とfMRI実験の両方に参加した。また、両実験とも、オンライン調査で使用した大阪府の観光地の写真を実験刺激として使用した。行動実験では、観光地の写真を見て、その観光地に行ってみようかどうか(動機づけ得点)について参加者が回答した(5件法)。fMRI実験では、参加者には撮像中にスクリーン上に呈示された観光地の写真を見て、その場所に行ってみようかどうかを考慮するように教示した。

## ■結果と考察

オンライン調査で取得した各観光地に対する価値15項目の値に関して主成分分析を実施した結果、累積寄与率が3成分で80%を超え、3つの主成分で観光地の価値に関する情報を説明することが確認された。各主成分の特徴から第1主成分は「自然」、第2主成分は「歴史」、第3主成分は「エンターテインメント」として解釈した。

行動実験のデータでは、それぞれの観光地の写真に対する各主成分得点と各観光地への動機づけ得点の関係を検討するため、主成分回帰分析を実施した。その結果、各主成分の有意な効果が確認された( $ps < .001$ )。とりわけ第1主成分得点の高い観光地(e.g., 箕面公園、勝尾寺)に対して観光旅行への動機づけが高いことが示された(図1)。

fMRI実験のデータでは、観光地の写

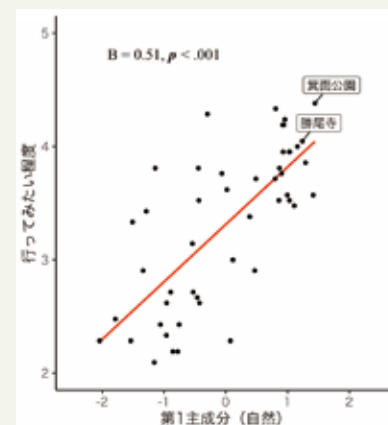


図1 各観光地の第1主成分得点と動機づけ得点の関係

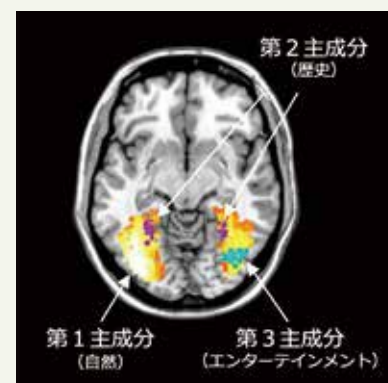


図2 観光地に対する各主成分を表象している脳領域(第1主成分が暖色、第2主成分が紫色、第3主成分が緑色)

真を見ている際に各主成分の情報が特定の脳領域において表象されているかどうかを検討するため、表象類似度解析を実施した。その結果、第1主成分に関しては後頭葉や側頭葉内側部の広範囲で、第2主成分に関しては紡錘状回で、第3主成分に関しては右下後頭回においてそれぞれ表象されていることが確認された(図2)。

本研究の結果から、観光地の価値は複雑で多様な要素・価値を含むが、いくつか重要な価値次元に縮約可能であることが示唆された。こうした価値情報は観光地の写真を眺めている際に脳内で表象され、観光旅行の動機づけ・欲求に寄与する重要な要素であると言えるだろう。

# こころワールドマップの作成

上田祥行（京都大学こころの未来研究センター特定講師）

## ■研究の目的

こころが豊かな状態とは具体的にどのような状態であるかや、こころという概念がどのように形成され、認識されているのかについて、まだ多くのことがわかっていない。私たちは、外界から情報を取り込み、それを再構成することで世界を認識している。したがって、こころを理解するためには、外界からの情報の取り込みである基礎的な知覚と、その再構成プロセスに関わる高次の思考、さらにはこれらに関わるヒトの情報処理システムそのものがどのような環境に適応してきたか、そのすべてを包括的に考える必要がある。

本プロジェクトでは、私たちが持つ「こころ」が、世代や文化を超えてユニバーサルなものであるかどうかを調べるために、様々な課題を世界の多くの地域で実施し、こころの研究の礎となるような重層的な地図（こころワールドマップ）を作成することを目的としている。このプラットフォームでは、低次な知覚・認知から高次な思考・推論・社会行動までを扱うが、ここでは「こころ」に関する考え方の共通性と相違性を明らかにするための概念調査の予備的な結果を報告する。

## ■方法と結果

調査には、身体の中でこころがある場所を図示する描画課題、幸せおよび不幸を表す色を選択する課題、主観的幸福度評定、人生満足感尺度（Diener et al., 1985）、成人用アニミズム尺度（池内, 2010）、植物におけるエージェンシー能力の認知（Ojalehto et al., 2017）、幸せの値段、こころ豊かなひとときを表す場面や経験の記述、労働時間と休憩の過ごし方について、という9種類の項目が含まれていた。これら調査項目について、Web上に日本語、アラビア語、英語、スペイン語、中国



図1 調査に使われたTwitterの広告概要(左)。調査の参加者の居住地域(右)

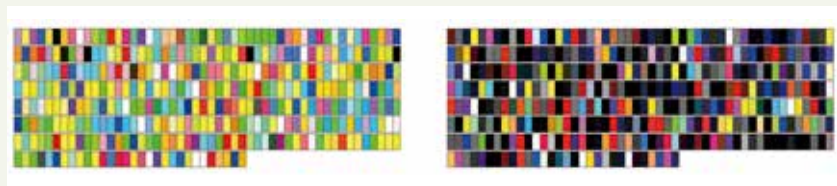


図2 調査参加者が選択した幸せを表す色(左)と不幸を表す色(右)

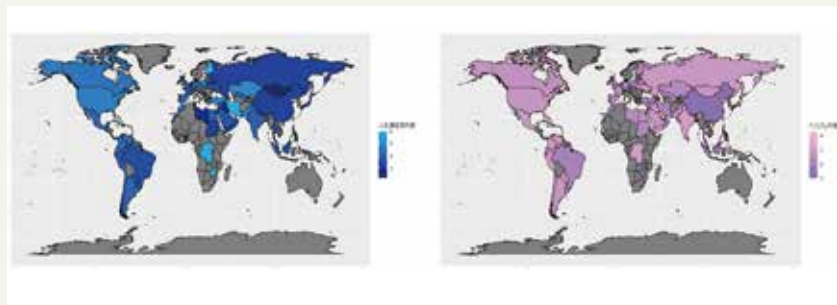


図3 地域ごとの人生満足感尺度の平均(左)と成人アニミズム尺度の平均(右)

語、フランス語、ロシア語の7カ国語で調査ページを設置し、Twitter広告によって調査への参加を呼び掛けた（図1左）。その結果、世界の71の国・地域から384名（男性214名、女性164名、その他6名；平均年齢33.6歳）が調査に参加した（図1右）。

紙面の都合上、ここではいくつかの調査項目をピックアップして報告する。幸せおよび不幸を表す色を選択する課題の結果を図2に示す。幸せを表す色では、全地域を通じて緑色や黄色といった色相を持った色が選ばれやすいことがわかった。一方、不幸を表す色では黒色や灰色を中心とした明度の低い色がよく選ばれた。また、不幸を表す色として赤色が一定の割合で選ばれていたことがわかる。

人生満足感尺度では、東アジア地域と比較して、北米地域や欧州地域で比

較的高い値を示す傾向が見られた（図3左）。この傾向はこれまでのWorld Happiness Report（2017, 2020）などで見られた傾向と一致している。また、アニミズム傾向については、国・地域ごとに違いは見られるものの、文化圏での傾向の違いは小さいように思われる（図3右）。

## ■今後の展望

ここで報告したものは予備的な調査であり、各地域のデータは1つの国・地域からは平均して数名ずつ、多い場所でも数十名程度しか参加していない。そのため、この結果は参考的なものとして考える必要がある。今後、調査をより大々的に行い、より多くのデータを集めることで、地域間での「こころ」に関する考え方の共通性と相違性の検討を進めていく。

## 研究プロジェクト

## こころが豊かになる環境の選択と構築と共感の心理

上田祥行 (京都大学こころの未来研究センター特定講師)

## ■研究の目的

私たちは自分のいる集団の人々の関係性をどのように把握しているのだろうか。このプロジェクトでは、「ドミナンス」と呼ばれるグループの中での影響力の大きさを、顔の形状や表情といった非言語情報からどのように見抜いているのかを検討してきた。これまでの研究では、自身と対面するように呈示された様々な表情の写真を見て、それぞれの人物がどれくらいドミナントな人物であるかを評定する場合と、様々な表情で向き合っている2名の写真を第三者的な視点から見て、どちらの人物がよりドミナントな立場であるかを判断する場合には、異なる基準によって判断が行われていることを示してきた。前者のような対面場面では、笑顔を表出している人物はドミナントであるとは見なされないが、後者のように2者を比較する場面では、笑顔を表出している人物の方がドミナントであると判断される(Ueda & Yoshikawa, 2018)。

本研究では、2者場面をさらに拡張し、より多数の人々がインタラクションしている場面において、表情が関係性の判断に与える影響について検討した。対面場面における個々人のドミナンスの推定と2者場面のドミナンス関係の判断が異なる基準で行われていたように、より多数の人がインタラクションする場面では関係性を判断する場合には、2者場面を単純に拡張したものとして説明できるのかどうかは明らかではない。複数の人物がインタラクションする場面では様々な要因(表情・性別・人物・配置など)が関与する可能性が考えられるため、実験では、表情・性別・人物、そしてそれらの配置を毎試行ランダムに呈示し、もっともドミナントな人物として選択された顔の特徴を分析した。これにより、グループの中でもっともドミナントと判断



図 実験で呈示した判断画面の例。実験参加者は、6人の人物が社会的なやり取りをしている状況を想定し、どの人物がグループの中でもっともドミナントな立場に見えるかを判断するように教示された。

される人物がどのような特徴を備えているのかを明らかにできる。

## ■実験の方法と結果

Kokoro Research Center 表情画像データベース(Ueda, Nunoi, & Yoshikawa, 2019) から男女8名ずつ、それぞれ中立・喜び・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・悲しみの7つの表情を用いた。各試行では、16名の中から6名が毎回ランダムに選ばれ、画面の中心を向いているように呈示された。それぞれの人物はランダムに選ばれた1つの表情で呈示された(図参照)。参加者は、6名の人物が社会的なやり取りをしていると想像し、どの人物がこの集団の中でもっともドミナントかを判断するように教示された。

実験の手続きの妥当性を検討するために、少人数(11名)での実験を行ったところ、2者場面でのドミナンス判断の実験と同様に、喜び表情を表出している人物が集団の中でもっともドミ

ナントであると判断されることが示された。写真が呈示される位置(左右や上下)はこの効果にほとんど影響しなかった。一方、怒り表情を表出している人物については、画面上部に呈示された場合は、画面下部に呈示された場合より、もっともドミナントだと選択される率が高かった。これらの結果は、2者場面で観察された関係性判断のメカニズムがより大人数の状況にも適応できる可能性を示唆している。

## ■今後の展望

この実験では、手続きの妥当性を検討するために、少人数に対して行われた。手続きの妥当性が確認されたため、今後はより多数の参加者のデータを集めて分析する。また、本研究では、カテゴリに応じた表情を提示したが、今後はモデリングソフトウェアなどを用いて、微細な表情がこれらの判断に与える影響についても検討をする。

# こころの豊かさとその逆説性——心理療法にみられるこころの変化とその波及

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

## ■研究の概要

心理療法は、相談者の心理的課題の解決を通じた成長・発展を目指すものとして捉えられる。心理療法に来談するとき、相談者は自身の症状や、職場・学校・家庭での不適応、事故・近親者の死などに直面し、現状を悩んだり、否定的に見ていたりする場合が多い。こうした負の状態からの回復・変化は、必ずしも右上がりの成長イメージだけで生じるものではなく、心理療法のプロセスの中で生じた否定的なものが、心の成長をもたらすことも、臨床実践では実感されてきた。誰もがストレスとは無縁と言えない現代社会において、心がネガティブな状態になったときどのように回復・成長し得るのかについて明らかにすることは重要な社会的課題といえるだろう。

一方、そうした心理療法のプロセスについての実証的研究はプライバシーの問題等から先行研究が少ない。そこで、本研究プロジェクトでは抽象化された形で事例を評定することで倫理的配慮をしつつ、事例の臨床的なエッセンスについて実証的に研究を進めてきた。それにより、症状や不適応から心の状態が回復・変化するプロセスを可視化し、単純な症状消失を超えた心の回復プロセスに寄与する事象や、成長可能性、変化を妨げる要因等を客観的な視点から提示することを試みたいと考えている。

## ■令和2年度の研究成果

### 1. 心理的症状群と身体疾患群の心理療法プロセスの比較

令和2年度は、相談者が心理的症状を主訴として開始した心理療法事例（心理症状群）と、身体疾患を主訴として開始した心理療法事例（身体疾患群）との比較を主とした。まず5年以上の臨床経験を持つ臨床心理士に対し「過

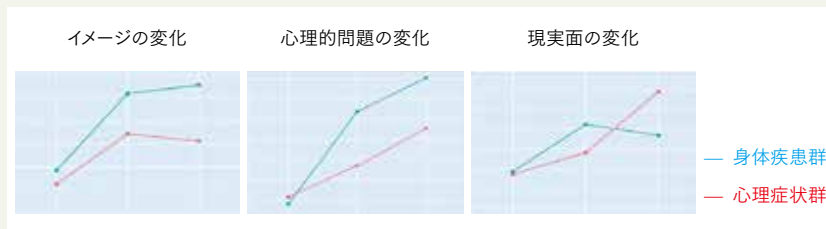


図 変化(改善)を捉える3軸について——心理症状群と身体疾患群のプロセスの比較

去5年以内に担当した事例で最近終了したものから8つ」の事例提供を依頼し、令和2年度までに心理症状群203事例、身体疾患群40事例の収集と評価指標に基づく評定を行った。その際、事例内容を組み込みつつ、第三者による客観的評定を行うため、各心理士を招聘した事例検討会を31回実施した。そして、プロセスの継時的変化の分析を導入して、心理療法のプロセスを3期に分け、心理症状群と身体疾患群の評定結果を比較した(図)。

身体疾患群の特徴としては、2期からすでに、イメージ(描画・箱庭など)の変化、心理的問題の変化が大きく、本人の意識が心の問題から遠いため、身体で表現されていた問題が、イメージ表現を媒介に変化しているのではないかと考えられた。また、死・別れのテーマよりも、家族との縁が再び繋がったり、新しい事業を計画したりなど、他者との繋がりや生きるテーマが変化の契機となったことは注目すべきで、従来の「否認→怒り→受容」といったモデルとは異なり、死に際しての心の成長・発展・変容も示唆された。

これに対して、心理症状群の特徴としては、心理的問題からの回復を自ら拒否したり、回復を妨げる他者との共犯的ともいえる関係が目立つ一方で、3期になると、現実面の変化が大きくなり、周囲の人へも本人の変化が広がった。心理症状は心作り出す一種の妥協形成とも言え、心理症状群は、変化に自らブレーキをかける傾向がある

ため、心の変容には時間がかかるが、長いプロセスを経ての変化は大きいことが示唆された。

### 2. コロナ禍における心の反応——心理療法事例を対象に

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、「コロナうつ」という言葉が取り沙汰されるように、コロナ禍の精神的側面への影響は、社会的にも注目されている。本プロジェクトの背景には震災時の心のケア活動の経験があったが、今回のコロナ禍における反応を分析することも、人の心の回復・成長可能性の解明に繋がると考え、コロナ禍で心理療法を継続する相談者にどのような変化が見られたかについても新たに調査を開始していく予定である。

臨床事例からは、コロナ禍の受け止め方は相談者により様々であり、抑うつ感だけでなく、行動制限により家族との時間が増え、家族間の問題が改善したなどの事例も生じていることが示唆されている。こうした研究を進めることが、コロナ禍からの社会全体の回復に向けても有効な視点を提供し、社会貢献に繋がるものとなればと期待している。

## 研究プロジェクト

## 気晴らしと攻撃性のメカニズム

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

## ■新型コロナウイルスとアグレッション

現在の日本社会において、適応的に生きるためには、アグレッションのコントロールが重要なポイントになっている。アグレッションとは、攻撃性・主張性のもととなるような心的なエネルギーと定義される。攻撃性という言葉からはネガティブな印象を受けるかもしれないが、適度な自己主張や、理不尽な状況に対する怒りの表明などは守られた社会生活のために必要なことである。他方、攻撃的になりすぎると対人関係のトラブルを引き起こす可能性があるため、アグレッションのコントロールは必然的に難しくなる。とくに日本においては、他者や社会的文脈に応じて自己を規定しているという文化的背景があるために（Markus & Kitayama, 1991）より難しくなりやすい。

実際、本研究とは別のプロジェクトで臨床事例を200例以上匿名化された形で収集したデータにおいても、約15%の事例でアグレッションがメインの心理的課題となっていることが明らかとなった。これは意識的・無意識的に体験される不満や強い不安が心身の不調につながりやすいことを示唆する結果でもあるが、同時にアグレッションをうまく処理することによってこころや身体をよい方向に変化させることもできるということかもしれない。

とくに2020年に新型コロナウイルス感染症が拡大し、世界が未曾有の危機に直面すると、この問題はより一層注目されることになった。感染者やその家族に対する誹謗中傷、コロナ患者に対応する医療従事者に対する差別的な発言や態度など、正体のわからないウイルスに対する不安が他者への攻撃となるケースが後を絶たず、「自粛警察」や「他県ナンバー狩り」と言われるような現象も話題に上った。想定外

の不安とストレスに長期間さらされることは、攻撃性の表出につながりやすいが、こうした態度が顕在的になってしまっているのだろうか。一方、コロナに関する心理相談事業のデータ分析では、他者に対して感じた不満やもやもやを相談員に吐露する相談者は多い一方で、直接的に強い攻撃的態度を示す相談者の割合は非常に低いことが明らかとなっている。強い攻撃のメッセージは目立つために多くの人の注目を集めるが、実際にはそれは大多数の態度ではない可能性も高いということを知っておくことが大切であろう。また、他者に対してネガティブな感情が生じた場合には、安全な場所でそれを誰かに話すこと、その相手は必ずしも家族や知り合いである必要はなく、誰かと共有することによってある程度収まっていく傾向があることを知っておくことも大切であろう。

## ■令和2年度の研究

令和2年度には、コロナ禍のため新たなデータを取得することが難しくなったこともあり、データ数が不十分な状態ではあったものの、既存の調査をもとに分析を進めた。これまでの研究において、大学生のグループと成人群では潜在的には両群のアグレッションにははっきりと差がないものの、大学生群のほうが有意にアグレッションを抑制しやすいことが明らかになっている。また、その抑制は意識的なものばかりでなく、自分が欲求不満を抱えていること自体が認識されないというような、ストレス回避的な態度がみられることが明らかとなっていた。こうした若者世代の心理傾向について都市部と非都市部の間で差がみられるかどうかを調べるために、関西の都市部の大学と地方国立大学の大学生に対してPFスタディを用いて調査を行った。こ

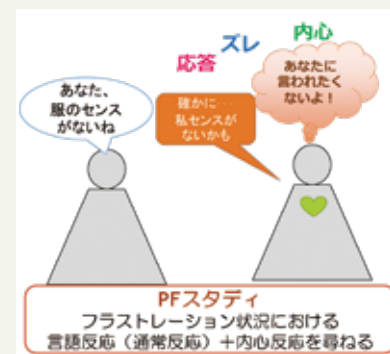


図 PFスタディのイメージ図

の調査では大学生群ではアグレッションの表出が抑制されやすいことを踏まえて、PFスタディの従来方法に変更を加えて「内心」を尋ねる方法を用いている（図）。その結果、都市部の大学よりも地方大学の大学生のほうが直接的な攻撃的表現が多くみられることが明らかになった。都市部において、アグレッションをより解離的に処理する傾向がみられたとも言えるが、このような違いがどこに起因するのかについて、他の調査研究と照らし合わせて今後検討していく予定である。

## ■今後の展開

未曾有のストレス下に長期間おかれている状況に鑑みれば、コロナ禍とは身体的な危機であると同時に社会・経済的危機でもあり、こころの危機でもある。コロナ禍において、アグレッションがどのように表出される傾向があるのかについて、臨床事例の調査を通じて検討を進める計画である。

また、アグレッションは攻撃性ばかりでなく、主張性とも関わる心的エネルギーである。集団の中でリーダータイプとなる傾向のある人たちに調査をすることで、アグレッションの表出スタイルの成長と変化についても検討したい。

# 高齢者の幸福感と健康に関する心理・神経科学アプローチ

中井隆介 (京都大学こころの未来研究センター特定講師)

## ■本プロジェクトの目的

幸福感や健康は、様々な心理学研究・疫学研究の対象となっている。この中で超高齢化社会を迎える日本においては、明らかな主観的健康の低下が生じる高齢者を対象に、生体情報の測定に基づいた客観的な研究を行う必要性が生じている。しかし、これまで高齢者に対し、幸福感や心理傾向等と関連して、脳構造や脳機能のデータ、各種バイオマーカー等を包括的に取得した研究はあまりない。本プロジェクトでは、とくに近年注目を集めている「神経症傾向」に着目した上で、高齢者における幸福感・健康と、脳機能や炎症反応といった生体データとの関連を、心理学・神経科学の観点から解析し、明らかとすることを目的とする。本プロジェクトは、高齢者の幸福感や心理傾向と合わせ、脳データやバイオマーカーをはじめ様々なデータを包括的に取得し分析する点で意義深いものである。さらに、この研究から、高齢者が永く「こころの豊かさ」を実現するための知見が得られ、Quality of Life (QoL) の向上に繋がることを期待できる。

神経症傾向とは、何か困難なことがあったときに敏感に反応する傾向であり、自分の感情をコントロールできない、ストレスへの対処が苦手等の特徴があると考えられている。とくに欧米圏では非常にネガティブな性格傾向であると捉えられており、神経症傾向の値が高いほど、脳の容積が低下するという報告 (Knutson et al., 2001)<sup>1</sup>も出ている。しかし近年の研究 (Kitayama et al., 2018)<sup>2</sup>において、日本を含む東アジア圏では、神経症傾向が高いことがむしろ適応的である可能性が示されている。本プロジェクトでは、神経症傾向に着目した解析を行う。

## ■2020年度の研究成果

昨年度には、実験データを取得するために、MRI撮像プロトコルの作成 (脳の構造や機能データの取得)、質問紙の選定、必要なバイオマーカーの検討などを行い、実験プロトコルを作成した。そして、本センター連携MRI研究施設に設置されている3.0T MRI装置 (MAGNETOM Verio, Siemens A.G., Erlangen, Germany) を用いて、MRI実験等を実施した。実験には60歳代~80歳代の被験者94名が参加した。

今年度の分析では、MRIの構造撮像シーケンス (MPRAGE (magnetization prepared rapid acquisition with gradient echo) 法, TR = 2250 ms, TE = 3.51 ms, TI = 900 ms, matrix size = 256×256, Field of View (FoV) = 256 mm×256 mm, pixel size = 1.0 mm×1.0 mm, thickness = 1.0 mm, flip angle = 9deg., pixel bandwidth = 230 Hz/pixel) で撮像した3次元T1強調画像を用いた。脳の構造解析では、MATLAB R2018a(MathWorks, inc., Natick, MA, USA) 上で動作するSPM12 (Statistical Parametric Mapping, Wellcome Trust Centre for Neuroimaging, London, UK) および、そのツールボックスであるCAT12 (Computational Anatomy Toolbox, Gaser and Dahnke, 2016) を用いて、脳の容積を計測した。

次に、この計測した脳のデータと、ビッグファイブ (性格傾向) (Goldberg, 1992)<sup>3</sup>により取得した神経症傾向の値、および、血液検査から取得した炎症反応 (インターロイキン-6 (IL-6)) の値の関係について解析した。MMSE (Mini-Mental State Examination) やその他の条件において除外基準に該当する被験者を除いた84名 (女性40名、平均年齢75.2±6.6歳) に対し、中間値を元に神経症傾向の高い群 (43名)、低い群 (41名) に分け、IL-6と年齢およ

び相対化した灰白質体積の関係について分析を行った。

年齢とともにIL-6は上昇することや、またIL-6の増加が脳容積の低下と関連することはすでに報告 (Willette et al., 2010)<sup>4</sup>されているが、本研究の結果でも、神経症傾向が低い群においては、それと同様の現象が起きていることがわかった。しかし、神経症傾向が高い群においては、低い群の場合と異なり有意な関係性は見られず、神経症傾向の高値が、炎症反応や脳容量の変化に影響を与えていることが明らかとなった。

## ■今後の展望

今後は、より詳細な脳の構造分析、脳の神経線維の密度や配向の分析、脳のネットワークの分析および他の行動実験の結果等を用いて、詳細な分析を行っていく予定である。

## 参考文献

1. Knutson et al. (2001). Negative association of neuroticism with brain volume ratio in healthy humans. *Biological psychiatry*, 50 (9), 685-690.
2. Kitayama et al. (2018). Behavioral adjustment moderates the link between neuroticism and biological health risk: A U.S.-Japan comparison study. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 44 (6), 809-822.
3. Goldberg (1992). The development of markers for the Big-Five factor structure. *Psychological Assessment*, 4(1), 26-42.
4. Willette et al. (2010). Age-related changes in neural volume and microstructure associated with interleukin-6 are ameliorated by a calorie-restricted diet in old rhesus monkeys. *Neuroimage*, 51 (3), 987-994.



## 研究プロジェクト

## シンギュラリティ後の生活者のこころのあり方について

広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）＋熊谷誠慈（同センター上廣倫理財団寄付研究部門長・准教授）

## ■研究の趣旨・背景

アメリカの未来学者カーツワイルのいわゆるシンギュラリティ（技術的特異点）論は、「遠くない未来、たとえば2045年頃に様々な技術——特に遺伝学、ナノテクノロジー、ロボット工学——の発展が融合して飛躍的なブレイクスルーが起こり、さらにそこでは高度に発達した人工知能と人体改造された人間が結びついて最高の存在が生まれる」といった趣旨のものである。

こうしたシンギュラリティ論は、今後の科学技術や人間、社会のあり方を考える上での重要な参照軸として一定の有効性をもつ反面、科学万能主義あるいは自然や生命を人間は無限にコントロールできるという、西欧近代科学の極北とも言うべき自然観・世界観が色濃く存在している。

一方、物質的な需要ないし消費が半ば成熟あるいは飽和しつつある現在の先進諸国においては、例えばブータンにおけるGNH（国民総幸福）の提唱への注目など、単純な“技術による突破と経済の拡大・成長”というベクトルとは異質の、「こころ」の豊かさや安寧、精神的充足を志向する流れが顕著になりつつあり、またローカルなコミュニティや場所性、伝統文化の再評価、“ゆったりと流れる時間”等への関心が高まっていることも確かである。

ここで、かりにシンギュラリティ論的な方向を「スーパー情報化／スーパー産業化／スーパー資本主義」と呼び、上記のような方向を「ポスト情報化／ポスト産業化／ポスト資本主義」（あるいは脱・情報化／脱・産業化／脱・資本主義）と呼ぶとするならば、21世紀の全体を見渡した今後の社会や人間の姿は、この異質な両者のベクトルの間でどのような軌跡をたどり、像を結んでいくのか。

こうした問いに答えるためには、シ

ンギュラリティ論が提起するテーマが近代科学や資本主義のあり方そのものと深く関わる射程を持っていることを踏まえれば、過去・現在・未来にわたるいわば

「超長期」の時間軸を視野に入れてこれまでの人間社会や思想・観念等の進化をとらえ返すような視点が不可欠であり、同時に空間的な広がりとしても、地球全体の視野の中でアジア・日本の文化的伝統や意味を位置付けるような作業が本質的な重要性をもつことになる。

## ■研究の目的とアプローチ

本研究の目的は、シンギュラリティ論を参照軸としつつ、人間社会と「こころ」のゆくえ——その変化する部分と変化しない部分の両者を含む——についての超長期の展望を得ることにある。その際、仏教的伝統あるいは「鎮守の森」に象徴されるような自然信仰など、日本・アジアの伝統的価値やローカルな場所性も視野に入れた探究を行う。これらを通じて、長期継続するストックのこころの豊かさ、短期的なフローのこころの豊かさの両面を探究するとともに、後者のこころの豊かさを生じさせる伝統的な技法や思考を再発見する。

具体的には、①科学史・科学哲学および公共政策をベースとするアプロー

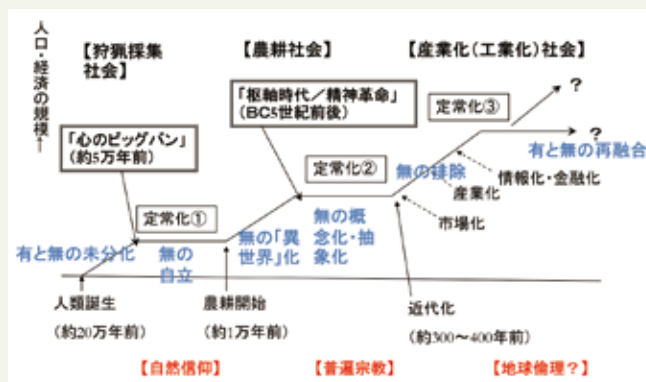


図1 「無の人類史」の全体構造



図2 仏教対話AI「ブッダボット」のイメージ図

チ（広井）と②仏教学および古典文献学をベースとするアプローチ（安田章紀・熊谷誠慈）を2つの柱として研究を進めている。2020年度には、前者においては「死生観」のあり方がシンギュラリティに関する諸課題の根底にあることを踏まえ、「無の人類史」という問題設定の下で、「無」および「死」をめぐる観念を人間がどのような形で展開してきたかを人類史的な文脈の中で整理し、今後の展望を提示する作業を行った（図1参照）。後者においては、仏教經典を人工知能に機械学習させ新たに開発した仏教対話AI「ブッダボット」を使用し、市民ユーザーとの対話を通じて、仏教のもつ寛容思想を分析し、シンギュラリティ時代を想定した新たな価値創出の可能性を検討した（図2参照）。

# つながり・共生のメカニズムとこころの豊かさ

内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター教授) + 竹村幸祐 (滋賀大学経済学部教授) + 福島慎太郎 (東京女子大学現代教養学部講師) + 打田篤彦 (京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程)

## ■本研究の概要

本研究は、環境要因（地域の文化・風土・歴史、生態学的環境、生業）ならびに個人要因（個々人の対人関係のもちかたなど）とその相互作用を検討することを通じて、地域におけるこころの豊かさの本質を解明することを目的としている。ここでいう地域におけるこころの豊かさとは、地域に貢献しようとする互助の風土、多様な住民が地域外の他者とも連携する開放性、持続的に地域の共有価値にアクセスし、継承しようとする共有価値の伝承が、そこに暮らす人々に豊かな経験を提供できる状態として定義している。本研究では集落フィールド調査ならびに地域内外の交流にかかる調査を実施し、これらがもたらす心理的、身体的効果を具体的に検証してきた。本研究を通じて、どのような社会関係や社会制度、あるいは公的支援が心の豊かさをもたらすのかを明らかにし、心の健康と安寧促進に資する知見を提示すると同時に、社会科学における新たな理論展開を目指している。

## ■コロナ禍における地域調査

2020年度はコロナ禍という状況であり、地域でのフィールド調査の実施は困難となった。しかしながらコロナ禍の状況において、人とのつながりや予防行動、さらには人の移動に関する意識（たとえば地域において、感染が拡大している都市部からの旅行者や帰省者を受け入れることへの感情）を知ることが重要な課題として浮かび上がってきた。そこでこれまでに実施した西日本での郵送調査を通して蓄積されてきた、集落レベルでの幸福感や相互協調性、他者とのつながりなどの項目に加えて、コロナ禍における予防行動や地域外他者の受け入れ意識を新たに検討する調査を実施した。対象地域は近

畿地方の75市区町村、166地域の14,614世帯であり、2021年1月に調査票が発送された。この中で2031通の返信があった（回収率13.9%）。現在データ入力までが完了しており、2021年度に解析を実施する予定である。

## ■地域データとの結合分析

これまで実施してきた調査データにおいては多数の小地域（平均100世帯程度の住民を持つ地域集落）を含む大規模データを構築している。これらを用いて各地域の社会関係資本と開放性（地域外の他者や移住者を歓迎する態度）との関係を分析したところ、地域内の他者に対する信頼（結束型の社会関係資本）と他者一般に対する信頼（橋渡し型の社会関係資本）のいずれも、多様な他者の意見を受け入れるような開放性と正の相関関係にあることが示された。こうした地域特性をより客観的な指標と紐づける試みも実施している。

広域版対象地域300のうち、115地域を抽出し、それらの地域においてGoogle Street Viewから居住エリアの画像1枚以上の取得を試みた。画像が取得できた104地域のうち、家屋と植栽が分析に耐える数存在し、かつ、調査データの地域回収数が5件以上の78地域を選定して分析した。画像解析としては、2名の査定者間での一致度が8割以上となる判定基準と、人間による判定結果との一致度が8割以上になる機械学習のモデルとを識別対象によって使い分けた。その結果、家屋に植栽を設けていない割合が高い地域は地域の社会関係資本が高い傾向があった。逆に、植栽は経済的な豊かさや主観的な幸福度の格差と正の相関がみられた。こうした地域の景観特性とのかかりについて引き続き検討していく。

## ■行動データとの結合分析

ウェアラブル型端末を用いて測定した行動データの分析・論文執筆も進めた。郵送調査は多数の地域からのデータを収集できる長所を持つが、回答者の主観に依存するデータであるとの短所も持つ。これに対処するべく、大阪電気通信大学の小森政嗣教授と連携し、京丹后市大宮町において活動量計ならびにBluetooth通信でのすれちがい検知機能を搭載した小型Android端末を約7カ月間、90名の住民に持ち歩いてもらう調査を実施した。このデータを非負値行列分解を用いて分析することで、社会的接触の因子を抽出し、地域コミュニティの中に重層的に存在する多様な社会的ネットワークを描き出した。この手法で抽出されたネットワークごとの社会的接触のパターンと、当該地域のリーダーらに対して行った聞き取り調査の結果を照らし合わせ、多角的に解釈を進めたところ、農作業に関係する集まり、公民館で発生する集まり、地域の活性化を図る集まりなど、異なるタイプの社会的ネットワークが的確に抽出できていることが示された。

抽出された複数の社会的ネットワークと、アンケート調査で収集されたデータとの関係を分析したところ、①農作業関連ネットワークでの中心性得点が結束型社会関係資本（コミュニティ内の他者への信頼など）と正の相関関係を持つこと、②公民館で生じる集まりのネットワークにおける中心性得点が主観的健康と正の相関関係を持つことが示された。これらの知見は、本研究で独自に開発したネットワーク抽出手法が、社会・行動科学で重要な変数を予測する上で有用な手法であることを示すものである。

## 研究プロジェクト

## 感動の社会・神経基盤の研究、および行動変容に及ぼす効果の検証

中山真孝(京都大学こころの未来研究センター特定助教)+内田由紀子(同センター教授)

## ■本研究の背景と目的

人は様々な場面で感動する。小説や映画、漫画、アニメなどの物語に触れたとき、結婚式や出産など人とのつながりを強く感じたとき、自然の中でその雄大さに圧倒されたときなど、感動を引き起こす場面は様々である。このような感動の機能とは何か。これまでの研究では、感動は何かしらの価値が確認されたときに起こるものであるとされ(Cova & Deonna, 2014)、その価値に沿った行動(意図)を惹起することが示されている(Landmann et al., 2019)。例えば、映画を観たときに人とのつながりの価値を確認して感動したならば、家族や友人と過ごそうとするようになるなど、ある価値を受け入れて関連する行動を喚起することは、感動の機能の1つであると考えられる。一方で感動は自分の既存の価値観に沿って喚起されることも示されている。例えば、愛情や他者への共感といった社会的価値を重視する人ほど、それが強調されたアニメーションに対してより強い感動を経験する(加藤・村田, 2013)。このことから、感動は価値のシグナリング機能を果たすことも考えられる。すなわち、自分の価値観と一致した出来事に感動する他者を見たとき、(無意識に)その他者との価値観の一致を知ることができよう。本研究ではこの仮説を、感動を共有していると推察される他者への印象が向上するかどうか調べることを通じて検討した。

## ■方法

**参加者** 分析対象はクラウドソーシングサービス登録の382名(男性:217名、女性:165名)からのデータに対して行った。

**調査の概要** 調査は、(1) 動画視聴、(2) 感情評定、(3) 印象評定、(4) 価値や特性に関する尺度への回答

について行った。以下に詳細を述べる。

**動画視聴** 予備調査をもとに、ある程度価値観により感動するかどうか異なるものとして選定された3つの

動画を使用した。感動条件として、性役割の不平等、あるいは、同性愛を題材にした動画をそれぞれ1つずつ用いた。いずれの条件でも、夫婦愛や結婚という「社会的価値」が表れた上で、性役割や同性愛という価値を示すものだった。統制条件では絶叫マシンに乗っている人物の目線で撮影されたアトラクションの体験動画を1つ用いた(ポジティブと思うかどうかは人により分かれるものであると考えられる)。回答者には3つのうちいずれか1つの動画がランダムに提示された。

**感情評定** 参加者は動画の感想について自由記述を行った後、感動を測るための「感動した」など4項目を含む感情評定を行った。

**印象評定** 複数の人物の顔写真(Ueda, et al., 2019)とその人物が回答者が見た動画と同じ動画に対して抱いた感想文として用意された短い文章をランダムに組み合わせ提示した。回答者はこのターゲット人物の印象を評定した。提示された感想文は、「感動した」など直接的な感動の表明の有無、「同性愛は認められるべきだ」など動画が示す価値についての言及の有無を操作した。統制条件では、感動の代わりに楽しさを、価値の代わりに楽しさの内容の有無を操作した。印象評定では、「魅力がない—魅力がある」など5つの形容詞対を用いた。

**価値や特性に関する尺度** 感動条件で用いた動画にはいずれも愛情や他者への共感といった、動画の特性に特化しないような一般的な社会的な価値も描

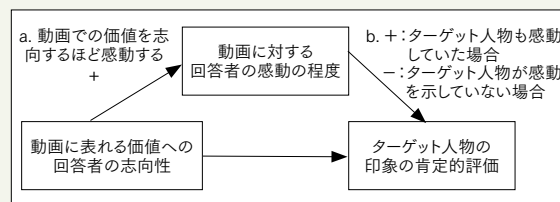


図 検証したモデル

かれていたので、「社会的価値」を測定した。また、性役割の平等に対する態度や同性愛を受け入れる程度を測定した。

## ■結果

図に示したモデルを検証した。まず、参加者の持つ価値観が動画に表れていたときに、その参加者が感動するか検討したところ(図中aのパス)、社会的価値および同性愛の受け入れでそのような傾向が見られた。「性役割不平等」動画では予想された関係が見られなかったが、動画では不平等そのものは明示的には肯定的に描かれていなかったことによる可能性が考えられる。さらに、参加者が感動するほど感動を示すターゲット人物の印象が良く、感動を示さない人物への印象が悪かった(図中bのパス; 後者は同性愛受け入れでは効果なし)。単なる共感・感情の一致が他者への印象を良くしているという可能性を検討するため、同性愛条件と統制条件についての図中bのパス(相関係数)を比較したところ、価値に言及した場合にのみ、単なる共感以上の効果が見られた。

## ■結論

本研究では、感動の機能として感動した人の価値観を他者にシグナルする機能、その結果として印象形成に影響することを示した。ただし、すべての価値観について当てはまるかどうかは今後の検討が必要である。

\* 本研究は京都大学大学院人間・環境学研究科前浦菜央氏の修士論文として提出された。

# アジアと日本の精神性、幸福観、倫理観

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門長・准教授)

## ■本研究の概要

本プロジェクトでは、アジア各地域の伝統知（精神性や倫理観）の研究を推進した。アジアに共通する精神性と倫理観の普遍性を把握することで、アジア諸国との対話の道筋を明らかにするとともに、精神性と倫理観の日本の特徴を特定することで、グローバル社会における日本の位置づけの明確化を進めた。

本プロジェクトでは以下の4つの地域における伝統知（精神性や幸福観、倫理観）について体系的な整理を進めた。

- ①インド仏教に共通する伝統知
- ②チベット仏教文化圏および東北アジアに共通する伝統知
- ③東アジアに共通する伝統知
- ④日本固有の伝統知

その上で、インドから日本にかけて共通する普遍的な精神性、幸福観、倫理観を体系化するとともに、東アジア、さらには日本独自の要素の特定・解明を進めた。

## ■古文書の文献研究(伝統的な倫理、哲学、精神性)

2020年度には、インドから日本にかけて伝わった仏教宗派「説一切有部(俱舎宗)」の重要典籍『アビダルマコーシャ(俱舎論)』の精読を進め、インドからチベット仏教文化圏、東北アジア、東アジアに共通する「幸せに繋がる善き心」に関する情報の整理、体系化を進めた。

また、ブータンの国教宗派であるドゥク派の開祖ツァンパ・ギャレー(1161-1211)の伝記および詩集の精読を進め、出版原稿の準備を進めた。(2021年度に王立ブータン研究所から出版予定。)

京都大学人文科学研究所の船山徹教授らと『現代社会の仏教』(臨川書店、

2020年)という書籍を共著出版し、熊谷は「ブータンの実践仏教と国民総幸福(GNH)」という章を執筆した。

また、日本における死生観について研究を推進した。特に、日本の天台宗において形成されてきた「本覚思想」に着目し、浄土教における本覚思想の位置づけを整理した。特に、浄土真宗の開祖親鸞(1173-1263)にとっての本覚思想の扱いについて検討し、論文を執筆した。

## ■伝統知とサイエンスとの融合研究

2021年1月に、熊谷の研究チームの研究提案「Psyche Navigation Systemによる安寧と活力が共存する社会の実現」が、内閣府とJST(国立研究開発法人科学技術振興機構)の主導する「ムーンショット型研究開発事業」のミレニア・プログラムに採択され、JSTからプレスリリースされた。同年7月に最終提案がJSTを通じて内閣府に提出される予定である。仮に、最終提案が内閣府に採択された場合には、ムーンショット計画の「第8計画」として実施されることになる。

また、熊谷グループは、本部門で研究を進めてきた仏教經典を人工知能に学習させた仏教対話AI「ブッダボット」を開発、3月12日に開催された国際シンポジウム(RIEC International Symposium, When AI Meets Human Science)にて初めて公表し、3月26日には京都大学にて記者会見を実施した。AIの最後のフロンティアの1つである宗教分野への参入という点で、学術的価値が高い。また、カウンセリングなどメンタルケア産業、コンサルティング産業、教育産業など、産業的価値も高いものと思



仏教対話AI「ブッダボット」のイメージ図

われる。また、形骸化した仏教の社会的価値を回復する意味で、宗教的価値も高い。

すでに国内ではNHKや朝日新聞、毎日新聞、京都新聞、国際ではAsahi Shimbun、Mainichi Shimbun、即時新聞、昔日東方(香港)などが英文・中国語の記事を出すなど、メディアの注目度も高く、大規模な社会還元に寄与する可能性を提示できた。

## ■社会還元

アジアと日本の伝統的な精神性と倫理を、広く社会に発信するための基盤整備を進め、以下の公開企画を中心として、研究者と市民の学びの場づくりを継続・発展させた。

「日本仏教セミナー」では、中国や日本の精神性、倫理観を把握すべく、鎌倉時代の東大寺の学僧・凝然(ぎょうねん)(1240-1321)の著した、中国・日本の伝統仏教8宗派の概説書『八宗綱要』を精読した。2017~2019年度には計43回のセミナーを開催し、「序章」(インド・中国・日本仏教の歴史と思想の概論)および奈良仏教の「俱舎宗」、「成実宗」、「法相宗」、「三論宗」の章を読破。2020年度には、コロナ対策として、対面・オンライン・オンデマンドのハイブリッド型でセミナーを提供し、計10回「天台宗」の章を全て読破した。

## 研究プロジェクト

## 超高齢社会における現代日本の医療・保健・福祉にかかる倫理

清家 理 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門特定講師)

## ■研究の背景

最近4年間は、認知症の家族介護者に対する心理社会的支援介入を進めてきた。COVID-19の感染が拡大するまでは、予定通り、ある一定の場所に集い、Face to Faceの支援介入で問題なかった。しかしCOVID-19の感染拡大を受け、三密（密閉・密集・密接）回避に伴う社会的つながりの維持が困難になった。とくに、認知症の人や家族介護者（以下、家族）に関して言えば、介護保険制度の通所系サービスの利用控え、インフォーマルな集い（認知症カフェ、家族介護者の会、食事会等）の不開催により、外出機会が大幅に減少している。このような状態は、認知症の人、家族ともに孤立・孤独を助長する。COVID-19の制圧まで社会参加を制限し続けられ、さらに認知症の人と家族のQOL悪化が想定されるため、COVID-19の制圧を待たずに、認知症の人や家族が安心、安全に社会的つながりを維持する方法が求められている。

## ■研究目的

本研究プロジェクトではICTを用い、認知症の人や家族の孤立・孤独、そして孤立・孤独に伴うストレスを軽減・予防する手法開発に着手した。まず今年度はICTを活用した認知症介護者への支援に関する実態調査（コロナ禍における介護現状把握も調査項目を含む）を実施し、ICTを活用した介護支援に関する課題の明確化を研究目的とした。

## ■研究方法

データ収集方法は、国立系認知症疾患医療センター認知症の人の家族介護者向け教室修了者137名を対象に自記式アンケート調査法（郵送法）を用いた。アンケートの設問構成は、①介護現状、②使用している通信機器、③介護相談におけるICTの利用状況と課題、

④ICTを用いた介護相談や家族交流実施に対する意向とした。

## ■研究結果

アンケートを回収した結果、80名（58.4%）の回答を得た。回答者の属性特性は、女性75.0%、年齢66.6±9.7、配偶者45.0%、要介護者の罹患認知症種別：AD62.5%、要介護度：要介護1（25.0%）、要介護2（22.5%）、要介護5（18.8%）であった。

COVID-19感染拡大に伴う介護負担感の変化について、「増加した」75.0%が多くを占めた。その主

たる理由は、要介護者の方の感染対策困難（マスクや手洗い拒否）、サービス提供者の都合によるサービスの利用制限や中止、外出機会や他者との交流機会の喪失による心身変調および要介護者への途切れない注意であった。一方、「増加なし」25.0%は、専門職や他者と電話、インターネットを通じた交流を実施していた。

そして回答者たちのICTを用いた介護相談や交流の意向は、「希望する」27.5%、「希望しない・分からない」72.5%であった。

一方、ICTによる介護相談・交流の不安について、「ネット端末の使用方法が分からない」65.3%、「作動しないときの対処ができない」62.5%、「アプリ機能が分からない」58.8%が上位を占め、ICT機器の機能や操作への無知、不安が確認された（図1）。逆に、ICTに

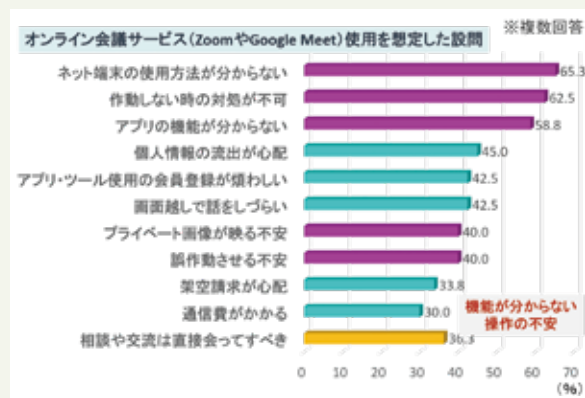


図1 情報通信技術による介護相談・交流の不安(N=80)

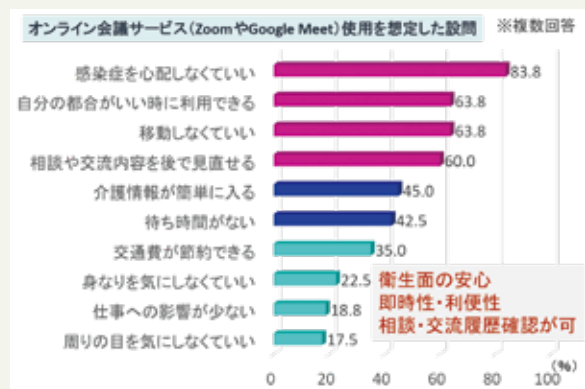


図2 情報通信技術による介護相談・交流への期待(N=80)

よる介護相談・交流への期待では、「感染症を心配しなくていい」83.8%、「自分の都合がいい時に参加できる」「移動しなくていい」63.8%が上位を占め、衛生面の安心、即時性や利便性に期待している結果が示された（図2）。

## ■総括

この結果、ICTを用いた介護相談・交流の実施はハードルが高そうな実態が明らかになった。またICTを用いることによる不安と期待が葛藤している状況にあり、ICTとの親和性を育む「場」や「プログラムコンテンツ」の設定の必要性が推察された。今後、本結果をもとにICTを用いた認知症家族介護者支援を実施するためのワンクッションになりうる支援を試行的に実施し、効果検証を進める予定である。

# ポスト成長時代におけるこころの問題と変容

畑中千紘 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門特定講師)

## ■プロジェクトの概要

21世紀を迎えて十余年がたった今、我々はなお、こころや生き方についての新たな問題に直面している。新型コロナウイルスは我々に身体上の健康上の危機をもたらしたといえるが、この問題はそれだけでなく、環境や政治、経済など様々な社会的課題を浮き彫りにしたと指摘されている(大澤真幸,『新世紀のコミュニズムへ——資本主義の内からの脱出』NHK出版, 2021年)。この新たな感染症は、地球全体がひとつの問題に直面していることを意識させ、右肩上がりの成長イメージとは異なる発展・成熟のあり方を考える必要性を我々につけつけた。本研究プロジェクトは、「ポスト成長時代」におけるこころのあり方や生き方について探索的に研究を進めてきたが、コロナ禍においてさらにこうした要請は強まってきたと考えられるだろう。新たな時代に生じるこころの現状と課題とは何かをこころの古い層と対照しつつ明らかにするとともに、それがどのように変容しうるのであるのか、その可能性も探っていききたい。

## ■2020年度の研究成果: コロナ禍におけるこころの反応について

2020年度は、緊急事態宣言下から始まった。突然、未曾有の状況に陥った私たちは、感染のリスクに直面するとともに、経済的、社会的、実存的な不安とも直面することになった。心理的な影響として「コロナうつ」という言葉が注目を集めたが、実際、イギリスでおよそ5万人を対象に行われたオンライン調査でも中等度以上の抑うつ症状があると回答した人は約3割と高い数値を示していた(2020年5月)。一方、日経メディカルが各科の医師を対象に外来患者数の増減を尋ねた調査では、全体の46%の医師が「減っている」

と回答したのに対し、「ほとんど変わらない」と回答した医師が51.9%ともっとも多かったのは精神科であった(n=4,074, 2020年6月実施, <https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/report/t344/202007/566334.html>)。この2つの調査からは、コロナ禍の精神面への影響が危惧されながらも、現段階では加療を必要とする人が激増したというわけではないとひとまずは理解できそうだ。

そこで本研究では、公認心理師/臨床心理士5名(男性2名、女性3名)に対して予備的な調査を行い、2020年5月末時点での担当事例へのコロナ禍の影響について回答を求めた。対象事例は94例(男性28例、女性66例)で平均年齢は30代であった。調査では、担当する各事例について「コロナ禍がどのように作用していると思うか」について[ポジティブ/ネガティブ/影響なし/いずれの影響もある]の4つの選択肢から1つを選択してもらい、その影響がどのようなものかについて具体的に回答を求めた。その結果、ポジティブ37%、ネガティブ18%、影響なし38%、両方向7%という結果であった。結果の詳細は今後分析予定だが、ポジティブな影響を受けたと評定されたケースが意外に多いという印象を受ける。具体的な例をあげると、「自粛生活で夫が在宅勤務するようになり家族関係が改善した」、「自分の人生を考え直して転職を決意した」、「世の中全体の不安が増大したことによって、かえって自身の不安の小ささを感じて症状が改善した」などがみられた。もちろん、深刻な状況に陥る人が多いことは確かであり、安直な結論を出すことはできないものの、ポジティブな影響が認められたケースのその後の変化を追跡することによって、コロナ禍においてこころがどのような反応を示すのかに



杉原保史監修、宮田智基、畑中千紘、樋口隆弘編著『SNSカウンセリング・ケースブック——事例で学ぶ支援の方法』誠信書房、2020年

ついて、ネガティブな影響ばかりでなく、そこに含まれる変化や成長の可能性にも目を向けながら議論していきたいと考えている。

## ■2020年度の社会貢献

2020年度は、コロナ禍のために予定されていた学会や研修会、講演会などが軒並み中止となり、結果として社会貢献の機会も失われることが多かったと言わざるを得ない。しかしながら、年度後半においては、内閣府主催令和2年度「子ども・若者支援地域協議会構成機関における相談業務に関する研修」(2020.11.16)をはじめとして、形式を工夫しての研修や、資料配付形式での研修が行われるなど新たな形での社会貢献を行うことができた。また、以前より研究を進めていたSNSカウンセリングについてのシリーズ2冊目となる『SNSカウンセリング・ケースブック——事例で学ぶ支援の方法』(誠信書房、2020年)が発刊され、出版記念YouTube Liveも行われた(<https://youtu.be/VRWEa7YIPjY>)。

## 研究プロジェクト

## ポスト成長時代の経済・倫理・幸福

広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）

### ■本プロジェクトの趣旨

経済の限りない「拡大・成長」を軸とする従来の社会のあり方が様々な面で困難となる中、近年では「GDPに代わる指標」や「幸福度指標」をめぐる議論や政策が活発化し、国内では東京都荒川区の「GAH（荒川区民総幸福度）」や、同様の理念を共有する約100の基礎自治体が参加するローカル・ネットワークとしての「幸せリーグ」（研究代表者の広井はその顧問の1人）の展開が生じている。

本研究では、こうした東京都荒川区および「幸せリーグ」をめぐる政策展開等を主たる事例として取り上げ、幸福度指標あるいは幸福政策の意義と問題点、それと地域再生ないし地方創生との関係等について多面的な角度から分析・吟味を行うとともに、これらの展開に関する活動や施策に実践的に関与し、社会還元を重視した研究を展開している。

### ■20年度における政策展開と意義

2020年度は新型コロナ禍が生じたため、幸せリーグ参加自治体の首長が集まる年1回の幸せリーグ総会は休止となったが、コロナ禍を踏まえた今後の地域社会の展望に関する冊子を発行することとなり、広井は『幸せリーグ顧問による寄稿文』（2021年3月発行）に「ポスト・コロナの社会構想——分散型システムへの移行と『生命』の時代」と題する文章を寄稿した。

また、近年においては東京都荒川区および幸せリーグ参加自治体以外にも、幸福度指標ないしそれに関連する政策の展開を志向する自治体が都道府県レベルを含め顕在化してきている。これらのうち、岩手県における幸福度指標に関する検討（「岩手の幸福に関する指標」研究会）に広井はアドバイザーとして参画し、幸福度指標策定

に関する助言を行ってきたが（2017年9月7日最終報告書公表）、2020年度も継続的な関与を続けた。具体的には、同県が2019年に総合計画審議会に設置した「県民の幸福感に関する分析部会」にオブザーバーとして参加し助言を行うとともに、2020年度には、広井がこれまで日立京大ラボ等と進めてきたAIを活用した社会構想と政策提言に関する研究を、幸福度政策と結びつける形での共同研究を岩手県立大学と行うこととなり、「AIを活用した政策シミュレーション」第1回研究会を2020年11月に開催した（盛岡市）。なお、幸せリーグ参加自治体の1つである愛知県高浜市ともAIを活用した総合計画策定に関する検討を日立コンサルティングと連携して行い、2020年9月に報告書を取りまとめた。

また、各種の調査報告書等において幸福度が都道府県の中でもっとも高いとされることの多い福井県を拠点とする福井新聞が、2019年度において「ふくい×AI 未来のしあわせアクションリサーチ」という企画プロジェクトを進めたが、上記のようにAIを活用した社会構想と政策提言に関する研究を進めてきた広井が本プロジェクトに積極的に関与した。具体的には、住民参加のワークショップを基に設定された幸せの実感に関係する149の項目を土台としつつ、AIを活用したシミュレーションを通じて未来の多様な幸せ像とそれに向けたアクションを分析し提言することに協力し、その成果が福井新聞（2020年8月18日付）に掲載された（写真）。



「ふくい×AI 未来のしあわせアクションリサーチ」を伝える福井新聞（2020年8月18日付）

### ■AIを活用した政策提言とのクロス

以上の動向に見られるように、幸福度指標をめぐる展開と、AIを活用した政策提言・公共政策という、本来独立した流れであったものが一部融合し始めている。そしてさらに大きな認識として、私たちは「ポストAI」あるいは「ポスト情報化」という時代の流れを展望しつつ、「情報」の次なる基本コンセプトとしての「生命／生活」を視野に入れた社会構想と公共政策を展開すべき時期に来ていると考えられる。

ここにおいて幸福、持続可能性、分散型社会、AIといった、これまで異領域のものとして考えられていた様々なテーマがクロスすることになる。新たな時代の潮流を見極めながら、これらを総合化したポスト成長時代の公共政策を構想していくことが課題となっている。

## 意思決定の認知科学

阿部修士 (京都大学こころの未来研究センター准教授)

## ■本プロジェクトの概要

本研究プロジェクトの目的は、ヒトの意思決定の認知・神経基盤を、行動実験や機能的磁気共鳴画像法 (fMRI)、脳損傷患者を対象とした神経心理学的評価など、複数の手法を相補的に用いて明らかにすることである。人間の意思決定を研究するには、実験における制約上、人間の社会性・道徳性の本質的要素が損なわれるケースが少なからず存在する。本研究では実験パラダイムを工夫することで、より現実世界に近い状況でのヒトの意思決定のメカニズムにアプローチする。具体的には、正直さ/不正直さ、利他行動、恋愛などに焦点をあて、個人間の意思決定の差異、あるいは個人内の意思決定の揺らぎを説明しうる要因の解明を目指す。

## ■関連する研究成果

2020年度は賭け行動に関するセガサミーホールディングス株式会社との共同研究の成果を海外の学術雑誌に発表した (Abe et al., 2021, *International Gambling Studies*)。この共同研究は、実際に営業中の海外カジノ施設における日本人を含むプレイヤーのプレイデータを収集、分析することにより、人が危険な賭けに至る前の兆候を明らかにすることを目的として実施している。

本研究では、海外のカジノ施設におけるバカラのプレイデータの分析を行った。バカラは「banker (胴元役)」と「player (客役)」の、仮想

の2人による勝負で、どちらが勝つかを予想して賭ける、トランプを用いたゲームである。ゲーム進行役となるディーラーにより、bankerとplayerにそれぞれ一定のルールに従いカードが配られる。最大3枚での合計数を競い、下1桁の数字が大きい方が勝者となる。banker、playerのいずれが勝者になるかの予想を的中させると、賭け金がおおよそ2倍となる (配当:1倍)。引き分けになる結果のtieに賭けると、高額な配当となる (配当:8倍)。また、最初に配られる2枚のカードが同数となるpairに賭けると、同様に高額な配当となる (配当:11倍)。

本研究では、2017年4月から2018年1月までの顧客のうち、1)年齢が21-80歳、2)3営業日以上来店、3)70ゲーム以上プレイしている日が1日以上、の3つの基準を満たす顧客3,986名の7,935,566件のプレイデータを抽出した。分析対象の顧客の約7割が30-50代であり、9割弱が男性であった。日本と中国の顧客がそれぞれ4割強を占めており、東アジア圏の中年男性が主な分析対象であった。これらのデータを対象に、1勝・2連勝・3連勝・1敗・2連敗・3連敗の後に、賭け金額および賭け方 (配当:1倍・8倍・11倍)

がどのように変化するかを、混合効果モデルにより分析した。

各ゲームの顧客の賭け金の対数変換値を従属変数とし、分析を実施したところ、ゲームの勝敗と連勝 (敗) 数の交互作用が有意であった ( $p < .001$ )。直前の連勝・連敗数が多いほど賭け金が高くなること、またこの傾向は勝った後でより顕著であることが示された (図1)。また、各ゲームの顧客の賭けへの参加 (賭ける=1、賭けない=0) を従属変数とし、配当別に分析を実施したところ、いずれの配当においても、ゲームの勝敗と連勝 (敗) 数の交互作用が有意であった ( $ps < .001$ )。直前の連勝数が増えるほど賭ける選択が増加する一方で、連敗数が増えるほど賭ける選択が減少することが示された (図2)。

本研究からは、バカラに繰り返し興じることで、勝敗の結果によらず、賭け金を増やしていく傾向があること、またこの傾向は勝った後でより顕著であることが明らかとなった。また、勝ちを重ねていくことで、リスクな賭け方であっても、賭けに参加する割合が増えることも明らかとなった。今後は危険な賭け行動に至る兆候の事前察知・予測を目的とした研究を進めていく。

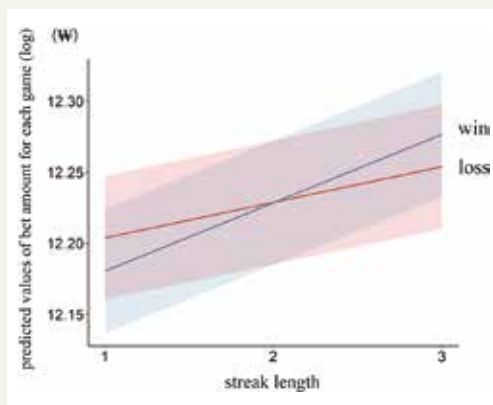


図1 事前の勝敗と連勝(敗)数を独立変数とし、賭け金額を従属変数とする回帰分析の結果(Abe et al., 2021より転載)

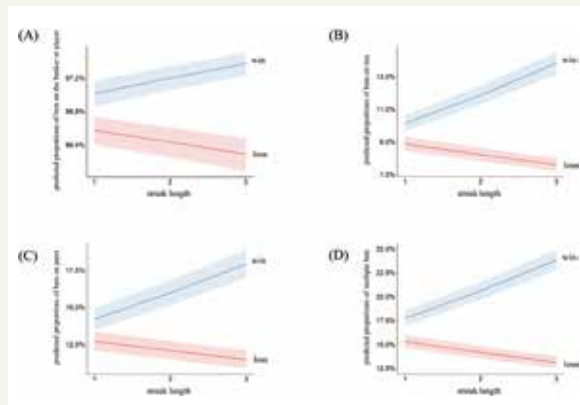


図2 事前の勝敗と連勝(敗)数を独立変数とし、賭けへの参加(a: banker or player, b: tie, c: pair, d: a~cの2種類以上の賭け)を従属変数とする回帰分析の結果(Abe et al., 2021より転載)



## 研究プロジェクト

# こころを込めることの認知的・身体的効果

熊谷誠慈 (京都大学こころの未来研究センター上廣倫理財団寄付研究部門長・准教授) + 上田祥行 (同センター特定講師)

## ■背景

これまで脳科学分野において、集中や気持ちを平静に保つことの1つの方法およびそのメカニズムの解明として、仏教瞑想の手法をもとにした研究が行われてきた。仏教瞑想は概ね集中瞑想と洞察瞑想とに区別され、仏教における重要な修行方法の1つである。しかし、特に大乘仏教では、ただ単に瞑想するだけではなく、これに祈りを伴うことが重要とされている。祈りには「こころを込めること」が欠かせない。瞑想においても、ただ単に行うよりも、こころを込めるか否かで効果が変わる可能性が考えられる。また、瞑想のみならず、生活の様々な点で私たちは「こころを込める」ということを大事にしている。

## ■目的

本研究では、このような「こころを込めること」が認知的および身体的にどのような効果を及ぼすのか、また「こころを込める」とは実際にはどのようなことをしているのかを検証すべく、情報収集と議論を行う。

## ■実施内容

令和2年度は、既存の研究について情報収集し、今後扱う課題についての議論を行った。瞑想研究については、集中瞑想と洞察瞑想のそれぞれの認知的・身体的効果の共通性と相違性について再検討するとともに、仏教研究にもとづいて「こころを込める」べき祈りはどのようなものかについて検証を進めた。具体的には、どのような祈りが瞑想において効果的であるのかを検証すべく、観想念仏と称名念仏、祈願文、廻向句などについて文献調査を行った。また、日常生活における「こころを込めること」についても概念を明示的にし、仏教的な思想との共通性と

相違性を検証し、実証研究の対象とするべく議論を行った。

### ・仏教における「こころを込める」行為

「こころを込める」という行為にはどのような意味と効果があるのだろうか。仏教において「こころを込める」という行為を考える場合、どういった行法が存在するであろうか。例えば、誓願、廻向、念仏、瞑想などの行法が存在する。

念仏には、観想念仏と称名念仏の2種が存在する。観想念仏とは、仏の様相や、浄土の風景を、心の中で明瞭に思い描くことである。特に浄土教では、阿弥陀仏の姿、さらには、極楽浄土の様相を想起。仏の身体的特徴を個別に観想する「別相観」と、全部まとめて観想する「総相観」とがある。称名念仏とは、阿弥陀仏に対し、来迎と往生浄土を願い、「南無阿弥陀仏」の六字名号を称える行法のことである。

日本の浄土教において、源信(942-1017)は『往生要集』で、観想と称名の2つの念仏を挙げた上で、観想念仏を重視した。来迎の儀式は貴族に流行し、平等院など、極楽浄土を表現した建築や美術が発展した。

法然(1133-1212)は「専修念仏」の教えを説き、称名念仏を推奨した。阿弥陀仏の本願を信じ、「南無阿弥陀仏」を唱えれば、老若男女、善人も悪人も関係なく、極楽往生ができると説いた。

### ・慈悲の瞑想とセルフ・バイアス

慈悲瞑想とは、自分自身や他者が苦しみから解放されて幸せになることを心の中で繰り返し願う訓練方法であり、マインドフルネス実践法で行われる注意や情動調整の訓練とは異なる(藤野ら, 2019)。このような「こころを込めた」瞑想を行ったあとでは、単に注意や情動調整のための瞑想を行った後に



図 実験に用いた自己と他者の関係性を調べる課題(左)と慈悲瞑想の前後における結果の変化量(右)

比べて、自己と他者が近い関係であると認識するように変化した(セルフ・バイアスの低下、図参照)。自分自身と他者の両方の幸せを、こころを込めて願うことで関係性の認識が変化していることが示唆される。

### ・日常で「こころを込める」ことの意味

「こころを込めて作る」「こころを込めて贈り物を選ぶ」「こころを込めて話す」というように、私たちはモノや動作にもこころを込め、宿らせることができると考えている。しかし、こころを込めることが、心理・身体プロセスとして何を意味しているのか、実際にこころを込めた動作やその成果と、そうでない動作とその成果では何が異なるのかについては、ほとんど何もわかっていない。そこで、「こころを込める」ことの意味について検討するため、質問紙調査を作成した。今後、これを用いて「こころを込める」ことがどのような信念と繋がっているのかを調査する。

(信念に関する測定の例)

心を込めたモノや動作は、受け手にそれが伝わると思うか?

相手の動作に心がこもっているかどうかを見分けることができると思うか?

心の在り方は動作に現れると思うか? など

(シナリオ評定の例)

「こころを込めたもてなし」とはどういったものか

- 自身のできる限り最大のもてなし? or 相手を慮ったもてなし?

# 空間的思考の認知メカニズム

武藤拓之 (京都大学こころの未来研究センター特定助教)

## ■本プロジェクトの概要

環境中に存在する物体や自身の身体に関する表象を心の中に描き、その表象に回転や拡大縮小などの空間的な操作を加える心的処理は空間的思考と呼ばれる知能の一種である。この能力は、見知らぬ土地の訪問や道具の使用などを含む日常の様々な認知活動を支えている。このような空間的思考能力の背後にある認知的なメカニズムを総合的に理解するために、本研究プロジェクトでは行動実験や脳機能計測、数理統計モデリングなど複数の手法を用いて研究を進めている。とくに、物体の回転を想像する心的回転と、他者の視点から見た視覚世界を想像する空間的視点取得を構成する認知プロセスに注目し、各プロセスがいつ・どのように実行されるかを解明することを目指している。

## ■2020年度の研究成果

2020年度に実施した研究のうち、「傾いた文字の認知プロセスの研究」と「空間的視点取得能力の測定法の研究」の2つに焦点をあてて、以下にそれぞれの研究成果を報告する。

### 1. 傾いた文字の認知プロセスの研究

傾いた文字が正しい文字であるか鏡文字であるかを判断する際には文字の心的回転が実行されると考えられているが、文字の傾きが小さいときには心的回転を実行しなくても正像か鏡像かを判断できるということも指摘されている (図1)。つまり、傾いた文字の正像・鏡像判断は単一のプロセスではなく複数のプロセスを切り替えることに

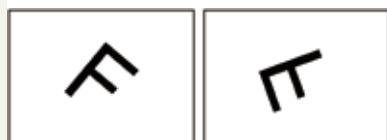


図1 文字の心的回転課題の例

よって遂行される可能性がある (混合プロセス仮説)。本研究は、この混合プロセス仮説を検証するために、心的回転が行われる試行 (回転試行) と行われない試行 (非回転試行) の割合が文字の向きによって変化する

ことを仮定した数理モデル (混合分布モデル) と、異なるプロセスの混合を仮定しない数理モデル (単一分布モデル) を構築し、どちらのモデルが実験データにより当てはまるかを検証した。

分析の結果、回転試行と非回転試行の混合を仮定した混合分布モデルのほうが、混合を仮定しない単一分布モデルよりもデータをよく説明できることが明らかになった。この結果は混合プロセス仮説を支持する証拠であり、人が課題中に異なる認知プロセスを柔軟に切り替えていることを示している。本研究の成果をまとめた論文は、オープンアクセス誌である *Japanese Psychological Research* の63巻3号に掲載済みである (Muto, 2021)。

### 2. 空間的視点取得能力の測定法の研究

空間的視点取得能力を測定するテストとしてもっともよく用いられている Spatial Orientation Test (SOT) は、様々な視点から標的の方向を指し示す正確さを指標として用いる紙筆テストである。しかし、オリジナルの得点化法は理論的な根拠に乏しく、回答のバイアスと精度を分離できないという問題もあった。そこで本研究では、方向統計学で用いられるフォン・ミーゼス

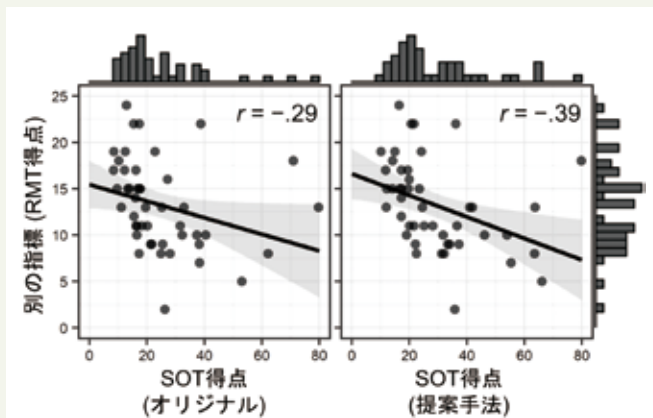


図2 SOTの得点化法による差

分布という確率分布を利用した統計モデリングにより、回答のバイアスと精度を分離して得点化する方法を提案した。既存のデータを利用してこの方法の有効性を検証したところ、オリジナルのSOT得点よりも、本研究で提案したSOT得点のほうが、別の空間的視点取得能力の指標とより強く相関することが示された (図2)。この結果は、空間的思考の認知メカニズムを研究するための土台となる測定論に貢献するものであると考えられる。本研究の成果は日本心理学会第84回大会で発表され、特別優秀発表賞を受賞した。

## ■今後の計画

空間的思考の認知メカニズムをさらに詳しく検討するために、今後は様々な研究手法を取り入れていく。具体的には、空間的思考のプロセスの個人差を明らかにするために大規模なオンライン実験・調査の実施を計画している。また、空間的思考の神経基盤を明らかにするために、こころの未来研究センターの連携MRI研究施設を利用して機能的磁気共鳴画像法 (fMRI) を用いた認知神経科学的研究も実施する予定である。

## 実践活動

## 子どもの発達障害へのプレイセラピー

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

## ■研究の概要

現在、発達障害は、脳の中枢神経系の異常による、器質的・生得的な認知発達の障害と考えられ、援助には訓練・療育的対応や、薬物療法からのアプローチが中心になっている。しかし一方で、個別の事例検討からは、発達障害への心理療法・プレイセラピーなどの意義も多く報告されてきたため、本研究プロジェクトでは、発達障害への心理療法の有効性を実証的に検討することを目的として研究を行ってきた。

プレイセラピーによるアプローチでは、発達を促進させることに目標をしぼるわけではなく、子どもの自発的で自由な遊びを中心に、セラピストとの関わりを通じて、内面の形成や自己の確立といった、子どもの心理的な成長が目指される。平成20年度より発足した本プロジェクトでは、発達障害の診断を受けた子どもに対して6カ月間のプレイセラピーを行い、子どもにどのような変化が見られるのかを発達検査などの客観的・数量的指標をもとに検討してきた。その成果はすでに、学会発表、論文、書籍という形での学術発信のほか、講演会やセミナーの形で社会に還元してきている。

## ■令和2年度の研究成果

本プロジェクトでは、発達障害へのプレイセラピーの有効性を実証的に検討するとともに、プレイセラピーにおいて子どもの変容と展開に繋がるポイントと重要な遊びを明らかにすることも目的としてきた。そこで令和2年度は、臨床実践で本プロジェクトが感じてきた箱庭療法やプレイセラピーにおける表現がジェンダーによって異なることや、子どもの心理的問題が男児は外在化するのに対し、女児は内在化しやすいとの複数の先行研究での知見に着想を得て、子どもの心理症状とプレ



図 プレイセラピーでの重要な表現と、各心理症状・性別との関連

イセラピーのプロセスに関する性差を、複数の事例論文の評定と統計的分析から検討した。調査対象とする心理症状としては、DSM-5等の複数の疫学調査をもとに、15歳以下を好発年齢とし、症状の出現率に性差がある、チック症、自閉スペクトラム症（ASD）（共に男児に多い）、場面緘黙症、抜毛症（共に女児に多い）を選択し、それぞれの症状を持つ子どものプレイセラピー84事例について、子どもの自己表現とアグレッションの方向性にとくに着目しながら、そのプロセスの性差を検討した。

4症状のプレイセラピーでの重要な表現は、図のとおりで、プレイセラピーの過程で、男児はアグレッションを分化させ、コントロールすることが課題として考えられたのに対して、女児は情緒や心的エネルギーを、外界に表出することが課題と示唆された。

本研究では、プレイセラピーの過程で生じる心理発達について、男女それぞれの特徴が明らかにされたが、たとえば男児なら内在化、女児なら外在化といった、一般的な発達過程とは反対方向の傾向を統合していくことが、プレイセラピーのゴールとして示されたことは、性差というテーマにおいて興味深い示唆ではないかと考えている。

また、自閉スペクトラム症の事例では、発達過程で後の象徴的表現の基盤となる“内的世界の分化と確立”という、より原初的な課題にセラピーで取り組むことが特徴となっており、他者

との分離にまつわるやりとりや、狭い空間の中に自分が入る遊び、高さイメージの表現などが、プレイセラピーの展開に繋がる重要な遊びとして抽出された。このほかにも、子どもの内的世界の分化と確立に関わる遊びがセラピーで生じているのではないかと考え、今後はプレイセラピー事例のメタ研究から、発達の問題を主訴とする子どもの変化を捉えるための評価指標を作成していきたいと考えている。

## ■今後の展開

今後もプレイセラピーの受け入れを継続し、発達障害の子どもに対する心理療法の機会を提供していく（プレイセラピーを希望される方はこころの未来研究センターウェブサイト「お知らせ」欄（[http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/play\\_therapy-2/](http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/play_therapy-2/)）をご覧ください）。

また、本研究は1つの事例につき6カ月という時間を要する地道な実践研究であるが、令和3年3月現在で受け入れた子どもの数は延べ85名に上っている。また、半年経過後も有料でセラピー継続を希望するケースは多く、半年経過後に重要な展開を迎えるケースも多数見られており、セラピーの長期的な展開およびその意義について、今後検討したいと考えている。

## 鎮守の森とコミュニティ経済

広井良典（京都大学こころの未来研究センター教授）

### ■本プロジェクトの概要

全国に存在する神社・お寺の数はそれぞれ約8万数千にのぼる。中学校の数は全国で約1万、あれほど多いと思われるコンビニの数は6万弱なので、これは相当な数である。戦後、急速な都市への人口移動と経済成長へのまい進の中で、そうした存在は人々の意識の中心からはずれていったが、近年では「鎮守の森」を貴重な社会的資源として再発見する動きが生まれてきている。

本研究は、ローカルなコミュニティと自然信仰が一体となった地域の拠点としての鎮守の森を現代的な視点から再評価し、①それを現代的課題である自然エネルギーの分散的な整備と結びつけた「鎮守の森・自然エネルギーコミュニティプロジェクト」や、②“自然との関わりを通じたケア”ないし世代横断的なコミュニティ的つながりの通路としての「鎮守の森セラピー」、③看取りをめぐる現代的課題と日本における伝統的な死生観を結びつけた「鎮守の森ホスピス」等という形でアクション・リサーチ的に展開するものである。

### ■鎮守の森・自然エネルギーコミュニティプロジェクト

本プロジェクトについては、2020年度に主な展開を見たのは石清水八幡宮（京都府八幡市）、宮崎県高原町、京都府亀岡市、石川県加賀市である。

石清水八幡宮については、同神社の田中朋清権宮司の理解を得つつ周辺地域での自然エネルギー導入の可能性に関する検討を進め、日立京大ラボやダイナックス都市環境研究所とも連携し、太陽光発電による本殿釣灯籠のライトアップ、地元住民による「NPO法人八幡たけくらぶ」と連携した太陽光発電による展望台での竹灯籠点灯のほか、観光庁助成の「祈りのともしび」事業への協力（2021年3月）を行った。

宮崎県高原町については、本地域は日本神話における天孫降臨の舞台となった高千穂峰のある“神話の里”と呼ぶエリアであり、1ターンの若者が作った「一般社団法人地球のへそ」や高原町役場等と連携してプロジェクトを進めてきている。2017年度からは日立京大ラボとの分散型社会システムに関する社会構想および社会実験プロジェクトともリンクさせ、同町におけるエネルギーの地産地消を視野に入れた需給調査を進めているほか、2019年10月に発足した、高原町役場や地元関係団体等からなる「たかはる自然エネルギー利用推進協議会」等とも連携しつつ、自然エネルギー調査、人や車の移動調査（モビリティ）、家計調査等を進めている。2020年度は新型コロナ禍の影響で現地での展開が十分実施できなかったが、自然エネルギーの導入等がローカルな地域内経済循環やコミュニティに及ぼす効果に関するシミュレーション等の作業を進めた。

京都府亀岡市については、同市にある若宮神社（写真）の松本宮司と連携し、同神社脇の水路にマイクロ水力発電装置ピコピカの設置を行うとともに（20年7月）、前全国小水力利用推進協議会理事の松尾寿裕氏の助言も得ながら、地元の自治会関係者とも協議しつつ今後の小水力発電導入プランの作成を行った。石川県加賀市については、山代温泉の総湯近辺に位置する服部神社の野尻宮司と連携し、上記ピコピカ設置を行うとともに（21年1月）、亀岡市と同様、今後の導入プランの作成を行った。

京都府亀岡市については、同市にある若宮神社（写真）の松本宮司と連携し、同神社脇の水路にマイクロ水力発電装置ピコピカの設置を行うとともに（20年7月）、前全国小水力利用推進協議会理事の松尾寿裕氏の助言も得ながら、地元の自治会関係者とも協議しつつ今後の小水力発電導入プランの作成を行った。石川県加賀市については、山代温泉の総湯近辺に位置する服部神社の野尻宮司と連携し、上記ピコピカ設置を行うとともに（21年1月）、亀岡市と同様、今後の導入プランの作成を行った。

### ■鎮守の森セラピー

自然との関わりが様々な面で心身の



京都府亀岡市の若宮神社

健康や精神的な充足にプラスの影響をもたらすことは様々な研究から明らかにされてきている。こうした視点を踏まえ、身近な神社の境内等で様々な世代が気功などを行い心身の癒しや世代間交流を図るとともに、ひきこもりになりがちな高齢者等にとっての地域での交流の場づくりを進めるのが「鎮守の森セラピー」の基本的な趣旨である。

### ■鎮守の森ホスピスその他

高齢化の進展の中で年間の死亡者数は顕著な増加を見ているが、日本における伝統的な自然観・死生観を踏まえたターミナルケアないし看取りのケアのあり方が重要な課題となっている。従来のホスピスはキリスト教ないし仏教を基盤とするものが主だったが、日本人の死生観においては「自然」が大きな意味をもっており、こうした関心を踏まえ、上記の石清水八幡宮とも連携し「鎮守の森ホスピス」の可能性について検討を進め、関連のニーズ調査を進めている。

この他、環境省環境事務次官・中井徳太郎氏等の参加も得て、鎮守の森コミュニティプロジェクトのこれまでの全体的成果をまとめた「鎮守の森コミュニティセミナー」の動画収録を行い（20年12月）、こころの未来研究センターのホームページを通じて公開した。

## 実践活動

## SNS カウンセリングとコミュニティ支援

河合俊雄 (京都大学こころの未来研究センター教授)

## ■プロジェクトの概要

昨今、若年層を中心にコミュニケーションツールがSNSへ移行していることに伴い、従来電話相談やメール相談が担ってきた機能をSNSでも構築することが求められている。SNSの1つである「LINE」を用いた心理相談は2017年に初めて実施されたが、対応が追いつかないほどのアクセスがあり、実際高いニーズが存在している(杉原・宮田, 2018)。一方でまだ臨床心理学の専門家の参加が進んでいないと言いがたく、SNSに特有の工夫や留意点などもあるため、技法と理論の基盤を整えることは喫緊の課題となっている。さらに、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、非接触かつどこからでも相談可能な心理的サポートの枠組みとして、SNSカウンセリングがより一層着目されるようになり、機能的な運用システム基盤の構築は急務となっている。

そこで本研究では、認知科学的視点および臨床心理学的視点を連携させて相談記録のデータを分析することを主な手法として、SNSカウンセリングにおける有効で安全なシステムの構築・臨床心理学的な理論化と技法開発を目指している。これにより、深刻な心理的問題を抱える人の増加や企業の健康経営、継続するコロナ禍における心理的サポート体制の理論的基盤作りという社会的課題の解決にもつながることが期待される。

## ■2020年度の成果

2年目となる2020年度には、(1)自機関の相談窓口の開設、(2)コロナ禍における相談事業の定量的・内容的分析、(3)相談員のロールプレイ訓練の試行実施というステップで実施した。以下に、順に報告をする。

## (1)自機関の相談窓口の開設

本プロジェクト内に企業向けの相談

窓口を開設し、2020年5月から現在まで運用している。相談は専用のシステムを通じて実装され、契約済みの企業の従業員とその家族であれば、どのような内容でも相談可能である。2020年5～6月末はコロナ禍の企業支援として無償提供をした(図)。その期間の結果をここには報告する。対象企業従業員数は1,601名であり、延べ84名の利用者があった。これは、自治体などが実施するSNSカウンセリング事業よりも高い利用率であった。加えて、通常のカウンセリングの利用率が低いとされる男性の利用も多く見られたことが特徴的であった。このような結果から、企業を通じた事業の導入は、アクセスにつながりやすい可能性があると考えられる。また、コロナに直接関連する相談は0件であった一方で、キャリア相談などポジティブな内容の相談も含まれ、コロナ禍において、生き方や家族関係について改めて考え直すとする相談例もみられた。

## (2)コロナ禍における相談事業の定量的・内容的分析

相談事業を行う自治体と連携し、コロナ禍において実施されたSNS相談事業の相談ログデータについて分析を実施した。数千事例の匿名化されたログデータについてトピックモデルによる分析を行った結果、コロナ禍の相談に特有のトピックとして、微熱や咳といった身体症状を訴える「コロナ症状不安」と、感染対策や家族についての不安などの「コロナ関連不安」が別々に抽出された。時期によるトピックの推移は、直接的不安である「コロナ症状不安」は感染者数の増減グラフの波と一致し、間接的不安である「コロナ関連不安」は3カ月後にかけて徐々におさまる傾向があった。震災後やトラウマ的な出来事の後にも、3カ月後に徐々に人のこころが回復してくること



図 自機関相談窓口のチラシ

が指摘されてきたが、コロナ禍に関してもそれに近い状態がみられた。そのプロセスを臨床心理学的に分析した結果、相談の入口はコロナ関連の不安であっても、徐々にもともと持っていた個人的な相談に移っていく割合が高いことも示唆された。これらの結果から、コロナ禍が自分自身と向き合う契機になる場合もあり、SNSカウンセリングがこころの回復の過程に貢献する可能性が考えられた。

## (3)相談員のロールプレイ訓練の試行

相談員の専門的スキル向上の課題に取り組むために、試行的にSNSカウンセリング場面のロールプレイを実施した。実施者は、相談員役だけでなく相談者役も体験し、ロールプレイ後は自分の体験および互いの体験過程を振り返った。これらを通して、相談員側のありがちな失敗例が抽出され、より柔軟な視点を相談員の中に育むための方法が模索された。今後も相談員のスキル向上のための訓練プログラムの構築を目指して、継続して取り組んでいきたい。

# 京都こころ会議

河合俊雄（京都大学こころの未来研究センター教授）

科学技術の進歩や経済のグローバル化は、人類がこれまで体験したことのない大きな変化をもたらしている。2015年4月に発足した「京都こころ会議（Kyoto Kokoro Initiative）」では、複雑化した問題に直面している人間の「こころ」に焦点をあて、「こころ」という日本語に含まれる広がりや深いニュアンスを大切にしながら、豊かなこころがはぐくまれる社会のあり方について議論を行っている。これらを通じて、今世紀を生きる人間のあるべき姿が明確になることをめざし、こころの新しい理解を Kyoto Kokoro Initiative として世界に向けて発信することを目的としている。

## ■2020年度の研究成果

### 1 京都こころ会議研究会の実施

本年度は、来年度の京都こころ会議のテーマとなる「こころと限界状況」への準備期間として、人類学や心理学、医学などの様々な分野から、若手研究者を含む専門家を招き、計5回の京都こころ会議研究会を開催した。

各研究会には、第1回：ステファノ・カルタ教授（イタリア・カリアリ大学／京都大学教育学研究科客員教授、専門：心理学）、第2回：小川さやか教授（立命館大学大学院先端総合学術研究科、専門：文化人類学）、第3回：金森万里子氏（東京大学大学院医学系研究科博士課程在籍、専門：獣医学・社会医学）、第4回：石井美保准教授（京都大学人文科学研究所、専門：文化人類学）、第5回：熊谷誠慈准教授（京都大学こころの未来研究センター、専門：仏教学）が登壇し、各発表後のディスカッションでは、他領域の研究者らと意見を交換し、幅広い視点から議論を深めた。

### 2 第5回京都こころ会議シンポジウムの開催

今年度は、当初、「こころと限界状況」をテーマとして国際シンポジウムを秋に開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、来年度に延期される運びとなった。しかし、現在の危機的状況におかれたこころについて考える必要があるとの認識から、今年度は「こころとコロナ危機」をテーマに掲げ、第5回京都こころ会議シンポジウムを開催することとした。2021年2月21日にオンライン配信された本シンポジウムでは、コロナ危機がこころにどのような影響を与えるのか、こころにとってどのような意味があるのかについて、医学・仏教学・心理学の分野の研究者3名を招いて講演と総合討論を行った。

講演1「Withコロナ時代の見取り図」では、新型コロナウイルスといかに共生していくかという視点から、山本太郎教授（長崎大学熱帯医学研究所）が講演を行った。山本教授は、元来人間とウィルスは共生しているという見解を述べた上で、現代社会を取り巻く種々の課題に取り組んでいくことが重要であるとの見解を示した。

講演2では、熊谷誠慈准教授が「仏教のこころ観から考えるコロナ危機」と題した講演を行った。熊谷准教授は、仏教の「因」と「縁」の概念を用い、コロナ禍に生じた問題の多くが人間のこころの問題に由来するものであると論じた。その上で、自己と他者の弱さを受け入れる生き方を、仏教から学ぶことの重要性について提言した。

講演3「コロナ危機と心理療法」では、田中康裕教授（京都大学大学院教育学研究科）が、人間のこころにはコロナ禍といったトラウマをも「使う」性質があると指摘し、以前より存在した時代精神の変化がコロナ禍によって加速していると述べた。また、心理療法家の役割として、決断不能性に陥り



開催ポスター

やすい日本人の個々の決断に寄り添うことが重要との見解を示した。

3つの講演に続いて行われた総合討論では、河合俊雄教授を司会として、講演者3名による意見交換が行われた。3つの講演に共通するキーワードとして、ウィルスや自然との「共生」の重要性が挙げられ、その可能性と問題について積極的に議論が交わされた。

## ■今後の展開

社会への情報発信として、京都こころ会議シンポジウムの動画をウェブ上で公開している (<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/category/kyotokokoroinitiative/kokoroinitiative-video/>)。合わせて、シンポジウムの書籍化事業についても作業を進めている。今後も、本研究活動では、日本語の「こころ」という言葉を通して、複雑化する社会における人間の「こころ」について、多様な議論を深めていきたいと考えている。

## 社会発信

## こころの研究に関する国際発信プロジェクト

内田由紀子 (京都大学こころの未来研究センター教授)

### ■プロジェクトの目的

こころの研究はこれまで広く発展を遂げてきた。特に東洋からの国際的な発信という観点は、学際的かつ国際的な共同の中で発展していくこころの研究において、ますますその重要性を増すと考えられる。本プロジェクトにおいては、1957年から査読付き冊子として発行され、京都大学で長らく継続・発展してきた学術誌『心理学』の編集と発刊を通じて、「こころ」にまつわる多様な研究の成果を、世界に向けて発信する。

2020年度中は国内外から投稿された一般投稿論文57本の査読を行った。また、編集委員体制を整え、3度の編集委員会を開催した。編集委員会では予算案、投稿料の改正、投稿と査読の進捗状況、刊行予定ならびに発行数、投稿規定の改定について話し合われた。

また、特集号について、特に人文社会科学など心理系以外の他分野からの投稿を受け付ける形で実施できる体制を整えるようにした2020年度から「Integrative Science of Human History」という学際分野での特集号の編集が実施されており、2021年度に刊行予定である。

論文のフォーマットについて編集委員会の合意があればフレキシブルにし、哲学、心理学、歴史学など、分野ごとのフォーマットで書いてもらうことがあってもよい形を検討するというような方向性も検討している。

詳細は心理学ウェブサイトを参照のこと。

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/psychologia/>

### ■2020年度刊行コンテンツ

#### 〈62巻1号〉

Yusuke TAKAHASHI : Editorial: Individual Differences in Personality Traits and Emotions

Akio WAKABAYASHI : Are Personality Disorders Extreme Variants of Normal Personality?: Queries About the Validity of the Five-Factor Model of Personality to Diagnose Personality Disorder

Jun MORIYA : Interactive Effects of Trait and State Anxiety on Visual Spatial Working Memory Capacity

Masataka NAKAYAMA & Yukiko UCHIDA: Meaning of Awe in Japanese (Con)Text: Beyond Fear and Respect

Osamu KOBORI, Yoko SAWAMIYA, Naoki YOSHINAGA, Angela C. ROWE, & Laura L. WILKINSON: Investigation of Attachment Orientation, and Affect Regulation: Use of a Novel Affect Regulation Mapping Tool in Japanese Athletes

Shinji YAMAGATA & Yusuke TAKAHASHI: Moderating Effects of Religiosity in the Genetic and Environmental Etiology of the Big Five Personality Traits in Adulthood

#### 〈62巻2号〉

Yasuhiro TANAKA : Editorial for the Special Issue

Christian ROESLER : Contemporary Psychotherapy Research, Psychodynamic Psychotherapy and Jungian Analysis

Reinalda M. da MATTA & Denise G. RAMOS : The Application of Sandplay Therapy in Children With Obsessive Compulsive Disorder

Hisae KONAKAWA : Characteristics of Japanese Dreams in Psychotherapy: Dreams That Develop Dreamers' Psychological Themes Based on a Connection With the Japanese Mentality

Kotaro UMEMURA : The Relationship of Alexithymia to the House-Drawing-Test and the Room-Drawing-Test

Chihiro HATANAKA : The Suppression and Avoidance of Aggression Among the Young Generation in Contemporary Society: Stress-Avoidance Response in

the Picture-Frustration Study

Carmela MENTO, Maria Catena SILVESTRI, Paola MERLINO, Vanessa NOCITO, Antonio BRUNO, Maria R. Anna MUSCATELLO, Rocco Antonio ZOCCALI, & Toshio KAWAI : Secondary Traumatization in Healthcare Professions: A Continuum on Compassion Fatigue, Vicarious Trauma and Burnout

#### 〈62巻3号 & 4号(合併号)〉

Mio MIYOSHI & Wakako SANEFUJI : Young Children's Selective Trust: Does Seeing Indicate Knowing?

Akihiro TOYA & Ken'ichiro NAKASHIMA : Reconsidering Terror Management Theory in Japan

Natsuki ABE, Kazuaki ABE, & Ken'ichiro NAKASHIMA : The Role of Perceived Stress and Fear of Negative Evaluation in the Process From Alexithymia to Over-Adaptation

Yanna REN, Zhihan XU, Tao WANG, & Weiping YANG : Age-Related Alterations in Audiovisual Integration: A Brief Overview

Di CHEN, Weiguo QU, Jiaxu ZHAO, & Yanhui XIANG : My Eyes Follow My Needs: Attentional Biases Towards Product Labels Within High-and Low-Social-Status Groups

Ricky K. C. AU & Chuqi ZHU : Unmet Need for Belonging and Loneliness in Determining Life Satisfaction of Mainland Chinese New Immigrants in Hong Kong

Muhammad Zubair TAUNI, Fayaz ALI, Salman YOUSAF, Hamid Ali SHAIKH, & Zia-ur-Rehman RAO : The Moderating Role of Advisor Big Five Personality on the Association Between Financial Advice and Investor Trading: Evidence From the Chinese Futures Market

# 発達障害の認知機能障害と、心理社会的要因・身体環境的要因との関連の検討

後藤幸織 (京都大学霊長類研究所准教授) + 小川詩乃 (子どもの発達・学習支援研究所)

## ■研究の背景・目的

自閉症スペクトラム障害 (ASD) は社会的コミュニケーションの問題を中核とする発達障害である。これまで、社会集団という観点に着目し、ASD児における他者の社会的順位関係の認識について検討をしてきた。私たちの実際の社会活動では、このような社会集団での関係性に加え、さらに個々の社会的コミュニケーションの場では、社会的規範 (文化的背景) や相手の見た目など、社会バイアス (社会学習戦略) が大きく影響していることが知られている。しかし、このような社会バイアスがどのような心理プロセスや脳神経基盤を介して生じるのか、また、ASDの社会的コミュニケーション問題にどのようにかかわっているのかはわかっていない。そこで、本年度からは、前年度までの研究をさらに発展させ、社会バイアスを生み出す心理プロセスとその脳神経基盤の解明を進めることを目的とした。

## ■社会バイアスを生み出す心理プロセスの予備調査

新型コロナ COVID-19 流行のため、予定していた ASD 児や典型発達 (TD) 児を対象とした心理課題等の実施はできなかった。そこで、本年度は、健常成人を対象に予備調査を実施することとした。

予備調査では、42名の健常成人を対象とした。研究参加者には、社会バイアス課題 (Social Bias Test; SB) として、図1に示すような2名の人物について、画面に表示されている指示に沿ってそれぞれ評価するように求めた。また、社会規範に対する遵守の強さを社会規範質問 (Social Norm Questionnaire; SN) を用いて調査した。このSBとSNの2つの社会バイアスに対する指標に対してどのような認知・情動機能が関

連しているかを調べるため、さらに、ストレス・不安・抑うつに関する質問紙による調査 (DASS-21)、直感的・解析的思考傾向に関する質問紙による調査 (Rational-Experiential Inventory)、ならびに認知的・情動的このころの理論に関する心理課題 (Yoni 課題) を実施し、これらの要因がSBとSNにどのように関連するかを、重回帰分析ならびに共分散構造分析によって解析した (図2)。その結果、認知的このころの理論はSBとSNともに関連するが、SBはより認知的な心理プロセスが、一方SNはより情動的な心理プロセスがそれぞれ関連していることが明らかとなった。

## ■今後の予定

社会バイアスを生じる脳神経基盤の解明のため、予備調査で実施した課題を遂行する際の研究参加者の脳波計測を実施した。この脳波計測のデータ解析を進め、とりわけ前頭前野が社会バイアスとどのように関連するかを明らかにする予定である。

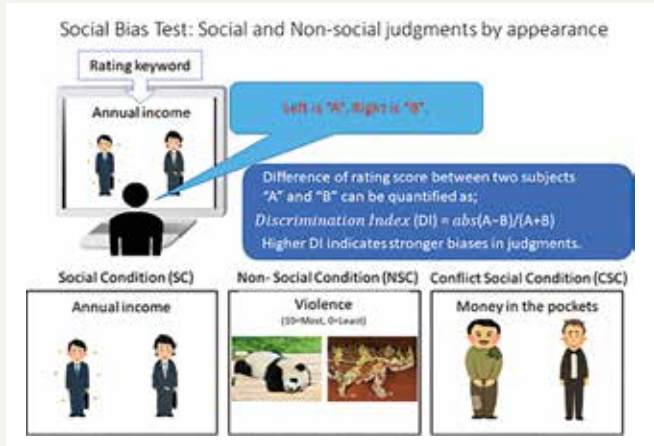


図1 社会バイアス課題の例

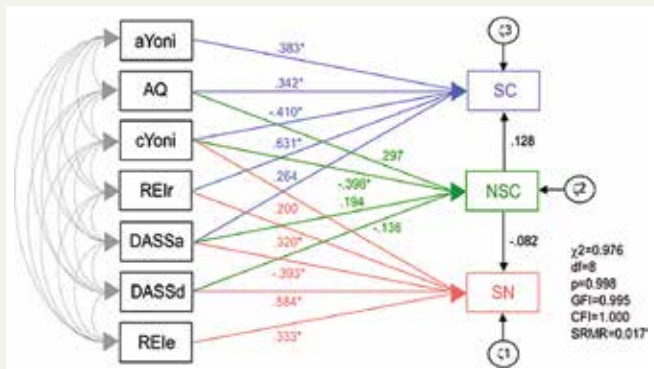


図2 共分散構造分析によるSBとSNに関連する心理プロセスの解析  
略語: SC=社会バイアス、NSC=非社会的認知バイアス、SN=社会規範、aYoni=情動的このころの理論、AQ=自閉症スペクトラム指数、cYoni=認知的このころの理論、REIr=分析的思考傾向、DASSa=不安傾向、DASSd=うつ傾向、REle=情動的思考傾向、GFI=Goodness Fit of Index、CFI=Comparative Fit of Index、SRMR=Standardized Root Mean Square Residual

また、新型コロナ流行の状況が改善され次第、ASD児とTD児で同様の課題を実施し、成人と児童との比較ならびに、ASDの社会コミュニケーション問題において社会バイアスがどのようにかかわっているのかを明らかにする予定である。



## 一般公募プロジェクト

## ケアの認知心理学

布井雅人 (聖泉大学人間学部講師、現在椋山女学園大学人間関係学部准教授)

## ■本研究の目的

良好なケアの実現には援助者と被援助者の良好な関係性が不可欠であり、そのためにはコミュニケーションが必要と考えられる。認知症ケア技法の1つであるユマニチュードにおいては、援助者がケアの受け手である被援助者に対して抱いているポジティブな感情(尊重や優しさ)を伝えるために、ケア時において話す・見る・触れるといったマルチモーダルなコミュニケーションを実践することが重視されている(本田・ジネス・マレスコッティ, 2014)。実際に実験でも、ベッド上にいる参加者の顔に他者が笑顔で視線を向けていることが、参加者の感情状態やその他者に対する印象をポジティブなものにすることが明らかにされている(布井・中澤・吉川, 2021)。

しかし、ケア場面によっては使用できるモダリティが制限される場合もある。中でも、車椅子介助のように、援助者が被援助者の背後に存在する場面においては、視線や表情といった視覚情報を用いたコミュニケーションを行うことができなくなってしまう。このような状況に対応するために、ユマニチュードにおいては、積極的な声掛けに加え、車椅子乗車者の肩に触れながらの移動介助が行われている。触れるということは、背後からでも伝えられる非言語情報であり、声掛けと組み合わせることでマルチモーダルなケアの実現が可能となる。車椅子乗車者という視点で考えると、姿を直接確認することができない背後の人物の存在を、触れられることによって感じる事ができる。その結果、不安感の低減などの心理面への影響が生じていると考えられる。そこで本研究では、車椅子介助時に

乗車者の肩に触れることが、乗車者の心理に及ぼす影響について、大学生を対象として検討した。

## ■方法

大学生参加者が、知り合いではない同性の大学生実験者が押す車椅子に乗り、体育館内の決められたコースを移動するという実験を行った。車椅子での移動は十分にゆっくりとしたスピードで行われ、曲がったり止まったりする際には声掛けを行った。車椅子体験は、実験者が両手で車椅子のハンドルを持って移動する接触なし条件と、実験者が片手を参加者の肩に添える接触あり条件で行われた(図1)。接触あり条件においては、左右に曲がる際に遠心力がかかる外側の肩を支えるように、肩に添える手を左右で入れ替えた。接触なし条件と接触あり条件は1試行ずつ行われ、その実施順序は参加者間でカウンターバランスをとった。参加者は、各車椅子体験後にその体験についての評定を行った。評定は、車椅子の押し手への評価4項目と、車椅子体験自体への評価5項目であり、7段階で実施した。

## ■結果・考察

実験の結果(図2)、車椅子の押し手への評価のうち、親しみを感ずる程度と気がきくと感ずる程度の2項目にお



図1 各条件における車椅子の押し方

いて、接触あり条件のほうが高く評価された。さらに、車椅子体験自体への評価においても、安心できた程度は接触あり条件のほうが高く評価され、感じられた速さの程度は接触あり条件のほうがゆっくりであると評価された。これらの結果は、触れながらの車椅子操作が、乗車者の心理にポジティブな影響を及ぼしうることを示すものである。車椅子介助時は、援助者が被援助者の背後に存在し、視覚的な情報を用いたマルチモーダルなケアが制限されるが、触覚というモダリティを積極的に用いることで、それらを補えたことが、乗車者にポジティブな感覚をもたらしたと考えられる。

今後は、高齢者を対象とした実験や、実際の建物内での移動時における実験などを通して、実際の車椅子介助時に近い状況で、触れることによる影響についての知見を提供していく必要があるだろう。

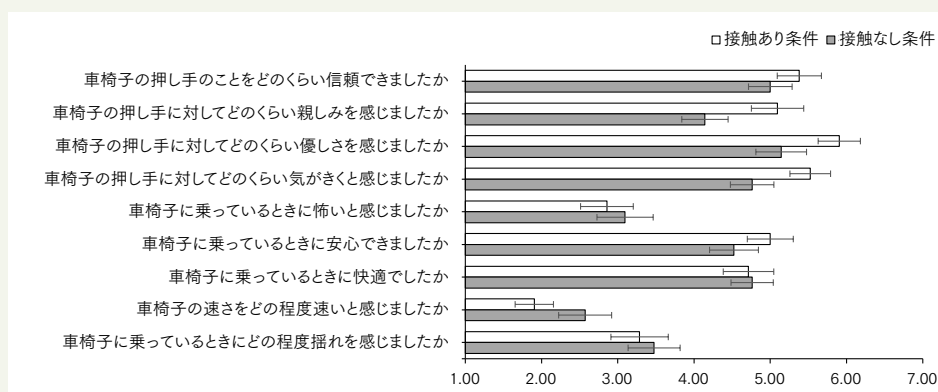


図2 各条件における評定平均値(エラーバーはSE)

# 腸内フローラ移植による身体症状の改善と心理的变化について

城谷仁美 (ルークス芦屋クリニック臨床心理士)

## ■研究の概要と目的

近年、腸内細菌がわれわれの健康維持や疾患発症に関与していることが明らかになり、腸内細菌叢の乱れ (dysbiosis) の修復を行うことで、「腸-脳-腸内細菌相関」と言われているように身体疾患のみならず、抑うつや自閉症スペクトラム障害にも改善がもたらされる可能性が示唆されている (Kurokawa et al, 2018) (Dae-Wook Kang et al, 2019)。当クリニックでは、2017年より様々な疾患に対して糞便微生物移植 (FMT) を実施している (図)。現在までに先行研究と同様に症状の改善だけではなく心理的な変化も多く見られたことから、本研究プロジェクトではFMTの前後における症状や腸内フローラの変化とともに、感情や描画、夢なども含めたより多層的な心理的視点から分析し、身体疾患の治療の1つであるFMTが患者の心と身体に与える影響について考察することを試みたい。

## ■研究方法と結果

### 1. FMT前後の感情の変化

一般財団法人腸内フローラ移植臨床研究会から菌液の提供を受けてFMTを行った当院と他院合わせて31例 (アトピー性皮膚炎11例、潰瘍性大腸炎 (UC) 5例、過敏性腸症候群 (IBS) 8例、その他の疾患7例) に対し、FMT前後で気分プロフィール検査 (POMS) を施行し比較した。結果は先行研究と同様に全体では移植後は「抑うつ」「混乱」「疲労感」の因子とともに総合的な気分状態を示す「TMD」も有意に改善していたが、UCではどの因子も有意差は認めず、IBSは「疲労感」、アトピー性皮膚炎では「疲労感」「抑うつ」「不安」「TMD」とより多くの因子において有意に改善していた。このように疾患によって移植による感情の改善には差異があることが示唆された。

### 2. 心の構造と主体の動き、症状、腸内フローラとの関係

さらに当院でFMTを受けた26名と通常の身体的治療や心理療法を行った非移植群22名について、症状や腸内フローラの変化と心理的指標として「夢の構造」や「描画テスト」、さらに現実面での自己主張や自ら選択し決定するなどの一連の「主体の動き」について比較した。なお、「腸内フローラ分析」は次世代シーケンサーを用いて腸内細菌のメタゲノム解析を行った。

まずFMT群では描画テストにおいて、移植後には内側が吹き出してくるような「出る」動きが多く見られた。また治療前は上記のような「主体の動き」の陽性率が41.7%であったが治療後は83.3%になり、有意差を持って増加した。一方、非FMT群においては治療前より「主体の動き」は84.6%と高い陽性率であり、治療後には92.3%と増加したものの有意差は認められなかった。

疾患別では、腸疾患の移植群12例のうち9例は症状、腸内フローラともに改善しており、心理学的指標である描画テストでは「出る」動きに加えて、夢の中に他者が出現したり、他者と関係を持つなど夢の構造も変化しており、「主体の動き」も活性化していた。一方、身体的指標において変化がなかった残りの3例の描画や夢は、バウムテストにおいても変化せず、木をイメージで描けず模写してしまうなどの象徴性の弱さが見られ、「主体の動き」も見

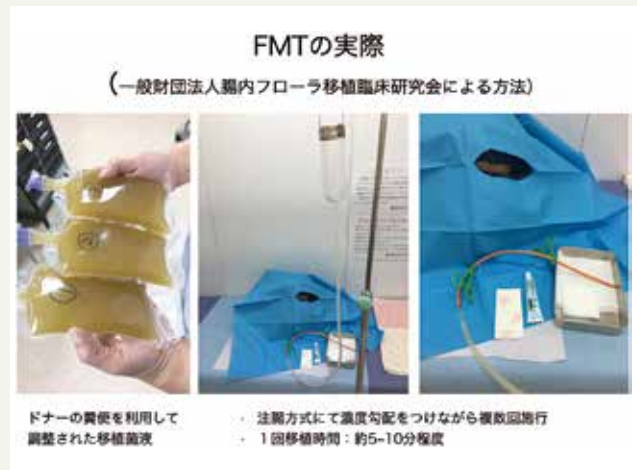


図 FMT実施方法

られなかった。このように葛藤を保持する心の器が機能せず、身体化していることがうかがえた。

## ■考察と今後の課題

上記の結果から、dysbiosisの改善と身体症状の改善は相関することが示唆されるとともに、それらの改善には心の象徴化する力や主体の発露とその動きが関連することが考えられた。今後の課題として、症例数を増やし疾患別にも分析を進めるとともに、FMTのより長期的な変化も考察していきたい。

### 参考文献

- 河合俊雄編(2010)『発達障害への心理療法的アプローチ』創元社, pp5-50.
- Dae-Wook Kang et al.(2019). Long-term benefit of Microbiota Transfer Therapy on autism symptoms and gut microbiota. Scientific Reports, 9(5), 5821.
- Shunya Kurokawa et al.(2018). The effect of fecal microbiota transplantation on psychiatric symptoms among patients with irritable bowel syndrome, functional diarrhea and functional constipation: An open-label observational study. Journal of Affective Disorders, 235, 506-512.

## 一般公募プロジェクト

## こころに関する可視化情報の有用性の探索と予防教育への応用

加藤奈奈子 (奈良女子大学大学院生活環境科学系助教)

## ■本研究の目的

近年IoT技術の進歩に伴い心拍や睡眠の深度等精緻なデータを簡便に得られるウェアラブル端末が普及することによって、生理心理的な自分の状態を簡便に「可視化」することが可能となった。さらに今般の新型コロナウイルス感染症の流行下では、体温測定等日々の健康管理を個人が担うことが社会的に要請され、感染症拡大防止の要とされている。一方、これまで「見えない」対象であり、心理療法の場で十分な準備を経て意識化されていたところが容易に扱える情報となるに伴うリスクについては十分に議論がなされていない。そこで本研究では、「こころ」についての可視化情報をどのように認知し統制するか、またはそうした統制が、どのような要因が影響して過度になされるのかという行動とパーソナリティ特性との関連を分析し、こころの可視化情報が有益となりうる要因を探ることを目的とする。

## ■2020年度の研究成果

## 1. 内田クレペリン精神検査事例と質問紙との関連の検討

可視化情報の有用性については、情報の受け取り手がどのような行動に結びつけるのかという点から検討することが可能であると捉えた。そこで本研究では、作業量を可視できる内田クレペリン精神検査（以下U-K）を用い、PF値（平均作業量から算出した「定型曲線」をベースとする理論的作業量とのズレの値）と性格特性を測る3軸（発動性、可変性、亢進性）に着目して事例検討を行った。事例は、本調査に先行して行った調査事例（平成27-29年度挑戦的萌芽研究15K13151 長期閉鎖環境下での主観的評価と生理指標にみるストレス予防に関する実証研究）の中から複数回U-Kを実施し、経過時

間ごとの自身の作業量が「見える」ことによって統制がなされた事例を2例選出し、気分変化を測定する

POMSおよびU-KのPF値を参照した。

複数回実施したU-Kの中でもっともPF値が大きく、作業量を無理に一定にするなど亢進性の過度が認められた事例におけるPOMSの結果は、活力は下がっているものの疲労感は強くなく、行動面に現れた疲労を補おうとする行動と質問紙による主観的な気分評価とは連動しない結果となった。また、全体的に作業量を抑えている横ばい傾向が強い事例においては、疲労要因が強くなる後半部分において亢進性が過度になっていることが考えられたものの、POMS結果ではほぼ変化は得られなかった。さらに事例の協力者のストレス対処や自我状態質問紙から、作業水準を維持しようとコントロールし、それを補うように無理して作業水準を維持しようとする行動のパーソナリティ要因として、ストレス時に「計画」などの対処を行うことやバランスのとれた自我状態を持っているなど意識的な面でのバランスの重視や能動的な統制を思わせる結果が得られた。これらのことから、行動を能動的に調節する要因が関連し、本来自然に表出されてもおかしくない疲労感を抑制している可能性が示唆された。

## 2. U-Kテスト中の視線と着目点の抽出

先述した「調整」がU-K中にどのようになされるかを把握するため、1名を対象に予備調査を行った。予備調査では、心電図を装着し心拍を測定する



図 遠近の切り替えの例。左では手のあたりにあった視点が、右では数字にびったり合わせている

ことで検査中の生理的な評価と検査後に語られた内観との関連性の検討を試みた。

対象者のU-KのPF値を算出し、理論作業量との偏差が大きかった時点の視線分析と照合した結果、内観で述べられていた「遠近の切り替え」(図)が複数回見られた。また滑らかに横に滑るような視線の動きではなく、小刻みに視点が定まらない「上下の揺れ」および視点が今ある数字よりも前の作業部分に移動する「目標値の確認」などの動きが見られた。心拍は検査前半よりも検査後半のほうが多く、とくに後半の中間部分が最大であった。これは協力者の内観の作業遂行の辛さのピークと一致していた。後半の終末部の内観では、「諦めた」と述べられていたことから、疲労に対して意識的に抗うことが心拍数と連動している結果となったことがうかがえた。

本研究は、事例の検討および予備調査を行い、今後の精査は必要ではあるものの、能動的な調節機能特性を測定しうる尺度を使用することや視線分析における着目点の抽出などがなされ、現在本調査のデザインを整えている段階にある。今後調査において、個人がこころの可視的情報を有益に使用できる要因を探るとともに、情報を過度に調整することによりメンタルヘルスが維持しにくくなる要因について考察していく。

●2020年4月1日 熊谷誠慈が准教授、鈴木優佳が特定助教、武藤拓之が特定助教、中沢新一が特任教授に着任。

●4月7日・16日 京都大学人社未来形発信ユニット特別企画「対談シリーズ・立ち止まって、考える」(YouTube配信) 主催: 京都大学人社未来形発信ユニット 講師: 広井良典、出口康夫、内田由紀子 合計視聴回数: 2,295回(2021年5月付)

●4月17日 企業向け支援事業・LINEこころの相談室開室。(6月末まではコロナ対策緊急支援として無料開室)

●6月25日、7月2日・9日、9月17日・24日 『日本仏教セミナー(八宗綱要)』(於: 稲盛財団記念館3階中会議室・稲盛財団記念館1階京都賞ライブラリーセミナー室) コーディネーター: 熊谷誠慈、安田章紀 企画・進行: 熊谷誠慈 参加者数: 各回30名

●7月4日～8月30日 「京都大学オンライン公開講義“立ち止まって、考える”」リレー講義(YouTube配信) 講義4: 広井良典「コロナ後の社会の展望——分散型システムへの移行と『生命』の時代」、講義5: 河合俊雄「コロナとの関わりとこころの古層」、講義6: 佐伯啓思「新型コロナと現代文明」、講義7: 内田由紀子「わたしたちはパンデミックにどう向き合うのか? 幸福観の文化差からの考察」、講義8: 阿部修士「道徳的意思決定の心理学」



第2回京どころ会議研究会

主催: 京都大学人社未来形発信ユニット 合計視聴回数: 54,900回(2021年5月付)

●8月6日 大阪府とSNSカウンセリングについての共同研究を開始。

●8月19日 2020年度第2回京どころ会議研究会「窮地における嘘と笑い—タンザニアの都市住民を事例に」(於: 稲盛財団記念館3階中会議室)

講師: 小川さやか(立命館大学先端総合学術研究科教授) 企画・進行: 河合俊雄 参加者数: 15名

●8月27日 学術広報誌『こころの未来』第23号(特集「失敗するこころ」)刊行。

●9月21日 『SNSカウンセリング・

ケースブック』出版記念イベントの出版記念YouTubeライブ開催。

●9月8日～11月2日(受賞発表日は10月22日) 阿部修士准教授らのポスター発表「側坐核における恋人の神経表象——マルチボクセルパターン解析を用いた検討」が日本心理学会第84回大会で「特別優秀発表賞」を受賞。

●9月8日～11月2日(受賞発表日は10月22日) 武藤拓之特定助教の研究「Spatial Orientation Testの得点化方法の改善——フォン・ミーゼス分布による角度データのモデリング」が日本心理学会第84回大会で「特別優秀発表賞」を受賞。